

第二調

「スポタ」の小晩課

「主よ、爾に籲ぶ」に八調經の主日の讚頌三章を歌ふ、其第一は二次。第二調。

句、我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。
來りて、世の無き先に父より生れし神の言、童貞女マリヤより身を取りし者に伏拜せん。蓋彼は親ら望みし如く、十字架を忍びて、葬に付されたり、死より復活して、我迷へる人を救ひ給へり。

ハリストス吾が救世主は我等を罪する書券を十字架に釘うちて之を抹し、死の權を空しくし給へり。我等其三日目の復活に伏拜す。

我等は天使首と共にハリストスの復活を讚め歌はん。蓋彼は我等の靈の贖罪主及び救世主なり、且畏るべき光榮と勁き能力とを以て還來りて、其造りし世界を審判せん。

光榮、今も、生神女讚詞、定理歌、第二調。

嗚呼至大なる奧密や、我奇蹟を見て、神性を傳ふ。蓋エムヌイルは人を愛する主として天性の門を啓き、神として童貞の鑰を壞らざりき。乃聞くに因りて入りし

第二調 「スポタ」の小晩課 二六五

第二調 「スポタ」の小晩課 二六六

ごとく、斯く胎内より出でたり、孕まれし如く、斯く人體を取れり、無欲にして入りて、言ひ難く出でたり。預言者の言へる如く、此の門は閉されて、何人も此より入るを得ず、唯獨大仁慈なる主イズライリの神は入らん。

次ぎて「穩なる光」。提綱、主は王たり、彼は威嚴を衣たり。三次。句、主は能力を衣、又之を帶にせり。次に「主よ、我等を守り、罪なくして此の晩」。司祭聯禱を誦せず、我等直に左の讚頌を歌ふ。

挿句に主日の讚頌、第二調。

ハリストス救世主よ、爾の復活は全世界を照せり、爾は己の造物を召し給へり。全能の主よ、光榮は爾に歸す。

又、至聖なる生神女の讚頌、同調。

句、我爾の名を萬世に誌さしめん。

凡ての悲しむ者の喜、侵害せらるる者の轉達、貧しき者の養育者、遠人の慰藉、瞽者の杖、弱き者の眷顧、勞苦する者の庇蔭及び保護、孤獨の者の扶助たる至りて潔き者、至上の神の母よ、祈る、務めて爾の諸僕に救はるるを得しめ給へ。

句、女よ、之を聴き、之を觀、爾の耳を傾けよ。

我不當なる者は凡の不法を行ひ、凡の罪を犯して、凡の定罪に當れり。童貞女よ、我に痛悔の心を與へて、我を彼處に定罪せられざる者と爲し給へ。蓋我爾を祈禱者として捧げ、爾を轉達者として呼ぶ、神の聘女よ、我に辱を得しむる母れ。

句、民中の富める者は爾の顔を拜まん。

いさぎよ かみ よめ われら ぞうぶつ しゅ およ しゅざい まえ おい なんじ ほか た かくれが わ かみ
潔き神の聘女よ、我等には造物主及び主宰の前に於て爾の外に他の避所なし。我が神
のはは あい もつ なんじ おおい した はし つ われら なんじ ねつせつ てんたつ とお なか
の母よ、愛を以て爾の帡幪の下に趨り附く我等を爾の熱切なる轉達より遠ざくる勿
われら われら はずか なか つと なんじ たすけ あた われら のぞ いかり すく たま
れ、我等を辱しむる勿れ。務めて爾の祐助を與へて、我等に臨む怒より救ひ給へ。

光榮、今も、生神女讃詞、第二調。

しょうじょ かみ よめ なんじ よ な な せかい しよくざい ため たれ よろ かな なんじ
少女・神の聘女よ、爾に因りて成りたる世界の贖罪の爲に誰か宜しきに合ひて爾を
さんよう なんじ さんび え ゆえ われら かんしゃ なんじ よ い しんせい はな
讃揚し爾を讃美するを得ん。故に我等感謝して爾に呼びて云ふ、アダムを神成し、離
れたるを合せし者よ、慶べ、爾の子我が神の輝ける復活にて我が族を照しし者よ、慶
あわ もの よろこ なんじ こ わ かみ かがや ふっかつ わ やから てら もの よろこ
べ。蓋我等「ハリストティアニン」の族は斷えず爾を讃美す。

次ぎて「主宰よ、今爾の言に循ひて」。聖三祝文。「天に在す」の後に主日の讃詞。
小聯祷。發放詞。



第二調 「スポタ」の小晩課 二六七
第二調 「スポタ」の大晩課 二六八

「スポタ」の大晩課

「主よ、爾に籲ぶ」に十句を立てて、八調經の主日の讃頌三章、アナトリーの四章、
月課經の三、或は四、或は六章を歌ふ。若し聖人の祭日ならば、光榮、月課經の、今
も、調の第一の生神女讃詞。

主日の讃頌、第二調。

わ たましいひとや ひ いだ われ なんじ な さんえい たま
句、我が靈を獄より引き出して、我に爾の名を讃榮せしめ給へ。
きた よ な さき ちち うま かみ ことば どうてい じよ み と もの ふくはい
來りて、世の無き先に父より生れし神の言、童貞女マリヤより身を取りし者に伏拜
せんとす。蓋彼は親ら望みし如く、十字架を忍びて、葬に付されたり、死より復活し
て、我迷へる人を救ひ給へり。

なんじ おん われ たま と き ぎじん われ めぐ
句、爾恩を我に賜はん時、義人は我を環らん。
ハリストス吾が救世主は我等を罪する書券を十字架に釘うちて之を抹し、死の權を空
しくし給へり。我等其三日目の復活に伏拜す。

しゅ われ ぶか と ころ なんじ よ しゅ わ お え き たま
句、主よ、我深き處より爾に呼ぶ。主よ、我が聲を聴き給へ。
われら てんししゅ と も ふっかつ ほ う た けだしかれ われら たましい しよくざいしゅ およ
我等は天使首と共にハリストスの復活を讃め歌はん。蓋彼は我等の靈の贖罪主及び
救世主なり、且畏るべき光榮と勁き能力とを以て還來りて、其造りし世界を審判せん。

又讃頌、アナトリーの作。同調。

ねが なんじ みみ わ いのり こえ き い
句、願はくは爾の耳は我が祷の聲を聴き納れん。
てんし なんじ じゅうじか てい ほうむ しゅざい つた おんなたち い きた しゅ
天使は爾十字架に釘せられて葬られたる主宰を傳へて、女等に言へり、來りて、主
の臥したる處を觀よ、蓋彼は言ひし如く復活せり、全能者なればなり。故に我等爾
惟一不死の者に伏拜す。生命を賜ふハリストスよ、我等を憐み給へ。

句、主よ、若し爾不法を糾さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人の爾の前に敬まん爲なり。

爾の十字架にて木に縁る詛を空しくし、爾の葬にて死の權を滅し、爾の復活にて人類を照し給へり。故に我等爾に籲ぶ恩主ハリストス吾が神よ、光榮は爾に歸す。

句、我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を待む。

主よ、死の門は畏懼に因りて爾の爲に啓け、地獄の門衛は爾を見て懼れたり、蓋爾は銅の門を破り、鐵の柱を折き、我等を幽闇と死の蔭より引き出し、我等の縛を截ち給へり。

句、我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

救の歌を歌ひて、口を齋しくして籲ばん、皆來りて、主の家に伏拜して曰はん、

第二調 「スポタ」の大晩課 二六九

第二調 「スポタ」の大晩課 二七〇

木の上に釘せられて、死より復活し、父の懷に在す主よ、我等の罪を淨め給へ。

他の讚頌、至聖生神女に捧ぐ、月課經の讚頌の無き所に之を歌ふ。アモレイのパワエルの作。第六調。

句、願はくはイズライリは主を待まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、彼はイズライリを其悉くの不法より贖はん。

倚頼なき者の堅固なる憑恃、罪に陥る者の拯救たる讚め歌はるるマリヤ、潔き生神女よ、我が此の禱を受けて、爾の母たる祈禱を以て我に生涯犯しし諸罪の赦を獲しめ給へ。女宰よ、爾の大なる憐に由りて、我を危難及び將來の定罪より救ひ給へ。

句、萬民よ、主を讚め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讚めよ。

我が在世の日は悪し、悪しくして罪惡に充つ、凶惡なるサタナ甚しく我を擾すに因る。神の母よ、爾我を其害より免れしめ、至聖なる者よ、爾我を其口より脱し給へ、我悉くの憑恃を爾に負はせればなり。爾の熱切なる祈禱を以て我を救ひ給へ。

句、蓋彼が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。

耻を得ざる轉達者よ、慶べ、至善なる生神女よ、慶べ、世界の鑄潔よ、慶べ、悲しむ者の喜、颯風に遭ふ者の停泊よ、慶べ、凡そ危難に在る者の扶助者よ、慶べ。童貞女・純潔なる女宰よ、我をも悉くの苦難より護り給へ。

光榮、今も、生神女讚詞。

恩寵來りて、法律の影は去れり、蓋燃ゆる棘の焚けざりし如く、童貞女は生みし後も永く童貞女なり。燄の柱の代に義の日は出でて光る、モイセイの代に我が靈の救者ハリストスは現れたり。

次ぎて香爐捧持の聖入。「穩なる光」。提綱及び聯禱。

挿句に主日の讚頌、第二調。

ハリストス救世主よ、爾の復活は全世界を照せり、爾は己の造物を召し給へり。全能の主よ、光榮は爾に歸す。

ステイヒラ
又讚頌

句、主は王たり、彼は威嚴を衣たり。

救世主よ、爾は木にて木に縁る詛を空しくし、爾の葬にて死の權を滅し、爾の復活にて吾が族を照し給へり。故に我等爾に呼ぶ、生命を施すハリストス我が神よ、光榮は爾に歸す。

句、故に世界は堅固にして動かざらん。

第二調 「スポタ」の大晩課 二七一

第二調 「スポタ」の大晩課 二七二

ハリストスよ、爾は十字架に釘せらるる者と顯れて、造物の美しきを變易せり。惟兵卒は殘忍にして戈を以て爾の脅を刺し、エウレイ人は爾の權を知らずして墓を封印せんことを求めたり。慈憐に由りて葬を受け、三日目に復活せし主よ、光榮は爾に歸す。

句、主よ、聖徳は爾の家に屬して永遠に至らん。

生命を施すハリストスよ、爾は死に屬する者の爲に甘じて苦を受けて、有能者として地獄に降り、彼處に爾の降臨を待つ者を強き者の手より奪ひて、地獄に易へて樂園に住むを賜へり。故に爾の三日目の復活を讚揚する我等にも諸罪の潔淨と大なる憐とを與へ給へ。

光榮、今も、生神女讚詞。

嗚呼新なる奇跡、古の悉くの奇跡に勝る者や。誰か夫なき母が萬物を有つ主を生みて、其手に抱くを知りたる、此の産は神の旨なり。至りて潔き者よ、爾が嬰兒として己の手に抱きし主の前に母の勇を以て、我等爾を尊む者の靈を憐みて救はんことを常に祈り給へ。

次ぎて「主宰よ、今爾の言に循ひて」。聖三祝文。「天に在す」の後に、

トロバリ
主日の讚詞、第二調。

死せざる生命よ、爾死に降りし時、神の性の光にて地獄を殺せり。死せし者を地下より復活せしめし時、天軍皆呼びて曰へり、生命を賜ふ主ハリストス我が神よ、光榮は爾に歸す。

生神女讚詞

生神女よ、爾の奥義は皆智慧に超ゆ、皆至榮なり。貞潔の封ぜられ、童貞の守らるるに、爾は實の母と知られて、眞の神を生み給へり。彼に我等の靈の救はれんことを祈り給へ。



「スポタ」の晩堂課

至聖なる生神女の規程、讒誣憂愁患難に遇ふ者も之を歌ふべし、第二調

第一歌頌

イルモス、^{まった そな} 全く備はれる力は昔^{ちから わかし} ファラオンの^{ぜんぐん} 全軍を^{ふかみ} 深水に敷き、^し 人體を取りし言、^{じんたい と} 讃榮せらるる主は^{さんえい} 萬の^{しゆ} 悪を致す罪を^{ほろぼ} 滅し給へり、^{かれ おごそか} 彼 嚴に^{こうえい} 光榮を^{あらわ} 顯したればなり。

第二調 「スポタ」の晩堂課 二七三

第二調 「スポタ」の晩堂課 二七四

凡そ^{およ} 憂に在る者に^{うれい} 速に^あ 聆き、^{もの すみやか} 悲に在る者を^き 助くる至善なる^{かなしみ} 生神女、^あ 憂ふる者の^{もの} 歡喜^{たす} たる女^{しぜん} 幸よ、^{しょうしんじょ} 畏れずして^{うれ} 爾を^{もの} 歌ふ者に^{しょうしんじょ} 恩寵を^{よろこび} 與へ給へ。
至りて^{いた} 豊なる^{ゆたか} 恩寵を^{おんちよう} 獲たる女^え 幸、^{じよさい} 憂ふる者の^{うれ} 歡喜よ、^{もの} 爾の^{よろこび} 毅然たる^{なんじ} 祈祷を^{きぜん} 以て、^{きとう} 我^{もつ} 卑微なる^{われ} 爾の^{ひび} 僕を^{なんじ} 諸難より^{ぼく} 援け^{しよなん} 給へ。^{たす}

光榮

生神女よ、^{しょうしんじょ} 祈る、^{いの} 爾に^{なんじ} 趨り^{はし} 附く我等を見^つ ゆると見^{われら} えざる^み 諸敵より^み 援けて、^{しよてき} 我等に^{たす} 仇^{われら} する者の^{あだ} 凡の^{もの} 謀^{およそ} を破り^{はかりごと} 給へ。^{やぶ} **今も**
生神女よ、^{しょうしんじょ} 爾に^{なんじ} 祈る、^{いの} 我より^{われ} 人の^{ひと} 辱^{はずかしめ} と悪謀者の^{あくぼうしや} 讒言^{ざんげん} とを^{のぞ} 除きて、^{われ} 我に^{なんじ} 爾が^{よういく} 養育^{やしよく} せし^{しゅ} 主を^{ねつせつ} 熱切に^{さんえい} 讃榮^{たま} せしめ給へ。

第三歌頌

イルモス、^き 木を^{もつ} 以て^{つみ} 罪を^{ころ} 殺しし主よ、^{しゅ} 我等を^{われら} 爾の^{なんじ} 中に^{うち} 堅めて、^{かた} 爾を^{なんじ} 畏る^{おそ} 畏を^{おそれ} 我等、^{われら} 爾を^{なんじ} 歌ふ者の^{うた} 心に^{もの} 植^う え給へ。^{たま}
讃美^{さんび} たる生神女よ、^{しょうしんじょ} 諸敵の^{しよてき} 空しき^{むな} 悪謀^{あくぼう} を破り^{やぶ} て、^{なんじ} 爾の^つ 盡き^{きとう} ざる^{もつ} 祈祷を^{なんじ} 以て^ほ 爾を^{うた} 讃め^{うた} 歌^{うた} ふ我等を^{われら} 救^{すく} ひ給へ。
潔^{いさぎよ} き者よ、^{もの} 爾の^{なんじ} 慈憐^{じれん} なる^め 眼を^{もつ} 以て^{われ} 我を^{かえり} 顧^み みて、^み 見ゆると見^{しよてき} えざる^{およそ} 諸敵の^{あくぼう} 凡の^{なんじ} 悪謀^{うた} より^{うた} 援けて、^{われ} 彼等^{かれら} の^め 眼の^{ひとみ} 眸子^{くら} を^{たま} 味^{たま} まし給へ。

光榮

童貞女よ、^{どうていじよ} 常に^{つね} 我等を^{われら} 滅^{ほろぼ} さんと謀^{はか} る^{しよてき} 諸敵の^あ 悪しき^{こうげき} 攻撃^ひ 、^{ごと} 火の^や 如く^{もの} 焚く^{なんじ} 者を、^{きとう} 爾の^{きとう} 祈祷^{うた} の^{うた} 露^{つゆ} にて^け 消^{たま} し給へ。^{たま} **今も**
滅^き えざる^{ともしび} 燈^{つね} 、^{かがや} 常に^{あかつき} 輝^{こうえい} く^ひ 曉^う 、^{もの} 光榮^{うれい} の^よ 日^{かこ} ハリストスを^{われ} 生^{なんじ} みし^{きとう} 者よ、^{てら} 憂愁^{たま} の^{たま} 夜^{たま} に^{たま} 圍^{たま} まる^{たま} る^{たま} 我^{たま} を^{たま} 爾^{たま} の^{たま} 祈祷^{たま} にて^{たま} 照^{たま} し給へ。

第四歌頌

イルモス、^{しゅ} 主よ、^{われ} 我^{なんじ} 爾の^{こえ} 聲、^{なんじ} 爾が^の 野に^よ 呼ぶ^{こえ} 聲と^な 名^{もの} づけし^き 者を^{なんじ} 聞^{たすい} けり、^{うえ} 爾が^{なんじ} 多水^{たすい} の^{うえ} 上^{うえ} に^{うえ} 轟^{うた} きて、^{うた} 爾の^{なんじ} 子^{なんじ} の^{なんじ} 事^{なんじ} を^{なんじ} 證^{なんじ} せし^{なんじ} 時、^{なんじ} 彼は^{なんじ} 現^{なんじ} れし^{なんじ} 聖^{なんじ} 神^{なんじ} に^{なんじ} 満^{なんじ} て^{なんじ} られて^{なんじ} 籲^{なんじ} べり、^{なんじ} 爾は^{なんじ} ハリストス、^{なんじ} 神の^{なんじ} 智慧^{なんじ} と^{なんじ} 能力^{なんじ} なり。

神の^{かみ} 母^{はは} よ、^{われら} 我等^{なんじ} 爾^{すくい} を^{はし} 救^{ねむ} の^{きとう} 橋^{けんご} 、^{ほご} 眠^い らざる^{じれん} 祈祷^{もつ} 、^{われら} 堅固^{たす} なる^{われら} 保護^{われら} と^{われら} して^{われら} 祈^{われら} る、^{われら} 慈憐^{われら} を^{われら} 以^{われら} て^{われら} 我等^{われら} の^{われら} 勝^{われら} へ^{われら} 難^{われら} き^{われら} 悲^{われら} 哀^{われら} 、^{われら} 諸^{われら} 病^{われら} 、^{われら} 諸^{われら} 難^{われら} 、^{われら} 諸^{われら} 愆^{われら} を^{われら} 見^{われら} て、^{われら} 之^{われら} を^{われら} 善^{われら} に^{われら} 變^{われら} じて、^{われら} 速^{われら} に^{われら} 喜^{われら} 悦^{われら} を^{われら} 與^{われら} へ^{われら} 給^{われら} へ。

潔^{いさぎよ} き女^{じよさい} 幸^{われら} よ、^{われら} 我等^{かんなん} は^あ 患^{なんじ} 難^{ほご} に^{あずか} 在^{ゆえ} りて^い 爾^て の^の 保^の 護^の に^の 與^の ら^の ざる^の なし。故^の に^の 今^の も^の 手^の を^の 舒^の べて、^の 甚^の しく^の 荒^の ら^の さる^の 我^の 等^の を^の 速^の に^の 援^の け^の 給^の へ。神^の の^の 母^の よ、^の 我等^の の^の 悲^の 哀^の に^の 慈^の 憐^の を^の 垂^の れて、^の 速^の に^の 喜^の 悦^の を^の 與^の へ^の 給^の へ。

光榮

女^{じよさい} 幸^{ふほう} よ、^{もの} 不法^{なんじ} の^{たのみ} 者^{たのみ} は^{たのみ} 爾^{たのみ} を^{たのみ} 頼^{たのみ} と^{たのみ} せず^{たのみ} して、^{たのみ} 傲慢^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 人^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 常^{たのみ} に^{たのみ} 嫉^{たのみ} 妬^{たのみ} を^{たのみ} 流^{たのみ} し、^{たのみ} 不^{たのみ} 義^{たのみ} 女^{たのみ} 幸^{たのみ} よ、^{たのみ} 不法^{たのみ} の^{たのみ} 者^{たのみ} は^{たのみ} 爾^{たのみ} を^{たのみ} 頼^{たのみ} と^{たのみ} せず^{たのみ} して、^{たのみ} 傲慢^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 人^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 常^{たのみ} に^{たのみ} 嫉^{たのみ} 妬^{たのみ} を^{たのみ} 流^{たのみ} し、^{たのみ} 不^{たのみ} 義^{たのみ} 女^{たのみ} 幸^{たのみ} よ、^{たのみ} 不法^{たのみ} の^{たのみ} 者^{たのみ} は^{たのみ} 爾^{たのみ} を^{たのみ} 頼^{たのみ} と^{たのみ} せず^{たのみ} して、^{たのみ} 傲慢^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 人^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 常^{たのみ} に^{たのみ} 嫉^{たのみ} 妬^{たのみ} を^{たのみ} 流^{たのみ} し、^{たのみ} 不^{たのみ} 義^{たのみ} 女^{たのみ} 幸^{たのみ} よ、^{たのみ} 不法^{たのみ} の^{たのみ} 者^{たのみ} は^{たのみ} 爾^{たのみ} を^{たのみ} 頼^{たのみ} と^{たのみ} せず^{たのみ} して、^{たのみ} 傲慢^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 人^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 常^{たのみ} に^{たのみ} 嫉^{たのみ} 妬^{たのみ} を^{たのみ} 流^{たのみ} し、^{たのみ} 不^{たのみ} 義^{たのみ} 女^{たのみ} 幸^{たのみ} よ、^{たのみ} 不法^{たのみ} の^{たのみ} 者^{たのみ} は^{たのみ} 爾^{たのみ} を^{たのみ} 頼^{たのみ} と^{たのみ} せず^{たのみ} して、^{たのみ} 傲慢^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 人^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 常^{たのみ} に^{たのみ} 嫉^{たのみ} 妬^{たのみ} を^{たのみ} 流^{たのみ} し、^{たのみ} 不^{たのみ} 義^{たのみ} 女^{たのみ} 幸^{たのみ} よ、^{たのみ} 不法^{たのみ} の^{たのみ} 者^{たのみ} は^{たのみ} 爾^{たのみ} を^{たのみ} 頼^{たのみ} と^{たのみ} せず^{たのみ} して、^{たのみ} 傲慢^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 人^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 常^{たのみ} に^{たのみ} 嫉^{たのみ} 妬^{たのみ} を^{たのみ} 流^{たのみ} し、^{たのみ} 不^{たのみ} 義^{たのみ} 女^{たのみ} 幸^{たのみ} よ、^{たのみ} 不法^{たのみ} の^{たのみ} 者^{たのみ} は^{たのみ} 爾^{たのみ} を^{たのみ} 頼^{たのみ} と^{たのみ} せず^{たのみ} して、^{たのみ} 傲慢^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 人^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 常^{たのみ} に^{たのみ} 嫉^{たのみ} 妬^{たのみ} を^{たのみ} 流^{たのみ} し、^{たのみ} 不^{たのみ} 義^{たのみ} 女^{たのみ} 幸^{たのみ} よ、^{たのみ} 不法^{たのみ} の^{たのみ} 者^{たのみ} は^{たのみ} 爾^{たのみ} を^{たのみ} 頼^{たのみ} と^{たのみ} せず^{たのみ} して、^{たのみ} 傲慢^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 人^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 常^{たのみ} に^{たのみ} 嫉^{たのみ} 妬^{たのみ} を^{たのみ} 流^{たのみ} し、^{たのみ} 不^{たのみ} 義^{たのみ} 女^{たのみ} 幸^{たのみ} よ、^{たのみ} 不法^{たのみ} の^{たのみ} 者^{たのみ} は^{たのみ} 爾^{たのみ} を^{たのみ} 頼^{たのみ} と^{たのみ} せず^{たのみ} して、^{たのみ} 傲慢^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 人^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 常^{たのみ} に^{たのみ} 嫉^{たのみ} 妬^{たのみ} を^{たのみ} 流^{たのみ} し、^{たのみ} 不^{たのみ} 義^{たのみ} 女^{たのみ} 幸^{たのみ} よ、^{たのみ} 不法^{たのみ} の^{たのみ} 者^{たのみ} は^{たのみ} 爾^{たのみ} を^{たのみ} 頼^{たのみ} と^{たのみ} せず^{たのみ} して、^{たのみ} 傲慢^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 人^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 常^{たのみ} に^{たのみ} 嫉^{たのみ} 妬^{たのみ} を^{たのみ} 流^{たのみ} し、^{たのみ} 不^{たのみ} 義^{たのみ} 女^{たのみ} 幸^{たのみ} よ、^{たのみ} 不法^{たのみ} の^{たのみ} 者^{たのみ} は^{たのみ} 爾^{たのみ} を^{たのみ} 頼^{たのみ} と^{たのみ} せず^{たのみ} して、^{たのみ} 傲慢^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 人^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 常^{たのみ} に^{たのみ} 嫉^{たのみ} 妬^{たのみ} を^{たのみ} 流^{たのみ} し、^{たのみ} 不^{たのみ} 義^{たのみ} 女^{たのみ} 幸^{たのみ} よ、^{たのみ} 不法^{たのみ} の^{たのみ} 者^{たのみ} は^{たのみ} 爾^{たのみ} を^{たのみ} 頼^{たのみ} と^{たのみ} せず^{たのみ} して、^{たのみ} 傲慢^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 人^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 常^{たのみ} に^{たのみ} 嫉^{たのみ} 妬^{たのみ} を^{たのみ} 流^{たのみ} し、^{たのみ} 不^{たのみ} 義^{たのみ} 女^{たのみ} 幸^{たのみ} よ、^{たのみ} 不法^{たのみ} の^{たのみ} 者^{たのみ} は^{たのみ} 爾^{たのみ} を^{たのみ} 頼^{たのみ} と^{たのみ} せず^{たのみ} して、^{たのみ} 傲慢^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 人^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 常^{たのみ} に^{たのみ} 嫉^{たのみ} 妬^{たのみ} を^{たのみ} 流^{たのみ} し、^{たのみ} 不^{たのみ} 義^{たのみ} 女^{たのみ} 幸^{たのみ} よ、^{たのみ} 不法^{たのみ} の^{たのみ} 者^{たのみ} は^{たのみ} 爾^{たのみ} を^{たのみ} 頼^{たのみ} と^{たのみ} せず^{たのみ} して、^{たのみ} 傲慢^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 人^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 常^{たのみ} に^{たのみ} 嫉^{たのみ} 妬^{たのみ} を^{たのみ} 流^{たのみ} し、^{たのみ} 不^{たのみ} 義^{たのみ} 女^{たのみ} 幸^{たのみ} よ、^{たのみ} 不法^{たのみ} の^{たのみ} 者^{たのみ} は^{たのみ} 爾^{たのみ} を^{たのみ} 頼^{たのみ} と^{たのみ} せず^{たのみ} して、^{たのみ} 傲慢^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 人^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 常^{たのみ} に^{たのみ} 嫉^{たのみ} 妬^{たのみ} を^{たのみ} 流^{たのみ} し、^{たのみ} 不^{たのみ} 義^{たのみ} 女^{たのみ} 幸^{たのみ} よ、^{たのみ} 不法^{たのみ} の^{たのみ} 者^{たのみ} は^{たのみ} 爾^{たのみ} を^{たのみ} 頼^{たのみ} と^{たのみ} せず^{たのみ} して、^{たのみ} 傲慢^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 人^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 常^{たのみ} に^{たのみ} 嫉^{たのみ} 妬^{たのみ} を^{たのみ} 流^{たのみ} し、^{たのみ} 不^{たのみ} 義^{たのみ} 女^{たのみ} 幸^{たのみ} よ、^{たのみ} 不法^{たのみ} の^{たのみ} 者^{たのみ} は^{たのみ} 爾^{たのみ} を^{たのみ} 頼^{たのみ} と^{たのみ} せず^{たのみ} して、^{たのみ} 傲慢^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 人^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 常^{たのみ} に^{たのみ} 嫉^{たのみ} 妬^{たのみ} を^{たのみ} 流^{たのみ} し、^{たのみ} 不^{たのみ} 義^{たのみ} 女^{たのみ} 幸^{たのみ} よ、^{たのみ} 不法^{たのみ} の^{たのみ} 者^{たのみ} は^{たのみ} 爾^{たのみ} を^{たのみ} 頼^{たのみ} と^{たのみ} せず^{たのみ} して、^{たのみ} 傲慢^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 人^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 常^{たのみ} に^{たのみ} 嫉^{たのみ} 妬^{たのみ} を^{たのみ} 流^{たのみ} し、^{たのみ} 不^{たのみ} 義^{たのみ} 女^{たのみ} 幸^{たのみ} よ、^{たのみ} 不法^{たのみ} の^{たのみ} 者^{たのみ} は^{たのみ} 爾^{たのみ} を^{たのみ} 頼^{たのみ} と^{たのみ} せず^{たのみ} して、^{たのみ} 傲慢^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 人^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 常^{たのみ} に^{たのみ} 嫉^{たのみ} 妬^{たのみ} を^{たのみ} 流^{たのみ} し、^{たのみ} 不^{たのみ} 義^{たのみ} 女^{たのみ} 幸^{たのみ} よ、^{たのみ} 不法^{たのみ} の^{たのみ} 者^{たのみ} は^{たのみ} 爾^{たのみ} を^{たのみ} 頼^{たのみ} と^{たのみ} せず^{たのみ} して、^{たのみ} 傲慢^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 人^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 常^{たのみ} に^{たのみ} 嫉^{たのみ} 妬^{たのみ} を^{たのみ} 流^{たのみ} し、^{たのみ} 不^{たのみ} 義^{たのみ} 女^{たのみ} 幸^{たのみ} よ、^{たのみ} 不法^{たのみ} の^{たのみ} 者^{たのみ} は^{たのみ} 爾^{たのみ} を^{たのみ} 頼^{たのみ} と^{たのみ} せず^{たのみ} して、^{たのみ} 傲慢^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 人^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 常^{たのみ} に^{たのみ} 嫉^{たのみ} 妬^{たのみ} を^{たのみ} 流^{たのみ} し、^{たのみ} 不^{たのみ} 義^{たのみ} 女^{たのみ} 幸^{たのみ} よ、^{たのみ} 不法^{たのみ} の^{たのみ} 者^{たのみ} は^{たのみ} 爾^{たのみ} を^{たのみ} 頼^{たのみ} と^{たのみ} せず^{たのみ} して、^{たのみ} 傲慢^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 人^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 常^{たのみ} に^{たのみ} 嫉^{たのみ} 妬^{たのみ} を^{たのみ} 流^{たのみ} し、^{たのみ} 不^{たのみ} 義^{たのみ} 女^{たのみ} 幸^{たのみ} よ、^{たのみ} 不法^{たのみ} の^{たのみ} 者^{たのみ} は^{たのみ} 爾^{たのみ} を^{たのみ} 頼^{たのみ} と^{たのみ} せず^{たのみ} して、^{たのみ} 傲慢^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 人^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 常^{たのみ} に^{たのみ} 嫉^{たのみ} 妬^{たのみ} を^{たのみ} 流^{たのみ} し、^{たのみ} 不^{たのみ} 義^{たのみ} 女^{たのみ} 幸^{たのみ} よ、^{たのみ} 不法^{たのみ} の^{たのみ} 者^{たのみ} は^{たのみ} 爾^{たのみ} を^{たのみ} 頼^{たのみ} と^{たのみ} せず^{たのみ} して、^{たのみ} 傲慢^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 人^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 常^{たのみ} に^{たのみ} 嫉^{たのみ} 妬^{たのみ} を^{たのみ} 流^{たのみ} し、^{たのみ} 不^{たのみ} 義^{たのみ} 女^{たのみ} 幸^{たのみ} よ、^{たのみ} 不法^{たのみ} の^{たのみ} 者^{たのみ} は^{たのみ} 爾^{たのみ} を^{たのみ} 頼^{たのみ} と^{たのみ} せず^{たのみ} して、^{たのみ} 傲慢^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 人^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 常^{たのみ} に^{たのみ} 嫉^{たのみ} 妬^{たのみ} を^{たのみ} 流^{たのみ} し、^{たのみ} 不^{たのみ} 義^{たのみ} 女^{たのみ} 幸^{たのみ} よ、^{たのみ} 不法^{たのみ} の^{たのみ} 者^{たのみ} は^{たのみ} 爾^{たのみ} を^{たのみ} 頼^{たのみ} と^{たのみ} せず^{たのみ} して、^{たのみ} 傲慢^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 人^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 常^{たのみ} に^{たのみ} 嫉^{たのみ} 妬^{たのみ} を^{たのみ} 流^{たのみ} し、^{たのみ} 不^{たのみ} 義^{たのみ} 女^{たのみ} 幸^{たのみ} よ、^{たのみ} 不法^{たのみ} の^{たのみ} 者^{たのみ} は^{たのみ} 爾^{たのみ} を^{たのみ} 頼^{たのみ} と^{たのみ} せず^{たのみ} して、^{たのみ} 傲慢^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 人^{たのみ} の^{たのみ} 舌^{たのみ} 、^{たのみ} 常^{たのみ} に^{たのみ} 嫉^{たのみ} 妬^{たのみ} を^{たのみ} 流^{たのみ} し、^{たのみ} 不^{たのみ} 義^{たのみ} 女^{たのみ} 幸^{たのみ} よ、^{たのみ} 不法^{たのみ} の^{たのみ} 者^{たのみ} は^{たのみ} 爾^{たのみ} を^{たのみ} 頼^{たのみ} と^{たのみ} せず^{たのみ} して、^{たのみ} 傲慢^{たのみ} の^{たのみ} 舌<

に隣となりの血ちを灑そそがんと吼ほゆる者ものを頼たのみと爲ためす。潔いさぎよき者ものよ爾なんじ彼等かれらの頷あぎを壞やぶり給たまへ。

今も

女じよさい宰たかよ、高きゆうてきぶる仇敵あの昂くびげたる首その、其その謀はかりごと、其その悪あしき風習ならわし、其その毎まい日にち我われに向むかひて悪あくを謀はかる心こころを低ひくくし給たまへ。神かみの母ははよ、爾なんじを呼よぶ者ものに能のうりよく力しょうりと勝あた利すみやかとを與かれらへて、速よろこに彼等たまを喜たまばしめ給たまへ。

第五歌頌

イルモス、イサイヤやけずみにあらわひひ童貞女どうていじよの腹はらより黒暗くらやみに迷まよひし者ものに輝かがやきて、神かみを知る知識しの光照ちしきを賜たまふ。

眞まことなる祈きとうしや祷者ら、「ハリスティアニン」等たのみの恃おんちよう頼こうむ、恩寵ものを蒙われられる者ねっしんよ、我なんじ等熱心ねっしんに爾なんじを呼よびて爾なんじに祈きとうる者いの祈たま祷いを納たまれ給たまへ。

潔いさぎよき者ものよ、我われら等ち地うまに生ものる者なんじは爾いを生命いのちの泉いずみ、不ふ死しの水みずを流ながす者ものと知しりて、爾なんじを讚美さんびす。

光榮

凶惡きようあくなる敵てきは我われら等せを攻しためて、舌もつを以つるぎて劍ごとの如われらくに我ほろぼ等ほつを滅かみさんと欲ははす。神なんじの母ははよ、爾なんじの能ちから力ちからにて我われら等まもを護たまり給たまへ。

今も

潔いさぎよき者ものよ、孰たれか爾なんじの有ゆう力りよくなる保ほご護おほの多かぞきを數ゆえへん、故われらに我かんなん等あ患難ものに在すみやかる者たすを速たまに援たまけ給たまへ。

第六歌頌

イルモス、我われ罪つみの淵ふちに溺おぼれて、爾なんじが憐あわれみの量はかり難がたき淵ふちに呼よぶ、神かみよ、我われを淪滅ほろびより引ひき上あげ給たまへ。

貞潔ていけつの者ものの守しよごしや護者かみたる神よめの聘女いままんじよ、今よ爾ものを呼あらわぶ者これに現およそれて、之かんなんを凡きがいの患難のが危う害がいより脱のがれしめ給たまへ。

祝しゆくふく福ふくせられたる至しじよう淨じよの者ものよ、敵てきの悪事あくじを毀こぼち、不ふぎ義ぎんげんなる讒言とどを禁つみめて、罪ものなき者うれいを憂うれいより救すくひ給たまへ。

光榮

ハリストス神かみの母ははよ、我われら等はなはだは甚ざいあくしき罪惡かこに圍しんげきまれ、侵撃しよなんする諸難おぼに溺なんじらされて、爾なんじの神聖しんせいなる帡幪おおいの下したに趨はしり附つく。

今も

神かみの聘女よめよ、爾なんじは夫おつとに與あずからずして主しゆを生うみて、産さんの後のちにも亦また童貞女どうていじよと顯あらわれたり。嗚呼ああ爾なんじの中うちに行おこなはれたる至しせい榮きせきなる奇跡きせきや。

次に主セダレン憐れんめよ。三次。光榮、今も、

坐誦讚詞、第二調。

熱心ねっしんなる祈きとうしや祷者やぶ破しろられざる城じれん、慈憐いずみの泉せかい、世界かくれがの避所われらよ、我ねつせつ等熱切なんじに爾よに呼よぶ、女じよさい宰しやうしんじよ生ひとり神女すみやか、獨てんたつ速ものに轉達いそする者われらよ、急かんなんぎて我のが等たまを患難たより脱たまれしめ給たまへ。

第七歌頌

イルモス、ハリストスよ、爾は至榮にして童貞女より生るるを明に預象せんと欲して、少者を爐の中に焚かるるなく護り給へり。彼等は爾を歌頌して歌へり、先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

潔き童貞女よ、嗚呼爾の慈憐や、蓋爾は危難攻撃の中に爾を呼ぶ者の無量なる憂愁及び苗害を解き給ふ。祝福せられたる者よ、故に今も爾を讃め揚ぐる者を援け給へ。

爾の速なる保護を顯し、爾が神の母として能するを顯し給へ、我等涙を流し、俯伏して、心より爾に呼ぶ、速に爾の諸僕の憂愁を慰め、疾病を醫し給へ。

光榮

人人の口は猛き獅の如く啓かれて、墓の如く我を呑まんと欲す。祝福せられたる生神女、恃頼なき者の恃頼よ、爾現れて彼等の力を破り給へ。

今も

諸敵は見て耻づべし、我等を防ぎ護る爾の力を知るべし、祝福せられたる生神女、恃頼なき者の恃頼よ、彼等を地獄の淵に墜し給へ。

第八歌頌

イルモス、昔ワフィロンの火の爐は神の命によりて其勢を分かち、ハルデイを焦して、信者を涼しくせり、主の悉くの造物は主を崇め讃めよと歌へばなり。

我等の避所、世界の歡喜なる神の母よ、急ぎて慈憐を垂れ、速に爾の恩寵を我等侵害せらるる者に與へ、至善の者よ、爾の諸僕を護り給へ。

不虔者の會は我等に向ひて悪しき謀を設けたり、昔のアヒトフェルの如し。唯我等呼ぶ、生神女よ、爾の祈禱を以て之を破りて、彼等の力を仆し給へ。

光榮

女宰生神女よ、凡の憂、種種の病、甚しき禍の中に在りて、心より偽なく爾を呼ぶ者に速に聴きて、恒に爾の祈禱を以て彼等を助け給へ。

今も

生神女よ、爾の名の地上に讃榮せられん爲に、爾より輝きし主は爾を以て有能なる恃頼及び守護として罪人等に賜へり、蓋爾に因りて凡そ呼吸ある者は神に趨り附く。

第九歌頌

イルモス、生神女よ爾の位に合ひて能く爾を讚美する舌なし、天上の智慧も如何に爾を歌頌するを知らず。唯爾、仁慈の者として、我等の信を納れ給へ、我等の熱切なる愛を知ればなり、蓋爾は「ハリストティアニン」等の轉達なり、我等爾を崇め

第二調 「スポタ」の晩堂課 二七九

第二調 「スポタ」の晩堂課 二八〇

ほ
讃む。

凶惡の事を謀る凡の舌は閉さるべし、虚偽の口、驕誇と仇する媚嫉とを以て不義にして義者に不法を歸する口は黙すべし、生神女とハリストスの諸聖人との祈禱に因り

てなり。

われら やまい お うれい いた もの みな きとう いさみ いさぎよ しょうしんじょ たの よ いさぎよ じよさい
我等病を負ひ憂を懐く者は皆祈祷に勇ある潔き生神女を頼みて呼ぶ、潔き女宰よ、
つね すみやか なんじ しょうぼく その お ところ しょうびょう たす たま われら かみ つ なんじ ほか た
恒に速に爾の諸僕を其負ふ所の諸病より援け給へ、我等には神に垂ぎて爾の外に他
ほごしや
の保護者なければなり。

光榮

しょうしんじょ なんじ しつぼう もの おおい かくれが ぐふう あ もの おだやか みなと ゆえ われら
生神女よ、爾は失望せし者の大なる避所、颶風に遭ふ者の穩なる停泊なり。故に我等
なんじ はし つ よ まこと いのち はは ねが われら はじ え ねが かんしゃ
も爾に趨り附きて呼ぶ、眞の生命の母よ、願はくは我等耻を得ざらん、願はくは感謝
ねっしん なんじ あが ほ
して熱心に爾を崇め讃めん。

今も

しじょう しょうじょ しんせい うた い なんじ たの もの おんちよう むく つね しょきょうかい へいあん
至淨なる少女よ、神聖なる歌を納れて、爾を頼む者に恩寵を報い、常に諸教會に平安、
わ こうてい しょうり くだ もと たま およそ
我が皇帝に勝利を降さんことを求め給へ、凡の「ハリストティアニン」の舌が爾を崇
ほ ため
め讃めん爲なり。

次ぎて「常に福にして」。其他常例の如し、并に發放詞。



主日の夜半課

カノン
聖三者の規程。ミトロファンの作、其冠詞は、神元の三位の光を歌ふ、第二調。

第一歌頌

イルモス、まった そな 全く備はれる力は昔ちから わかし ファラオンの全軍を深水に敷き、人體を取りし言、
さんえい しゅ よろず あく いた つみ ほろぼ たま くれおごそか こうえい あらわ
讃榮せらるる主は萬の悪を致す罪を滅し給へり、彼 嚴に光榮を顯したればなり。
われら うた もつ さんい いちげん しんせい かしょう い じれん く つく じつざい
我等歌を以て三位にして一元なる神性を歌頌して言はん、慈憐の汲み盡されぬ實在の
ふち たも かみ なんじ ふくはい もの まも すく たま ひと いたくし しゅ
淵を有つ神よ、爾に伏拜する者を護りて救ひ給へ、人を 慈む主なればなり。
いずみ およ ね ちち ゆえん もの なんじ こ せいしん うち お かみ いったい しんせい さんじつ
泉及び根たる父、縁由の者として爾の子と聖神との中に居る神よ、一體の神性の三日
ひかり わ ころろ そそ しんい こうしょう あざか もつ われ てら たま
の光を我が心に注ぎて、神爲の光照に與るを以て我を照し給へ。

光榮

さんこう しんげん ゆいいちしゃ なんじ かがや こうせん そそ もつ わ しょうざい しょうよく くらやみ さん
三光なる神元の惟一者よ爾の輝ける光線を注ぐを以て、我が諸罪と諸愆との黑暗を散
われ なんじ ちか がた こうえい みや およ いさぎよ まく な たま
じて、我を爾の近づき難き光榮の宮及び潔き幕と爲し給へ。

生神女讃詞

しじょう もの なんじ たい うち じんせい と かみことば その じんあい もつ わ せい いにしえ
至淨なる者よ、爾の胎の内に人性を取りし神言は、其仁愛を以て、我が性の古

第二調 主日の夜半課 二八一

第二調 主日の夜半課 二八二

ながれ はなはだ にご けが もの きよ これ てら われら さんこう しんげん おうぎ おし
の流、甚しく濁りて穢れたる者を潔めて之を照し、我等に三光なる神元の奥義を教
たま
へ給へり。

第三歌頌

イルモス、なんじ われ しん いし かた た わ くち ひら わ てき むか たま けだし
爾我を信の石に堅く立て、我が口を啓きて我が敵に對はしめ給へり、蓋

わ しん たの うた わ かみ ひと せい しゅ なんじ ほか ぎ
我が神は樂しみて歌へり、吾が神と侘しく聖なるはなく、主よ、爾の外に義なるはなし。

われ どうぞん しんげん いつせい さんい さんえい けだし いのち いのち しょう なんじ われら
我同尊なる神元、一性なる三位を讚榮す、蓋生命より生命は生じたれども、爾我等の神は唯一なり。主よ、爾の外に聖なるはなし。

せいさんしゃ わか いちげん なんじ てん むけい ひんい なんじ びぜん かがみ つく た
聖三者、分れざる一元よ、爾は天の無形なる品位を爾の美善の鏡として造りて、斷えず爾を歌はしむ。求む、今塵に屬する我が口の讚美をも納れ給へ。

光榮

さんじつ ゆいいちしゃ なんじ しょうく ところ おもい しん いし かた た なんじ あい ふち もつ これ
三日の唯一者よ、爾の諸僕の心と意とを信の石に堅く立てて、爾の愛の淵を以て之を弘め給へ、蓋爾は我等の神なり、願はくは我等爾を頼みて耻を受けざらん。

生神女讚詞

しょうしんじょ さき およそ ぞうぶつ せんざい たま しゅ むりょう じんじ よ なんじ たいない せんざい う
生神女よ、先に凡の造物に存在を賜ひし主は無量の仁慈に因りて爾の胎内に存在を受け、且唯一の神性と權能との三日の光を衆に輝かし給へり。

坐誦讚詞、第二調。

じれん しゅ なんじ はじめ つく とき なんじ じつせい ことば よ われら しょう したが
慈憐なる主よ、爾は始にアダムを造りし時、爾の實性の言に呼べり、我等の肖に循ひて造らんと、造成者聖神も偕に在せり。故に我等爾に呼ぶ、造物主我が神よ、光榮は爾に歸す。

光榮、今も、生神女讚詞。

しじょう もの かみ われら のぞ さだめし とき なんじ いた いさぎよ たいない い なんじ よ
至淨なる者よ、神は我等に臨まんとして定めし時、爾の至りて潔き胎内に入り、爾に依りて人の合成を救ひ、衆に天國を賜へり。故に我等爾に呼ぶ、女宰・潔き生神女よ、慶べ。

第四歌頌

しゅ われ なんじ うた けだし おとづれ き おそ なんじ われ まよ もの たず われ
イルモス、主よ、我爾を歌ふ、蓋風聲を聞きて懼れたり、爾は我迷へる者を尋ねて、我にまで至ればなり。故に慈憐深き主よ、我に於ける爾の大なる寛容を讚榮す。

ゆいいちしゃ むげん さんしゃ むけい てんし ひんい なんじ さと あた しか われら ちり
唯一者、無原なる三者よ、無形なる天使の品位も爾を悟る能はず、然れども我等塵に屬する舌を以て爾の實在の仁慈を歌頌し、信を以て之を讚榮す。

ひと せい つく ぜんのうしゃ なんじ み ところ しゅ いま われ いっさい ふのう み ゆえ
人の性を造りし全能者よ、爾は見ざる所なき主として今我の一切の不能を見る、故に爾の僕を憐みて、復善良なる生命に上せ給へ。

第二調 主日の夜半課 二八三

第二調 主日の夜半課 二八四

光榮

われら ほんげん ゆいいちしゃ こん さんい ほ うた くらい わか その いし その こうえい
我等は本原なる唯一者の混ぜざる三位を讚め歌ひて、位を分ち、其意旨、其光榮、其神性に於て之を合一にして、別れざる者と爲す。

生神女讚詞

しょうしんじょ えいていどうじょ ぞうせいしゅ こせい ひとりなんじ あきらか むてん じゆんけつ みや みと これ い
生神女永貞童女よ、造成主は古世より獨爾を明に無玷純潔なる宮と認めて、之に入り、人を愛する主として人性の形を受け給へり。

第五歌頌

イルモス、幽闇に居る者の光照、失望する者の救贖たるハリストス我が救主よ、我爾平安の王に朝の祈禱を奉る、爾の光を以て我を照し給へ、我爾の外に他の神を識らざればなり。

平安と生活とを與ふる爾の攝理の光線を一切の造物に注ぐ平安の王よ、我を爾の平安に護り給へ、爾は萬有の生命及び平安なればなり。

父の言よ、爾は棘の中に火の形を以てモイセイに現れて、天使と名づけられし時、豫爾が我等に降臨せんことを示せり。此の降臨に由りて爾は衆に明に惟一の神元の三位なる權柄を顯し給へり。

光榮

神性に屬する同永在の光榮を有つ一元なる聖三者よ、信を以て正しく爾を讚め歌ふ者に爾の無原にして惟一なる三日の光の光榮を見るを得しめ給へ。

生神女讚詞

童貞女母よ、實性の神言、萬世を保つ主は言ひ難く爾の胎内に保たれたり、人人を惟一の權能に召して合一ならしめん爲なり。

第六歌頌

イルモス、我罪の淵に溺れて、爾が憐の量り難き淵に呼ぶ、神よ、我を淪滅より引き上げ給へ。

慈憐を旨とする三日の神よ、爾を信ずる者を憐みて、爾の諸僕を諸罪、諸慾、諸難より脱れしめ給へ。二次。光榮

仁慈の言ひ難き淵に因りて、爾が三光の神性の量り難き光照を以て我を照し給へ。

生神女讚詞

童貞女よ、至上者は言ひ難く爾に藉りて全き人を衣て人と爲りて、三日の光を以て我を輝かし給へり。

坐誦讚詞、第二調。

憐の淵を有つ慈憐の主、無原なる三位の惟一者よ、我等を納れて、爾を讚榮す

第二調 主日の夜半課 二八五

第二調 主日の夜半課 二八六

る人人を顧み、爾に祈る者の歌を受け給へ、蓋我等爾萬有の神を頼みて、罪過の赦を賜はんことを求む。

光榮、今も、生神女讚詞。

慈憐の泉を生みし生神女よ、爾は仁愛仁慈なる者なり、蓋爾は獨信者の保護、爾は憂ふる者の慰藉なり。故に今我等皆爾の助を恃みて、信を以て俯伏して罪過の釋かれんことを求む。

第七歌頌

イルモス、黄金の偶像がデイルの野に奉事せられし時、爾の三人の少者は神に逆ふ命を顧みずして、火の中に投げられ、涼しくせられて歌へり、我が先祖の神よ、爾は崇

め讃めらる。

獨變易なき三位の主よ、爾は天使の軍を立てて、断えず爾を讃榮せしむ。求む、我が心をも常に熱愛を以て爾を讃榮し、敬みて歌頌する者と爲し給へ。二次。

光榮

一元なる三日の神よ、無形の者の品位は爾の光線に照されて、第二の光と爲る。求む、光を施す三光者よ、我をも照して、爾の光に與る者と爲し給へ。

生神女讃詞

言ひ難く人を愛するに因りて童貞女の胎内に人と爲り、人を神成して、父と偕に光榮の寶座に坐する主よ、我等爾を愛する者を擧げて、天に向はしむることを遺るる勿れ。

第八歌頌

イルモス、三重に福たる少者は金の像を顧みずして、變易なき活ける神の像を見て、焰の中に歌へり、造を受けし萬物は主を歌ひて、萬世に讃め揚ぐべし。近づき難き三者、同永在同無原なる神元、萬事に於て變易なき神、萬有の主よ、諸敵の凡の悪謀とデモンの攻撃とを空しくして、常に我を害なく守り給へ。二次。

光榮

睿智と全能とを以て世界を合成して、之を整齊全備なる秩序に守る形り難き三日の一元よ、我が心に入りて、我に天使の品位と偕に萬世黙さずして爾を歌頌讃榮せしめ給へ。

今も

父の睿智、測り難く言ひ難き神の言よ、爾は變易なき爾の性を易へずして、慈憐に因りて人の性を受けて、衆に萬世の宰たる唯一の三者を尊まんことを教へ給へり。

第九歌頌

第二調 主日の夜半課 二八七

第二調 主日の夜半課 二八八

イルモス、日より前に光り輝きし神、肉體にて我等に臨みし者を、貞潔の腹より言ひ難く生みし讃美たる至淨き生神女よ、我等爾を崇め讃む。無原の光より同無原の光なる子は輝き、又同性の光なる聖神は出で給へり、我等は神に合ふ言ひ難き不朽の産、又言ひ難き出を信ず。三日の神性よ、爾の三光の光明を爾を歌頌する者の心に輝かして、彼等に一切を悟る智慧を啓き、彼等に爾の善にして純全なる旨を行ひて、爾を讃美讃榮するを賜へ。

光榮

神として性に限なき聖三者よ、爾は慈憐の量り難き淵を有ちて、嘗て我等に慈憐を施し給へり。祈る、今も爾の諸僕に慈憐を垂れて、之を罪過と患難と危害より脱れしめ給へ。

生神女讃詞

三位に於て歌頌せらるる我が神、唯一の神、唯一の全能者よ、我を凡の誘惑及び迫害より救ひ、生神女の祈祷に由りて爾の牧群を守り給へ。

次にグリゴリイシナイトの聖三讃歌、「爾神言を讃榮するは」、及び其他夜半課の式。本書の末に載す。



主日の早課

「主は神なり」に讃詞、^{トロバリ}「死せざる生命よ」。光榮、今も、「生神女よ、爾の奥義は」。

第一の誦文の後に主日の坐誦讃詞、第二調。

尊とうときイオシフは爾なんじの潔いさぎよき身みを木きより下おろし、淨きよき布ぬのに裏つつみ、香料こうりょうにて覆おおひ、新あらたなる墓はかに藏おさめたり。然しかれども主なんじよ、爾なんじは三日目みっかに復め活ふっかつして、世界せかいに大おおいなる憐あわれみを賜たまへり。句、主しゅ我が神かみよ、起おききて、爾なんじの手てを舉あげよ、苦くるしめらるる者ものを永ながく忘わするる母なかれ。天使てんしは香料こうりょうを攜たづさふる女おんなに墓はかの側かたわらに現あらわれて呼よべり、香料こうりょうは死者ししやに適かなふ、ハリストスきゆうかいは朽壞あずかに與ものらざる者すなわちなり、乃しゅ籲ふっかつべ、主せかいは復おおい活あわれみして、世界せかいに大おおいなる憐あわれみを賜たまへり。

光榮、今も、生神女讃詞。

生神童貞女しょうしんどうていじょよ、爾なんじは至いたりて讃さんび美ものたる者われらなり、我等なんじ爾うたを歌けだしふ、蓋こ爾じゅうじかの子この十字架じゅうじかにて地獄じごくは滅ほろぼされ、死ころは殺われらされ、我等われら殺ころされし者ものは興おきて生命いのちを得え、復また古いにしへの樂たのしみなる樂園らくえんを受けたり。故うに我等ゆえハリストスわれら吾わが神かみに感かん謝しゃして、其その權能けんのうありて獨ひとり大だい仁慈じんじなるを讃さんえい榮えいす。

第二の誦文の後に坐誦讃詞、第二調。

第二調 主日の早課 二八九

第二調 主日の早課 二九〇

墓はかの石いしに封印ふういんするを禁きんぜずして、爾なんじは復ふっかつ活しんして、信いしの石いしを衆しゅうに賜たまへり。主しゅよ、光榮こうえいは爾なんじに歸きす。

句、主しゅよ、我われ心こころを盡つくして爾なんじを讃ほめ揚あげ、爾なんじが悉ことごとくの奇跡きせきを傳つたへん。爾なんじの門徒かみの會けいは攜けいこうじよ香とも女なんじと偕どうしんに同心よろこに喜われらぶ。我等われらも彼等かれらと偕ともに共與きょうよの祭まつりを祝いわひ、爾なんじの復ふっかつ活さんえいを讃そんけい榮なんじ敬よして爾なんじに呼よぶ、人ひとを愛あいする主しゅよ、爾なんじの民たみに大おおいなる憐あわれみを垂たまれ給たまへ。

光榮、今も、生神女讃詞。

生神童貞女しょうしんどうていじょよ、爾なんじは至いたりて讃さんび美ものたる者われらなり、蓋み爾とより身しゅを取りし主じごくは地獄とりこを虜とにし、アダムよを喚おこび起のろいし、詛を破やぶり、エワゆるを赦し、死ほろぼを滅われらし、我等いを生ゆえかせり。故われらに我等うた歌うたひて呼よぶ、斯かく行おこなひ給たまひしハリストスかみ神あがは崇ほめ讃こうえいめらる、光榮なんじは爾きに歸きす。

「ネポロチニ」の後に應答歌、第二調。

ハリストス神イバコイよ、苦難かみの後くなん、女等あと墓おんなたちに往ゆきて、爾なんじの身みに香料こうりょうを傳ぬらんとせしに、天使等てんしを墓はかの中うちに見みて驚おどろけり、蓋けだし彼等かれらの言いふを聽きけり、主しゅは復ふっかつ活せかいして、世界おおいに大あわれみなる憐あわれみを賜たまへり。

品第詞、第二調。第一倡和詞。每句復唱す。

救世主ステベンナよ、我が心アンティフォンの目めを天てんに爾なんじに舉あぐ、爾なんじの光照こうしやうにて我われを救すくひ給たまへ。

ああ わ が ハリス トス よ、ときごと おお なんじ つみ おか われら あわれ おわり まえ なんじ つうかい
鳴呼吾がハリストスよ、時毎に多く爾に罪を犯せる我等を憐みて、終の前に爾に痛悔
する法を與へ給へ。 **光榮**
せいしん さいせい せい ほどこ ぞうぶつ かつどう かな ちち およ こ いっせい かみ
聖神には宰制し、聖を施し、造物を活動せしむること適ふ、父及び子と一性の神な
ればなり。 **今も、同上。**

第二偈和詞

もし しゅ われら うち だれ てき また ひとごろし まつと まもる た
若し主我等の中にあらずば、誰か敵又殺人者より全うし護らるるに堪へん。
きゆうせいしゅ なんじ ぼく かれら は わた なか けだし わ てき しし ごと われ むか すす
救世主よ、爾の僕を彼等の齒に付す勿れ、蓋我が敵は獅の如く我に向ひ進む。

光榮

せいしん いのち いずみ およ せんえい ぞく けだし かみ その ちから もつ いっさい ぞうぶつ ちち うち
聖神には生命の泉及び尊榮は屬す、蓋神として、其力を以て、一切の造物を父の中
に、子に因りて守る。 **今も、同上。**

第三偈和詞

しゅ たの もの せいざん に あえ てき こうげき よ うご
主を頼む者は聖山に似たり、敢て敵の攻撃に因りて動かざらん。
けいけん いのち おく もの おのれ て ふほう の けだし その しぎょう ため つえ
敬虔に生を送る者は己の手を不法に伸ぶべからず、蓋ハリストスは其嗣業の爲に杖
を放たず。 **光榮**

第二調 主日の早課 二九一

第二調 主日の早課 二九二

せいしん いっさい ちえ わ いだ これ しと おんちよう く ちめいしや くるしみ よ
聖神にて一切の智慧は涌き出さる、是より使徒は恩寵を斟み、致命者は苦に因りて
榮冠を冠り、預言者は見る。 **今も、同上。**

提綱、第二調。

しゅ わ かみ お おき て なんじ さだ しんぱん おこな たま ばんみん なんじ めぐ しゅ わ かみ
主我が神よ、起きて、爾が定めし審判を行ひ給へ、萬民爾を環らん。句、主我が神
よ、我爾を頼む、我を救ひ給へ。

「凡そ呼吸ある者は」。主日の早課福音經。

「ハリストスの復活を見て」。第五十聖詠。其他常例の如し。

主日の規程、第二調。

第一歌頌

イルモス、全く備はれる力は昔ファラオンの全軍を深水に敷き、人體を取りし言、
讃榮せらるる主は萬の悪を致す罪を滅し給へり、彼嚴に光榮を顯したればなり。

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

し ぜん しゅ よ きみ われら なんじ いましめ そむ ふくじゆう もの なんじ じゅうじか ていざい
至善なる主よ世の君、我等が爾の誠に背きて服従せし者は爾の十字架にて定罪せ
られたり、蓋死に屬する者と爲して爾に觸れて、爾の權能に由りて權を失ひ、弱き者
と顯れたり。

なんじ じんるい しょくざいしゅ およ ふきゆう いのち かしら よ きた けだしなんじ ふかつ もつ し
爾は人類の贖罪主及び不朽の生命の首として世に來れり、蓋爾の復活を以て死の
縲紲を斷ち給へり。我等皆之を讃榮す、爾嚴に光榮を顯したればなり。

生神女讚詞

いさぎよ えいていどうじよ なんじ み み いっさい ぞうぶつ いた うえ もの あらわ
潔き永貞童女よ爾は見ゆると見えざる一切の造物より至りて上なる者と顯れたり、
ぞうせい しゅ う けだし その なんじ たいない み と ほつ ごと くれ いさみ もつ
造成主を生みたればなり、其爾の胎内に身を取らんと欲せしが如し。彼に勇敢を以

て我が 靈を救はんことを祈り給へ。

又十字架復活の規程、其冠詞は、生命を施す言に讚美を歌ふ。

第一歌頌 同調

イルモス、選ばれたるイブライリは曾て履まれぬ、常ならぬ、海的路を足を濡らさずして過りて呼べり、主に謳はん、彼光榮を顯したればなり。

ハリストスよ、爾は肉體の苦に由りて弱き者の能力、陥りし者の提起、死せし者の不朽と爲れり、光榮を顯したればなり。

神造成主及び更新者は殺されて、陥りし像に慈憐を施し、壞られし者を興し、衆を生かし給へり、彼光榮を顯したればなり。

又至聖なる生神女の規程、其冠詞は、生命を施す少女に讚美を歌ふ。

第一歌頌 同調、同イルモス。

第二調 主日の早課 二九三

第二調 主日の早課 二九四

潔き者よ、昔靈現の梯及奇妙に啓けたる海的路は爾の産を顯せり。我等皆之を歌ふ、其光榮顯れたればなり。

純潔なる者よ、至上者の力、三者の一位、神の智慧は爾より身を取りて、人人に近づき給へり、其光榮顯れたればなり。

潔き者よ、義の日は爾の閉されたる胎の過られぬ門を過りて、世界に輝けり、其光榮顯れたればなり。

共頌、「我が口を開きて」。

第三歌頌

イルモス、主よ、荒地の如く實を結ばざる異邦の教會は、爾の來るに因りて、百合の如く華さけり、我が心は此に縁りて固められたり。

造物は爾の苦に因りて變じたり、爾神聖なる指塵を以て一切を基づけたる主が卑しき形に於て不法者より辱しめらるるを見たればなり。

ハリストスよ、爾は己の像に形りて、爾の手を以て我を塵より造り、復罪の爲に地の塵に還されし者を地獄に下りて、己と偕に復活せしめ給へり。

生神女讚詞

至淨なる者よ、爾の産に因りて天使の品位は驚き、人人の心は懼れたり、故に我等信を以て爾を生神女と尊む。

又

イルモス、ハリストスよ、爾の權能に因りて強き者の弓は折られ、弱き者は力を帯びたり。

萬有より上なるハリストスは肉體の苦を以て天使等の性より少しく遜りたり。

ハリストスよ、爾は死して罪犯者と偕に算へられ、復活して女等に光榮の榮冠を以て耀ける者と顯れたり。

又 同イルモス

童貞女よ、時の造成者にして凡の時に超ゆる者は甘じて爾に藉りて嬰兒と爲りたり。我等は天より宏き腹、アダムに喜びて天に居らしむる者を歌頌せん。

第四歌頌

イルモス、童貞女に藉りて來りしものは使者に非ず、天使に非ず、主親ら人體を取りて、我全き人を救ひ給へり。故に我爾に呼ぶ、主よ、光榮は爾の力に歸す。我が神、審判を諸民に行ふ主宰よ、爾は聲を出さずして、審判せらるる者として

第二調 主日の早課 二九五

第二調 主日の早課 二九六

審判座の前に立つ。ハリストスよ、爾は此の苦にて世界の爲に救を立て給へり。ハリストスよ、爾の苦に因りて敵には武器悉く盡き、爾が地獄に下るに因りて仇の城邑は毀たれ、苦しむる者の狂暴は壞られたり。

生神女讃詞

女宰生神女よ、我等衆信者は爾を救の湊及び堅固なる城として知る、爾の祈祷に因りて我等の靈を危難より脱れしめ給へばなり。

又

イルモス、人を愛する主よ、我爾の光榮なる攝理を聞きて爾の悟り難き能力を讚榮せり。

ハリストスよ、病なく爾を生みし童貞女は爾が木に釘せられたるを見て、母として病を忍びたり。

死は勝たれ、死者は地獄の門を壊ちたり、蓋衆を呑む者は破られて、天性に超ゆる諸恩は我に賜はりたり。

又 同イルモス

視よ、主の家の神聖なる山は最高く擧りたり、是れ神の母、天軍に超ゆる者なり。童貞女よ爾は獨神聖なる召に勝ふる者と爲りて、天性に超えて造物を掌る主を生み給へり。

第五歌頌

イルモス、ハリストス神よ、爾は神と人との中保者と爲れり、主宰よ、我等は爾に依りて、無智の闇より光の原なる爾の父に就くを得たればなり。

主宰ハリストスよ、爾は身にて甘じて松と黄楊樹と柏香木とに擧げられしに因りて、リワンの柏香木を摧く如く、諸民の驕を壞り給へり。

ハリストスよ、彼等爾を氣息なき死者として最深き坎に置きたれども、爾は傷つけられて、爾の傷に因りて墓に寝ぬる遺れられたる死者を爾と偕に復活せしめ給へり。

生神女讃詞

潔き童貞女よ爾を頼む者を諸敵の攻撃より護りて、之に平安を賜はんことを爾の子及び主に祈り給へ。

又

イルモス、イサイヤに^{やけずみ} 燻炭として^{あらわ} 現れし日は^ひ 童貞女の^{どうてい じょ} 腹より^{はら} 黒暗に^{くらやみ} 迷ひし者^{まよ} に^{もの} 輝き^{かがや} て、神を知る知識の^{かみ} 光照^し を^{ちしき} 賜ふ^{こうしやう} 。

第二調 主日の早課 二九七

第二調 主日の早課 二九八

第一の^{だいいち} アダムは^{ものいみ} 齋^{いな} を^し 辞みて、^{いた} 死を^き 致す木^み の^{くら} 果を^{たい} 食ふ、^に 第二の^き アダムは^{てい} 木に^き 釘せられ^{てい} て、^{その} 其罪^{つみ} を^{ほろぼ} 滅す。

無形^{むけい} の^{しんせい} 神性にて^{くるしみ} 苦に^{あずか} 與らざる^{なんじ} ハリストスよ、^{ひと} 爾は^{せい} 人の^{くるしみおよ} 性にて^し 苦^{あずか} 及び^し 死に^{あずか} 與りて、^{ころ} 殺されし者^{もの} を^{ふきゆう} 不朽^{もの} の^な 者と^{じごく} 爲して、^{ふかみ} 地獄^{ふかつ} の^{ふかつ} 深處より^{たま} 復活^{たま} せしめ^{たま} 給へり。

又 同イルモス

雲^{くも} よ、^{たのしみ} 樂の^{あまみ} 甘味^ち を^お 地に^{もの} 居る者^{そそ} に^{けだし} 注げ、^よ 蓋世^{さき} の^い 先より^{かみ} 在す神^{どうてい} は^{じょ} 童貞女^み より^と 身を取りて、^{おきなご} 嬰兒^{われら} として^{たま} 我等^{たま} に^{たま} 賜^{たま} はりたり。

末^{すえ} の^{とき} 時に^{どうてい} 童貞女^{じょ} より^{たね} 種^み なく^と 身を取り^し 至上^{しじょうしや} 者は^わ 我が^{いのち} 生命^わ 我が^{にくたい} 肉體^{ひかり} に^{かがや} 光^{つみ} を^{つみ} 輝^{つみ} かし^{つみ} て、^よ 罪^よ に^{すいじゃく} 由る^{のぞ} 衰弱^{たま} を^{たま} 除^{たま} き^{たま} 給^{たま} へり。

第六歌頌

イルモス、^{われ} 我罪^{つみ} の^{ふち} 淵^{おほ} に^{なんじ} 溺れて、^{あわれみ} 爾が^{はか} 憐^{がた} の^{ふち} 量^よ り^{かみ} 難^{われ} き^{ほろび} 淵^ひ に^ひ 呼ぶ、^ひ 神よ、^ひ 我^ひ を^ひ 淪滅^ひ より^ひ 引^ひ き^ひ 上げ^ひ 給^ひ へ。

義者^{ぎしや} は^{はんざいしや} 犯罪者^{ごと} の^{ていざい} 如^{はんざいしや} く^{とも} 定罪^き せられ、^{てい} 犯罪者^{おのれ} と^ち 偕^よ に^{ざいか} 木^{ざいか} に^{ざいか} 釘^{ざいか} せられて、^{ざいか} 己^{ざいか} の^{ざいか} 血^{ざいか} に^{ざいか} 由^{ざいか} りて^{ざいか} 罪過^{ざいか} ある^{ざいか} 者^{ざいか} に^{ざいか} 赦^{ざいか} を^{ざいか} 賜^{ざいか} ふ。

昔^{むかし} 一人^{ひとり} 第一^{だいいち} の^{だいいち} アダム^{だいいち} に^{だいいち} 由^{だいいち} りて^{だいいち} 死^{だいいち} は^{だいいち} 世^{だいいち} に^{だいいち} 入^{だいいち} り、^{だいいち} 又^{だいいち} 一人^{だいいち} 神^{だいいち} の^{だいいち} 子^{だいいち} に^{だいいち} 由^{だいいち} りて^{だいいち} 復活^{だいいち} は^{だいいち} 顕^{だいいち} れたり。

生神女讃詞

童貞女^{どうてい} よ、^{なんじ} 爾^{おつと} は^し 夫^う を^{また} 識^{えい} らず^{じょ} して^{とど} 生^{なんじ} み、^こ 又^{およ} 永遠^{かみ} に^{まこと} 童貞女^{まこと} に^{まこと} 止^{まこと} まりて、^{まこと} 爾^{まこと} の^{まこと} 子^{まこと} 及び^{まこと} 神^{まこと} の^{まこと} 眞^{まこと} の^{まこと} 神性^{まこと} の^{まこと} 印象^{まこと} を^{まこと} 顯^{まこと} す。

又

イルモス、^{しゆざい} 主宰^{いた} よ、^{たましい} 傷^{いのり} める^{ことば} 靈^{こえ} より^き 祈^{われ} 禱^{しよ} の^{なん} 言^の の^の 聲^の を^の 聞^の きて、^{たま} 我^{たま} を^{たま} 諸^{たま} 難^{たま} より^{たま} 脱^{たま} れ^{たま} しめ^{たま} 給^{たま} へ、^{なんじ} 爾^{ひとり} は^{われら} 獨^{すくい} 我等^{ゆえん} の^{ゆえん} 救^{ゆえん} の^{ゆえん} 縁^{ゆえん} 由^{ゆえん} なればなり。

爾^{なんじ} は^{いのち} 生命^き の^{つみ} 樹^{おちい} を^{もの} 罪^{まも} に^{ため} 陥^た りし者^{しか} より^{なんじ} 護^{なんじ} らん^{なんじ} 爲^{なんじ} に^{なんじ} ヘル^{なんじ} ワ^{なんじ} イ^{なんじ} ム^{なんじ} を^{なんじ} 立^{なんじ} てたり、^{なんじ} 然^{なんじ} れども^{なんじ} 爾^{なんじ} を^{なんじ} 見^{なんじ} て^{なんじ} 門^{なんじ} は^{なんじ} 啓^{なんじ} かれたり、^{なんじ} 爾^{なんじ} 盜^{なんじ} 賊^{なんじ} を^{なんじ} 樂^{なんじ} 園^{なんじ} に^{なんじ} 導^{なんじ} きて^{なんじ} 現^{なんじ} れたればなり。

一人^{いちにん} の^し 死^し に^よ 藉^{じごく} りて^{やぶ} 地獄^{むな} は^{その} 破^{あつ} られて^{おお} 空^{とみ} しく^{ひとり} なれり、^{ひとり} 其^{ひとり} 聚^{ひとり} め^{ひとり} たる^{ひとり} 多^{ひとり} くの^{ひとり} 富^{ひとり} は^{ひとり} 獨^{ひとり} ハ^{ひとり} リ^{ひとり} ス^{ひとり} 我^{ひとり} 等^{ひとり} 衆^{ひとり} の^{ひとり} 爲^{ひとり} に^{ひとり} 之^{ひとり} を^{ひとり} 盡^{ひとり} し^{ひとり} 給^{ひとり} へり。

又 同イルモス

潔^{いさぎよ} き^{じよさい} 女^{つみ} 宰^{ふくえき} よ、^{ひと} 罪^{せい} に^{なんじ} 服^よ 役^{じゆう} する^え 人^{けだし} の^{なんじ} 性^こ は^{こひつじ} 爾^{ごと} に^{ごと} 縁^{ごと} りて^{ごと} 自由^{ごと} を^{ごと} 獲^{ごと} たり、^{ごと} 蓋^{ごと} 爾^{ごと} の^{ごと} 子^{ごと} は^{ごと} 羔^{ごと} の^{ごと} 如^{ごと} く^{ごと} 衆^{ごと} の^{ごと} 爲^{ごと} に^{ごと} 屠^{ごと} られたり。

我等^{われら} 皆^{みな} 爾^{なんじ} 眞^{まこと} の^{まこと} 神^{まこと} の^{まこと} 母^{まこと} に^{まこと} 呼^{まこと} ぶ、^{まこと} 怒^{まこと} に^{まこと} 觸^{まこと} れ^{まこと} たる^{まこと} 諸^{まこと} 僕^{まこと} を^{まこと} 援^{まこと} け^{まこと} 給^{まこと} へ、^{まこと} 爾^{まこと} 濁^{まこと} 子^{まこと} の^{まこと} 前^{まこと} に^{まこと} 勇^{まこと} 敢^{まこと} を^{まこと} 有^{まこと} て^{まこと} ばなり。

小讃詞、第二調。

ぜんのう きゅうせいしゅ なんじはか ふっかつ じごく きせき み おのの ししゃ お ぞうぶつ
全能の救世主よ、爾墓より復活せしに、地獄は奇蹟を見て慄き、死者は起き、造物

第二調 主日の早課 二九九

第二調 主日の早課 三〇〇

み なんじ とち よろこ とち たの わ きゅうせいしゅ せかい つね なんじ ほ うた
は見て爾と偕に喜び、アダムは共に楽しみ、我が救世主よ、世界は常に爾を讃め歌
ふ。

イコス
同讃詞

きゅうせいしゅ なんじ くら もの ひかり なんじ しゅう ふっかつ ひとびと いのち ことば なんじ し
救世主よ、爾は味まされし者の光、爾は衆の復活、人人の生命なり。言よ、爾は死
の權を滅し地獄の門を破りて、衆を己と偕に復活せしめたり。人を愛する主よ、死者
は奇跡を見て驚き、萬物は爾の復活の爲に喜ぶ。故に我等衆も爾の寛容を讃榮歌頌
し、我が救世主よ、世界は常に爾を讃め歌ふ。

第七歌頌

いほもす、ふほう しいたげびと かみ もど めいれい たか ほのお おこ ほ うた
イルモス、不法なる 虐者の神に戻る命令は高き焰を起したれども、讃め歌はるるハ
リストスは敬虔の少者に屬神の露を降し給へり。

しゅさい なんじ じれん よ ひと し くる み しの ひと な きた
主宰よ、爾は慈憐に由りて人の死に苦しめらるるを見るに忍びずして、人と爲り、來
りて、爾の血を以て之を救ひ給へり、爾は我が先祖の讚美讚榮せらるる神なればなり。

じごく かどもり なんじ ふくしゅう ころも き み おそ けだしなんじ しゅさい
ハリストスよ、地獄の門衛は爾が復讐の衣を衣たるを見て懼れたり、蓋爾主宰は
狂暴の殘虐者たる奴隷を殺さん爲に來り給へり、爾は我が先祖の讚美讚榮せらるる神
なればなり。

生神女讃詞

むてん どうてい じよ よめ はは われら なんじ ひとり へんえき かみ う 物の せいしゃ
無玷なる童貞女、聘女ならぬ母よ、我等爾を獨變易なき神を生みし者として、聖者
の中に至りて聖なる者なりと識る、蓋爾は神聖なる爾の産にて衆信者に不朽を流し
給へり。

又

いほもす、むかししょうしゃ ちえ ふか べんぜつしゃ あらわ いた けいけん たましい くち もつ しゅくさん
イルモス、昔少者は智慧深き辯舌者と現れて、至りて敬虔なる靈より口を以て祝讚
して歌へり、先祖及び我等の至聖なる神よ、爾は崇め讃めらる。

むかし ふじゆん おい げん そ ていざい しか しせい さんび せんぞ かみ あまん
昔不順はエデムに於て原祖を定罪せり、然れども至聖にして讚美たる先祖の神は甘
じて定罪せらるるを以て誠を犯しし者の罪を釋き給へり。

しせい さんび せんぞ かみ なんじ ひとごろし そねみ よ おい その した きず
至聖にして讚美たる先祖の神よ、爾は殺人者の猜忌に因りてエデムに於て其舌にて傷
つけられし者を救へり、甘じて得たる傷を爾は甘じて受けたる苦にて醫し給へり。

生神女讃詞

しせい さんび せんぞ かみ なんじ しんせい こうみょう くら じごく てら われ し かげ
至聖にして讚美たる先祖の神よ、爾は神性の光明にて暗き地獄を照して、我死の蔭
を行く者を光に召し給へり。

又 同イルモス

じんたい と たま かみ やかん おぼろ うち み なんじ よ しせい さんび
イアコフは人體を取り給ふ神を夜間朦朧の中に見たり、爾に由りて至聖にして讚美
たる先祖の神は明に彼を歌ふ者に現れ給へり。

第二調 主日の早課 三〇一

潔き者よ、至聖にして讚美たる先祖の神、爾に由りて甘じて人人に合せられし主は、言ひ難く彼等の罪を卸さんとする前兆として、イアコフと角力を爲し給ふ。爾童貞女の子、至聖なる三者の一位を疑なき信を以て傳へず、舌を以て至聖にして讚美たる先祖の神よと呼ばざる人は厭はるべし。

第八歌頌

イルモス、昔ワフィロンの火の爐は神の命によりて其勢を分かち、ハルデイを焦して、信者を涼しくせり、主の悉くの造物は主を崇め讚めよと歌へばなり。ハリストスよ、天使の品位は爾の肉體の衣が爾の血にて赤みたるを見て慄き、爾の大なる寛忍に驚きて呼べり、主の悉くの造物は主を崇め讚めよ。慈憐なるハリストスよ、爾は己の復活を以て我の死に屬する性に不死を衣給へり。故に選を蒙りたる民は感謝して爾を讚め歌ひ、楽しみて爾に呼ぶ、實に死は勝に吞まれたり。

生神女讚詞

至淨なる神の母よ、爾は父に別れざる者を種なく胎内に孕みて、言ひ難く生み給へり。故に我等は爾を我衆の救と認む。

又

イルモス、三重に福たる少者は金の像を顧みずして、變易なき活ける神の像を見て、焰の中に歌へり、造を受けし萬物は主を歌ひて、萬世に讚め揚ぐべし。慈憐豊なる仁愛の主よ、爾は十字架に釘せらるる者と見られ、甘じて葬られ、三日目に復活し、衆人を救ひて、信を以て歌はしむ、萬物は主を歌ひて、萬世に讚め揚ぐべし。

神の言ハリストスよ、爾は造りし者を朽壞より救はん爲に地獄に降り、爾の神聖なる力にて之を不朽の者と爲し、爾の永在なる光榮に與る者と爲して呼ばしむ、萬物はハリストスを歌ひて、世々に讚め揚ぐべし。

又 同イルモス

仁慈能力の比ぶべきなき主は爾に由りて地上に見られ、人人と偕に在せり。我等信者皆彼を歌ひて呼ぶ、造を受けし萬物は主を歌ひて、萬世に讚め揚ぐべし。我等は爾潔き者を實に生神女と傳へて讚榮す、蓋爾は三者の一位、身を取りし者を生み給へり。我等皆彼に父及び聖神と偕に歌ふ、萬物は主を歌ひて、萬世に讚め揚ぐべし。

次ぎて生神女の歌を歌ふ、「我が靈は主を崇め」、附唱と共に、「ヘルワイムより尊く」。

第九歌頌

イルモス、無原の父の子、神と主は、童貞女より人體を取り、我等に現れて、昧まされし者を明かし、散らされし者を集め給へり。故に我等讚美たる生神女を崇め歌ふ。

ハリストス救世主よ、爾の至淨なる十字架の三重に尊貴なる木は地堂に於けるが如く觸體の處に植えられ、神聖なる泉よりするが如く爾の脅の神聖なる血と水とに濕されて、我等の爲に生命を生じたり。

全能者よ、爾は十字架に上げられて、有權者を墜し、下に堅固なる地獄に伏したる人の性を擧げて、父の寶座に坐せしめたり。我等父と偕に爾還來らんとする主に伏拜して崇め歌ふ。

聖三者讚詞

我等信者は三位なる惟一者、一性の三者を真正に歌ひて、分れざる至聖なる性體、三妙の暮れざる日、獨一永在にして、光を我等に輝かしし神を讚榮す。

又 イルモス、「食に縁りて甚しく朽壤に陥りし」。

ハリストスよ、爾は觸體の處に、定罪せられし者の間に、羔の如く十字架に上げられ、戈にて脅を刺されて、仁慈なる主として、塵に屬する我等、信を以て爾の神聖なる復活を尊む者に生命を賜へり。

我等衆信者は己の死を以て死の權を空しくせし神に伏拜せん、古世よりの死者を己と偕に復活せしめて、衆に生命と復活とを與へ給へばなり。

又

イルモス、神の言、童貞女の子、諸神の神、諸聖の至聖者たる主よ、爾は全く冀望、全く甘味なり。故に我等皆爾及び爾を生みし者を崇め讚む。

潔き者よ、爾の胎内に於て能力の杖たる神の言は朽壤の性に與へられて、此の躓きて地獄に陥りし者を復活せしめたり、故に我等爾純潔なる者を生神女として崇め讚む。

主宰よ、慈憐を以て我等の爲に祈る爾の母を納れて、衆を爾の仁慈に充たしめ給へ、我等皆爾を恩主として崇め讚めん爲なり。

共頌の後に小聯禱。次ぎて主我等の神は聖なり、三次。早課の差遣詞。

エクサボステイラリイ

「凡そ呼吸ある者」に主日の讚頌、第二調。

句、彼等の爲に記されし審判を行はん爲なり、斯の榮は其悉くの聖人に在り。

主よ、凡そ呼吸ある者及び悉くの造物は爾を讚榮す、蓋爾は十字架にて死を空しくせり、人人に爾の死よりの復活を顯さん爲なり、獨人を慈む主なればなり。

第二調 主日の早課 三〇五

第二調 主日の早課 三〇六

句、神を其聖所に讚め揚げよ、彼を其有力の穹蒼に讚め揚げよ。

イウデヤの人言ふべし、如何ぞ王を守る兵卒は之を失ひたる、何ぞ石は生命の石を守らざりし。或は葬られし者を與ふべし、或は復活せし者に伏拜して、我等と偕に云ふべし、吾が救世主よ、光榮は爾の大なる恵に歸す、光榮は爾に歸す。

句、其權能に依りて彼を讚め揚げよ、其至嚴なるに依りて彼を讚め揚げよ。

人人よ、喜び樂しめよ、墓の石に坐する天使は我等に福音して云へり、ハリストス世界の救主は死より復活して、萬有に馨しき香氣を満て給へり。人人よ、喜び樂しめよ。

句、^{ラッパ}角の^{こえ}聲を以て^{もつ}彼を^{かれ}讃め^ほ揚げよ、^あ琴と^{きん}瑟とを以て^{しつ}彼を^{もつ}讃め^{かれ}揚げよ。
主よ、^{てんし}天使は^{なんじ}爾が^{いま}未だ^{はら}孕まれざる^{きき}先に、^{おんちゆう}恩寵を^{こうむ}蒙れる^{もの}者に^{よろこ}慶べよと^{ほう}報じ、^{てんし}天使は^{また}又^{なんじ}爾の^{ふっかつ}復活の^{とき}時に、^{なんじ}爾が^{こうえい}光榮なる^{はか}墓の^{いし}石を^{うつ}移せり。^{かれ}彼は^{かなしみ}悲に^か代へて^{たのしみ}樂の^{しるし}徴を示し、^{これ}此は^し死に^か代へて^{われら}我等に^{いのち}生を^{ほご}施す^{しゅさい}主宰を^{つた}傳へたり。^{ゆえ}故に^{われら}我等^{なんじ}爾に^よ呼ぶ、^{ばんゆう}萬有の^{おんしや}恩者なる^{しゅ}主よ、^{こうえい}光榮は^{なんじ}爾に^き歸す。

又讚頌、アナトリイの作、第二調。

句、^{つづみ}鼓と^{まい}舞とを以て^{もつ}彼を^{かれ}讃め^ほ揚げよ、^{いと}絃と^{しやう}簫とを以て^{もつ}彼を^{かれ}讃め^ほ揚げよ。
女等は^{おんなたち}涙と^{なみだ}共に^{とも}香料を^{こうりやう}爾の^{なんじ}墓に^{はか}注ぎ^{こそ}しに、^{かれら}彼等の^{くち}口は、ハリストス復活せりと^い言ふ^{ふっかつ}時、^{よるこび}歡喜に^み満て^{とき}られたり。

句、^{わせい}和聲の^{ぼつ}鉞を以て^{もつ}彼を^{かれ}讃め^ほ揚げよ、^あ大聲の^{たいせい}鉞を以て^{ぼつ}彼を^{もつ}讃め^{かれ}揚げよ。^{およ}凡そ^{いき}呼吸ある^{もの}者は^{しゅ}主を^ほ讃め^あ揚げよ。

^{しよぞく}諸族^{しよみん}諸民は^{われら}ハリストス^{かみ}我等の^{あまん}神、^{われら}甘じて^{ため}我等の^{じゆうじか}爲に^{しの}十字架を^{じごく}忍びて、^{みつか}地獄に^あ三日在^りりし^{しゅ}主を^ほ讃め^あ上げて、^{その}其死^{ふっかつ}よりの^{せかい}復活、^{しきよく}世界の^{てら}四極を^{もの}照し^{ふくはい}し者に^な伏拜すべし。

句、^{しゅ}主我が^{かみ}神よ、^{なんじ}起きて、^{なんじ}爾の^て手を^あ擧げよ、^{もの}苦しめらるる^な者を^な永く^{わす}忘るる^な母れ。
ハリストスよ、^{なんじ}爾は^{のぞ}望み^{ごと}し如く、^{じゆうじか}十字架に^{てい}釘せられ、^{ほうむ}葬られたり、^{かみ}神及び^{およ}主宰とし^{しゅ}て、^{ほろぼ}死を^{こうえい}滅し、^{うち}光榮^{ふっかつ}の中に^{せかい}復活して、^{えいえん}世界に^{いのち}永遠の^{おおい}生命と^{あわれみ}大なる^{たま}憐とを^{たま}賜へり。

句、^{しゅ}主よ、^{われ}我心を^{ころ}盡して^{つく}爾を^{なんじ}讃め^ほ揚げ、^あ爾が^{なんじ}悉くの^{ことごと}奇跡を^{きせき}傳へん。
^あ嗚呼^{いし}石に^{ふういん}封印せし^{ふほうしや}不法者は^{じつ}實に^{われら}我等に^{さら}更に^{おおい}多くの^{きせき}奇跡を^み見る^えを得^{ばんべい}しめたり。^{いま}番兵は^{かれ}今^{はか}彼が^い墓より^{われら}出で^いたるを^{とき}知れるに、^{その}之に^{もん}謂ふ、^{きた}告ぐべし、^{おのれ}我等が^{けん}寝ねたる^{けん}時、^{おのれ}其門徒^{けん}來りて、^{おのれ}彼を^{けん}竊めりと。^{けん}誰か^{けん}死者、^{けん}殊に^{けん}裸體なる^{けん}者を^{けん}竊まん、^{けん}彼親ら^{けん}神として、^{けん}己の^{けん}權を^{けん}以て^{けん}復活して、^{けん}墓の中に^{けん}其^{けん}斂葬の^{けん}衣を^{けん}遺せり。イウデヤ人よ、^{けん}來りて、^{けん}觀よ、^{けん}死

第二調 主日の早課 三〇七

第二調 主日の早課 三〇八

^{ほろぼ}を滅し、^{じんるい}人類に^{えいえん}永遠の^{いのち}生命と^{おおい}大なる^{あわれみ}憐とを^{たま}賜ひし^{もの}者は^{いか}如何にして^{ふういん}封印を^{やぶ}破らざりし。

光榮、^{ステイヒラ}早課の^{ステイヒラ}福音の^{ステイヒラ}讚頌。今も、^{ステイヒラ}生神女讚詞、「^{ステイヒラ}生神童貞女よ、^{ステイヒラ}爾は^{ステイヒラ}至りて^{ステイヒラ}讚美たる^{ステイヒラ}者なり。」

大詠頌。次ぎて復活の讚詞。

主よ、^{しゅ}爾は^{なんじ}墓より^{はか}復活して、^{ふっかつ}地獄の^{じごく}鎖を^{くさり}壊り、^{やぶ}死の^し定罪を^{ていざい}滅し、^{ほろぼ}衆人を^{しゆうじん}敵の^{てき}網より^{あみ}救^{すく}へり。^{ひとり}獨大^{だいい}慈憐なる^{じれん}者よ、^{もの}爾は^{なんじ}使徒に^{なんじ}顯れて、^{しと}彼等を^{しと}傳教に^{あらわ}遣し、^{かれら}彼等を^{でんきやう}傳教に^{つかわ}遣し、^{かれら}彼等に^よ依りて^{なんじ}爾の^{へいあん}平安を^{せがい}世界に^{たま}賜へり。



聖體禮儀には、^{リトルギヤ}眞福詞、第二調。

^{われら}我等^{とうぞく}盜賊の^{こえ}聲を^{なんじ}爾に^{たてまつ}奉りて^{いの}祈る、^{きゆうせいしゅ}救世主よ、^{なんじ}爾の^{くに}國に^{おい}於て^{われら}我等を^{おも}憶ひ^{たま}給へ。

句、心の清き者は福なり、彼等神を見んとすればなり。
人を愛する主よ、爾が我等の爲に受け給ひし十字架を爾に奉りて、我が罪過の赦を求む。

句、和平を行ふ者は福なり、彼等神の子と名づけられんとすればなり。
人を愛する主宰よ、我等爾の葬と復活とに伏拜す、爾は此等を以て世界を朽壞より脱れしめ給へり。

句、義の爲に窘逐せらるる者は福なり、天国は彼等の有なればなり。
主よ、爾の死にて死は吞まれたり、救世主よ、爾は復活を以て世界を救ひ給へり。

句、人我の爲に爾等を語り、窘逐し、爾等の事を偽りて諸の悪しき言を言はん時は、爾等福なり。

爾は墓より復活して、攜香女に遇ひ、彼等に爾の復活を使徒に傳へんことを命じ給へり。

句、喜び樂しめよ、天には爾等の賞多ければなり。
ハリストスよ、黒暗に眠る者は爾地獄の深處に輝きし光を見て復活せり。

光榮

我等皆信を以て父を讚榮し、子に伏拜し、聖神を歌頌せん。

今も、生神女讚詞。

火の状の寶座よ、慶べ、聘女ならぬ聘女よ、慶べ、神を人人の爲に生みし童貞女よ、慶べ。

ボロキメン 提綱。第二調。

第二調 主日の聖體禮儀 三〇九

第二調 主日の晩課 三一〇

主は我が力、我が歌なり、彼は我が救となれり。

句、主は厳しく我を罰したれども、我を死に付さざりき。

「アイルイヤ」、願はくは主は憂の日に於て爾に聴き、イアコフの神の名は爾を扨ぎ衛らん。

句、主よ、王を救へ、又我等が爾に呼ばん時我等に聴き給へ。

~~~~~

### 主日の晩課

「主よ、爾に籲ぶ」に主宰の傷感の讚頌、第二調。

句、主よ、若し爾不法を糾さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人の爾の前に敬まん爲なり。

憐の淵、恩の河を流す所の慈憐の泉を有つ至善なる父、父の言たる子、及び聖神、造られざる神性よ、我等の祈禱祈願を納れて、罪過の中に居る衆人に赦を與へ給へ、

爾は宏恩にして人を愛する神なればなり。

句、我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を待む。

ハリストス我が救世主よ、爾は神として性に依りて慈憐仁愛宏恩の心を有ち給ふ。故に我等爾に祈り、俯伏して呼び、常に爾に求む、爾の諸僕の多くの罪過を解き、我等衆の犯しし諸罪を赦し給へ爾は宏恩にして人を愛する神なればなり。

句、我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

救世主よ、爾は神として衆人を救はんと欲して、彼等の爲に人體を取り、人と現れ給へり。人を愛する主よ、我等爾の誠を尊む者を救ひ給へ。蓋爾が來りしは義人を救ふ爲に非ず、乃我等罪過の中に在りて多くの罪に縛られし者を神聖なる洗禮の恩寵を以て解かん爲なり、爾は宏恩にして人を愛する神なればなり。

次に月課經の讚頌。若し月課經なくば、聖なる無形天軍の讚頌、同調。

句、願はくはイズライリは主を待まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、彼はイズライリを其悉くの不法より贖はん。

寶座、ヘルワィム及びセラフィム、主制、能力及び尊き權柄、差役、差役首、之と偕に首領は、彼等の不朽の性を造りし主に同心にして絶えざる歌を歌ひ、三位に於て一性一體、同尊同寶座の神を尊まんことを衆に教ふ。

第二調 主日の晩課 三一  
第二調 主日の晩課 三一

句、萬民よ、主を讚め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讚めよ。

無形の者の首たる品位は直に神元の光明の照を受けて、神聖なる光を他の品位に其等級に適ひて傳へ、又愛の法に循ひて、熱切に之を我等に送り、各人の量に稱ひて、心の潔淨を爲す。

句、蓋彼が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。

我等神を愛する愛に感ぜられて、常に我が心の眼、靈の思を上にて天に向はしめん、彼處より出づる光線に照されて、諸慾の黒暗を脱れん爲なり。願はくは諸天使と偕に造成主の威嚴なる寶座の前に立ちて、光より光に進まん。

光榮、今も、生神女讚詞。

至淨なる者よ、爾の子の無数の天使は、三聖の聲を以て、爾を彼の火の状の寶座、活ける宮、常に地より彼に渡す神聖なる橋と歌ひて、天使首ガウリイルと同心に、爾歡喜の泉を生みし者に呼ぶ、恩寵を蒙れる者、慶べよ。

次ぎて「穩なる光」。提綱、主の諸僕、夜中主の家に立つ者よ、今主を崇め讚めよ。

其後「主よ、我等を守り」。

挿句に傷感の讚頌、第二調。

ハリストス救世主よ我放蕩の子の如く爾の前に罪を獲たり、父よ我痛悔する者を納れよ、神よ、我を憐み給へ。

句、天に居る者よ、我目を擧げて爾を望む。視よ、僕の目主人の手を望み、婢の目主婦

の手を望むが如く、我等の目は主我が神を望みて、其我等を憐むを俟つ。  
ハリストス救世主よ、我税吏の聲を以て爾に呼ぶ、神よ、我を彼の如く潔めて、我を憐み給へ。

句、主よ、我等を憐み、我等を憐み給へ、蓋我等は侮に躰き足れり。我等の靈は驕る者の辱と誇る者の侮とに躰き足れり。

致命者は地上の甘樂を嗜まずして、天上の福樂を獲、諸天使と同住する者と爲れり。主よ、彼等の祈祷に因りて、我等を憐みて救ひ給へ。

光榮、今も、生神女讃詞。

慶べよ、生神女マリヤ、毀たれぬ殿、更に言へば聖なる殿や、預言者の呼ぶが如し、爾の聖なる殿は義に於て奇異なり。

次ぎて「主宰よ、今爾の言に循ひて」。聖三祝文。「天に在す」の後に聖人の讃詞。

光榮、今も、生神女讃詞、讃詞の調に循ふ。聯祷及び發放詞。

~~~~~

第二調 主日の晩課 三一三

第二調 主日の晩堂課 三一四

主日の晩堂課

至聖なる生神女を讃頌する規程、第二調。

第一歌頌

イルモス、全く備はれる力は昔ファラオンの全軍を深水に敷き、人體を取りし言、讃榮せらるる主は萬の悪を致す罪を滅し給へり、彼嚴に光榮を顯したればなり。爾より我等の爲に輝きし暮れざる日は、嚴に爾を靈智にして至りて明なる天と顯したり。故に爾に祈る、我を慾の臭氣より脱れしめ給へ、我が愛を以て爾獨一の母童貞女を歌頌せん爲なり。

女宰よ、我爾、靈智の熾炭を取りて人の性を潔めし鉗なる者に祈る、我が多くの罪過の穢を滌ひ、爾の祈祷を以て我を汚す諸慾より脱れしめ給へ。

光榮

仁慈の泉なるハリストスを生みて、人人の爲にエデムを啓きし至淨なる生神女、世界の女宰よ、我が爲に爾の慈憐の門を啓きて、我に諸罪の赦を與へ給へ。

今も

女宰・永貞童女よ、爾の子及び神に祈りて、我が罪過の縛を斷ち、我を攻むる罪を除き給へ、我が救はれて、常に爾純潔なる者を歌頌せん爲なり。

第三歌頌

イルモス、爾我を信の石に堅く立て、我が口を啓きて我が敵に對はしめ給へり。蓋、我が神は樂しみて歌へり、吾が神と侘しく聖なるはなく、主よ、爾の外に義なるはなし。

あさ ほし さき かがや ひ い ひ もの う しじょう
晨の星より先に輝きしハリストス、日よりする入らざる日たる者を生みし至淨なる
じょさい なんじ きとう こうせん わ しよく きり くらやみ われ てら たま
女宰よ、爾の祈祷の光線にて我が諸慾の霧と幽闇とを拂ひて、我を照し給へ。
しじょう もの なんじ さん もつ なんじ はんぞ おちい やぶ まく おこ いの
至淨なる者よ、爾の産を以て爾は先祖ダウイドの陥りて壞られたる幕を興せり。祈
る、生神女よ、諸慾諸罪に因りて壞られたる我爾の僕をも興し給へ。

光榮

どうていじょ わ たましい しよざい しよく しりぞ つるぎ な われ なんじ まも おか
童貞女よ、我が靈の諸罪諸慾を退くる劍と爲りて、我を爾に護られて侵されぬこ
か らくえん ごと な れいしん はな ひら もの あらわ たま
と彼の樂園の如く爲して、靈神の花を開く者と顯し給へ。

今も

かみ はは じれん て の われ お なんじ はし つ なんじ ふふく なんじ たすけ もと
神の母よ、慈憐の手を舒べて、我を受け、爾に趨り附きて、爾に俯伏し、爾の援を求
むる者を凡の定罪より脱れしめ給へ。

第二調 主日の晩堂課 三一五

第二調 主日の晩堂課 三一六

第四歌頌

イルモス、主よ、我爾を歌ふ、蓋風聲を聞きて懼れたり、爾は我迷へる者を尋ねて、我
にまで至ればなり。故に慈憐深き主よ、我に於ける爾の大なる寛容を讚榮す。
ひと せい けがれ なきせい ばんだね ぞうせいしゅ これ と じんせい あらた つく もの わ しよく
人の性の穢なき聖なる 醇、造成主が之を取りて人性を改め造りし者よ、我が諸慾
の穢を消し、我が諸罪の不潔を潔め給へ。
いさぎよ きょさい なんじ きとう いやく ふゆう もつ いま わ たましい きず しよざい いたみ いや たま
潔き女宰よ、爾の祈祷の醫藥と傳油とを以て、今我が靈の疵、諸罪の傷を瘳し給
へ、爾は人性の神妙なる醫療を生みたればなり。

光榮

じごく しば もの すくい たま う じょさい わ しよく なわめ と
地獄に縛られたる者に救を賜ひしハリストスを生みたる女宰よ、我が諸慾の縛を解
き、爾の祈祷の劍にて我が諸罪の桎梏を截ち給へ。

今も

いさぎよ もの はなはだ われ くら ましし わ たましい しよく いや おもい てら たま われ せ
潔き者よ、甚しく我を味ましし我が靈の諸慾を醫して、思念を照し給へ。我を攻
めて、毎日我が爲に網を張る衆くの悪鬼を遠く我より逐ひ給へ。

第五歌頌

イルモス、幽闇に居る者の光照、失望する者の救贖たるハリストス我が救主よ、我
爾平安の王に朝の祈祷を奉る爾の光を以て我を照し給へ、我爾の外に他の神を識
らざればなり。
せかい しゆくふく う せかい いにしえ のろい すく じょさい われ ふとう
世界の祝福たるハリストスを生みて、世界を古の詛より救ひし女宰よ、我を不當な
る思念及び凡の憂愁より救ひ給へ、爾は獨信者の歡喜なればなり。
あくき たい わ たましい まち かな はなはだ これ とりこ つと ばんゆう おう
悪鬼の隊は我が靈の城邑を圍みて、甚しく之を虜にせんことを務む、萬有の王の
城邑たる至榮なる女宰よ、破られぬ墉垣たる爾の祈祷を以て我を環りて救ひ給へ。

光榮

あくき いざない はげ あらし わ おもい みだ およそ ぞうぶつ ゆいいち ぜんとう かじとり
悪鬼の誘惑の烈しき颯風は我が思念を亂す、凡の造物の唯一なる全能の舵師ハリス
トスを生みし者よ、速に來りて、之を鎮め給へ。

今も

い きぎよ かみ はは ほろび くらやみ とぎ われ つうかい ひかり かがや たお われ たすけ
潔き神の母よ、滅込の黒暗に閉されたる我に痛悔の光を輝かし、仆れたる我に援助
の手を與へて、爾の祈祷を以て我を興して、神の誠を行はしめ給へ。

第六歌頌

い ルモス、 われ つみ ふち おぼ なんじ あわれみ はか がた ふち よ かみ われ ほろび ひ
イルモス、我罪の淵に溺れて、爾が憐の量り難き淵に呼ぶ、神よ、我を淪滅より引
き上げ給へ。

えい えん いのち う しじょう もの わ たましい にくたい い とき なんじ きとう
永遠の生命を生みし至淨なる者よ、我が靈が肉體より出づる時、爾の祈祷を

第二調 主日の晩堂課 三一七

第二調 主日の晩堂課 三一八

もつ し ころ たま
以て死を殺し給へ。

ひと にく へび われ いざな とら ほつ へび かしら くだ もの う じよさい これ むな
人を悪む蛇は我を誇ひて執へんと欲す、蛇の首を碎きたる者を生みし女宰よ、之を空
しくなし給へ。 光榮

いのち みち わ かみ う もの まが みち ゅ われ なお みち むか
生命の途たるハリストス我が神を生みし者よ、曲れる途を行きし我を直き途に向はし
め給へ。 今も

ひとびと すくい ため かみ う しじょう もの わ たましい しょよく いや うれい まどい か
人人の救の爲に神を生みし至淨なる者よ、我が靈の諸欲を醫して、憂愁の惑に勝
ち給へ。

次ぎて主憐めよ、三次。光榮、今も、

坐誦讚詞、第二調。

じれん いずみ しょうしんじよ われら あわれみ た つみ ひとびと かえり つね ごと なんじ ちから
慈憐の泉なる生神女よ、我等に憐を垂れ、罪なる人人を顧みて、恒の如く爾の力
を顯し給へ、蓋我等は爾を恃みて、天軍首ガウリイルに倣ひて爾に呼ぶ、慶べよ。

第七歌頌

い ルモス、 えいち しょうしや こがね ぞう つか みずか ほのお おもむ かれら しょうしん はずか
イルモス、睿智なる少者は金の像に事へずして、自ら焰に趣き、彼等の諸神を辱
しめ、焰の中に在りて呼びしに、天使彼等に露を注げり、爾等の口の祈祷は已に納
れられたり。

しょうよく なみ わ おもい みだ たましい うご もと しんみょう めい なみ うみ しず
諸慾の浪は我が思念を擾し、靈を蕩かす。求む、神妙なる命にて濤たつ海を鎮めた
る主を生みし童貞女よ、之を無慾の平穩に變じて、肉體の紛擾を治め給へ。

どうていじよ われ なんじ ぼく なんじ てん あらわ れいち ひがし もん し なんじ よ てん
童貞女よ、我爾の僕は爾を天より現れたる靈智なる東の門と知りて、爾に依りて天
に入らんことを祈る、女宰よ、我を接けて、光を以て導き給へ。

光榮

なんじ こ あまん じゅうじか てい くらやみ しゅりょう はず し はいかい
ハリストス爾の子は甘じて十字架に釘せられて、黒暗の首領を辱かしめ、死の廢壞
の力を滅せり。至淨なる女宰よ、此の十字架にて我が肉慾の想を殺し給へ。

今も

い きぎよ もの しん もつ なんじ ほし つ すくい もと もの ため なんじ うま かみ た
潔き者よ、信を以て爾に趨り附きて、救を求むる者の爲に爾より生れし神に絶え
ず祈り給へ。爾は獨世界の保護者、望を失ひし者の冀望及び守護、艱難に惱まざる
者の援助なり。

第八歌頌

イルモス、三重に福たる少者は金の像を顧みずして、變易なき活ける神の像を見て、
焰の中に歌へり、造を受けし萬物は主を歌ひて、萬世に讃め揚ぐべし。
聖者の至聖なる者、古の幕の模式を示しし大なる司祭長を己の中に宿しし

第二調 主日の晩堂課 三一九

第二調 主日の晩堂課 三二〇

神造の幕たる童貞女よ、我が心を萬有の王、至上者ハリストスの聖なる幕と爲し給へ。

神聖なる匱及び約の石板を賜ひし爾の像られぬ子ハリストス、神の至淨なる言を抱きし童貞女よ、爾の祈祷に依りて、此の言が神の指を以て板に於けるが如く、我が靈に録さるるを致し給へ。

光榮

純潔なる女宰よ、爾の胎より、尊き石は山よりするが如く截り分けられて、獨一全能の有權者として、悉くの迷の柱を摧けり。求む、彼を以て今我が靈の諸慾の像を滅して、無形の敵の領を壊り給へ。

今も

生神童貞女よ、諸罪の焰に由りて潤れたる我が心に生命の水を飲ませて、常に我に傷感を與へ給へ。蓋我畏を以て歌ふ、萬物は主を歌ひて、世世に彼を讃め揚ぐべし。

第九歌頌

イルモス、日より前に光り輝きし神、肉體にて我等に臨みし者を、貞潔の腹より言ひ難く生みし讚美たる至淨き生神女よ、我等爾を崇め讚む。

潔き者よ、爾は義の日たるハリストスを輝かして、至りて光明なる天と顯れたり。求む、彼に由りて爾の祈祷を以て我が諸慾の夜を散じて、我が靈を照し、我が心を耀かして、明なる者と爲し給へ。

生神女よ、我が烈しき敵を審き、之に勝ちて、我を其侵害より援け給へ。蓋爾は善にして義なる審判者、神性の議定の中に死を定罪せし者を生み給へり。

光榮

童貞女よ、神として肉體なき者を造りし主は爾より肉體を取り給へり。求む、爾の祈祷を以て我爾の僕を肉慾の攻撃及び肉體の思念より脱れしめ給へ。

今も

爾は先にアダムの性を造りし新なるアダムのを生みて、エワの哀を釋き給へり。求む、我が諸罪の書券をも裂きて、我を菑害と憂愁と諸慾より脱れしめ給へ。

次ぎて「常に福にして」。聖三祝文。「天に在す」の後に諸讚詞。其舵常例の如し、并に發放詞。

~~~~~

月曜日の早課

第一の誦文の後に傷感の坐誦讃詞、第二調。

我が不法は海の浪の如く我を打つ、我多くの罪に縁りて舟の如く淵に沈む。主よ、我を痛悔の穩なる湊に向はしめて、我を救ひ給へ。

句、主よ、爾の憤を以て我を責むる母れ、爾の怒を以て我を罰する母れ。

主よ、我は果なき樹なり、聊も痛悔の果を結ばずして、斫らるるを畏れ、彼の滅えざる火に慄く。故に爾に祈る、此の禍に先だちて我を反正せしめて救ひ給へ。

光榮、今も、生神女讃詞。

慈憐の泉なる生神女よ、我等に憐を垂れ、罪なる人人を顧みて、恒の如く爾の力を顯し給へ、蓋我等は爾を恃みて、天軍首ガウリイルに倣ひて爾に呼ぶ、慶べよ。

第二の誦文の後に坐誦讃詞、第二調。

我を憐み給へとダウイドは言へり。我も爾に呼ぶ、救世主よ、我罪を犯せり、痛悔を以て我が諸罪を潔めて、我を憐み給へ。

句、主よ、爾の憤を以て我を責むる母れ、爾の怒を以て我を罰する母れ。

神よ、我を憐み、我を憐み給へと、ダウイドは二の罪の爲に泣けり、我は無数の罪過の爲に爾に呼ぶ。彼は涙にて其褥を濡せり、我は一滴だに注がざりき。望を失ひて祈る、神よ、爾の大なる憐に因りて我を憐み給へ。

句、神よ、爾は爾の聖所に於て嚴なり。

諸聖人は爾雲を以て天を覆ふ者を己の衣と爲して、世に在りて不法者より苦を忍びて、偶像の迷を空しくせり。救世主よ、彼等の祈祷に因りて我等をも見えざる敵より脱れしめて救ひ給へ。

光榮、今も、生神女讃詞。

生神女よ、我等爾を崇め讃めて呼ぶ、入らざる光の雲よ、慶べ、爾は此の光なる光榮の主を爾の懷に抱き給へり。

第三の誦文の後に坐誦讃詞、第二調。

ハリストスよ、我は知ると知らずして、晝と夜に罪を犯して、獨地上に於て我が不法を以て爾の怒を招く。獨仁慈にして不死なる主、慈憐に因りて罪人を召して悔改せしめん爲に來りし者よ、爾の諸天使の祈祷に因りて、我を反正せしめて救ひ給へ。

無形の者の至聖なる品位は爾仁慈の神主宰に祈りて、我等愛を以て彼等の幟幟に

趨り附く者を定罪の時に宥め、烈しき苦と、魔鬼の姦悪と、諸慾の昏昧と、凡の危難より脱れしめんことを求む。

光榮、今も、生神女讃詞。

いぎぎよ しょうしんじょ よめ よめ たね ばんゆう しゅさい う もの かれ しょうてんし とも いの  
潔き生神女、聘女ならぬ聘女、種なく萬有の主宰を生みし者よ、彼に諸天使と偕に祈  
りて、我等を凡の迷惑より脱れしめ、我が靈に傷感と、光照と、諸罪の潔淨とを賜  
はんことを求め給へ、爾獨速なる保護者なればなり。

傷感の規程、我が主イイス ハリストス及び其聖なる致命者に奉る。其冠詞は、神の言よ、我に涙の雨を賜へ。イオシフの作。第二調。

### 第一歌頌

イルモス、人人よ、來りて、海を分ちて、エジプトの奴隷より引き出しし民を過らせしハリストス神に歌を歌はん、彼光榮を顯したればなり。

人體を取りて、宣給ひし如く、義人を召す爲に非ず、乃罪人を召して悔改せしめん爲に來りし言よ、多く罪を犯しし我を納れて救ひ給へ。

獨我は諸罪に服従し、獨我は諸愆の爲に門を啓けり。獨能く變易せしむる主よ、我を反正せしめて、爾の慈憐に由りて救ひ給へ。

### 致命者讚詞

主よ、凶悪者の強暴に勝ちて、不死の富を得たる受難者は榮冠を冠りて、爾の審判座の前に立つ。

### 致命者讚詞

受難者は、聖神の力を以て、我等に治醫の流を注ぎて、常に我が肉慾の流動を涸らす。

### 生神女讚詞

無愆の泉を生みし少女、獨神の恩寵を蒙れる者よ、諸愆に傷つけられし我を醫して、永遠の火を免れしめ給へ。

又聖なる無形天軍の規程。其冠詞は、天使の會に讚美を歌ふ、フェオファンの作。第二調。

### 第一歌頌

イルモス、選ばれたるイズライリは曾て履まれぬ、常ならぬ、海の路を足を濡らさずして過りて呼べり、主に謳はん、彼光榮を顯したればなり。

ハリストスよ、爾は無形なる品位、爾を全能者として讚榮する者を、爾の神性の光線にて燃やされたる神妙なる熾炭と著し給へり。

ハリストスよ、天使等は爾に近づくに因りて賜はりたる不朽の力と不死の光榮とを獲て光り輝く。

ハリストスよ、光れる天使等は其性に屬する無形の潔淨を顯し、又形状を以

第二調 月曜日の早課 三二五

第二調 月曜日の早課 三二六

て有形にも之を示す。

### 生神女讚詞

潔き童貞女よ、天使の品位は喜びて性に超ゆる爾の産に奉事す、爾は彼等の神及び主を生みたればなり。

### 第三歌頌

イルモス、木を以て罪を殺しし主よ、我等を爾の中に堅めて、爾を畏るる畏を我等、

爾を歌ふ者の心に植え給へ。

朽ちざる腹に入りたるハリストスよ、愆にて朽ちたる我が靈を痛悔に由りて新にして、永在の光に満てらるる者と顯し給へ。

人を愛する主よ、我爾の怒を干す敵に従ひ、凡の罪を行ひて、無智に爾獨一恒忍の主を怒らせたり。

致命者讃詞

十字架に護らるる勝たれぬ救世主の軍士たる致命者は、神に由りて、垣を毀つが如く、勇ましく迷の堅堡を毀てり。

致命者讃詞

勇敢なる受難者よ、爾等は神の力を以て己の弱きを堅めて、敵の堅堡を全く滅せり。

生神女讃詞

マリヤ、黄金の香爐なる者よ、我が諸愆の臭氣を拂ひて、敵の詭譎なる攻撃に揺かさるる我を固め給へ。

又

イルモス、ハリストスよ、爾の權能に因りて強き者の弓は折られ、弱き者は力を帯びたり。

性に依りて不死なる神は睿智を以て天軍を造り、恩寵を以て之を不死の者と爲し給へり。

二次

熱切なる愛を以て今ハリストスの前に立てる諸天使よ、我等衆の救はれんことを祈り給へ。

生神女讃詞

母永貞童女よ、時を造りし主は定まりたる時に於て爾より始を受け給へり。

第四歌頌

イルモス、主よ、我爾を歌ふ、蓋風聲を聞きて懼れたり、爾は我迷へる者を尋ねて、我にまで至ればなり。故に慈憐深き主よ、我に於ける爾の大なる寛容を讚榮す。

主よ、我罪の不潔に陥り、上よりの華美を失ひて、苦を懼る。故に痛悔の美しきを以て我が卑微なる靈を照し給へ。

詭譎の者は詭譎なる言を以て我を爾より奪ひて、己の食と爲せり。萬有の神よ、我を其姦惡より脱れしめて、痛悔に召し給へ。

第二調 月曜日の早課 三二七

第二調 月曜日の早課 三二八

致命者讃詞

致命者よ、爾等は猛獸の食に昇へられ、火に焼かれ、皮を剥がれ、百體を寸斷せられて、ハリストスを援くる者と爲して背かざりき。彼に我不當の者の爲に熱切に祈り給へ。

致命者讃詞

ハリストスの致命者よ、爾等は性に於て惟一者位に於て三者として、造られざる神性を尊みて、敢て造られたる物を尊まざりき、故に諸の苦を受けたり。

生神女讃詞

至淨なる者よ、主は爾の潔き血より身を取り、甘じて人人に合せられ、常に爾の祈祷

に因りて傾けられて、嘗て罪に沈みたる痛悔者を受け給ふ。

又

イルモス、人を愛する主よ、我爾の光榮なる攝理を聞きて、爾の悟り難き能力を讚榮せり。

宏恩の主よ、我無形の者を祈祷者として爾に進む、慈憐なるに因りて彼等を受けて、我を諸罪より救ひ給へ。

神聖なる靈智者は萬有の原因なる睿智に近づきて、至りて上なる智識に光照せらる。天上の品位の神聖なる裝飾は聖神に護られて變易せず。

### 生神女讚詞

童貞女よ、イサイヤは遙に爾が人體を取りし神を手を抱けるを見て、預言せり。

### 第五歌頌

イルモス、光を賜ひ、世世を造りし主よ、爾の誠の光の中に我等を導き給へ、我等爾の外に他の神を識らざればなり。

瞽者の目を啓きし主よ、我が味みたる靈を照し、之を善行の爲に警醒せしめて、怠惰の眠を終まで厭はん爲に堅め給へ。

昔盜賊に遇ひし者の傷を醫しし獨一の救世主よ、我が實に罪の甚しき傷を患ふる靈を醫し給へ。

### 致命者讚詞

尊き受難者の會は不法なる窘逐者の會を辱かしめて、多様の苦を忍びたり。今は絶えず天使の聖にせられし會と偕に悦ぶ。

### 致命者讚詞

光明なる致命者は忍耐の光線を放ちて、神聖なる神に藉りて信者の靈を照す至りて明なる星と現れたり。

### 生神女讚詞

第二調 月曜日の早課 三二九

第二調 月曜日の早課 三三〇

讚美たる者よ、爾は我等の爲に新なる嬰兒として永遠の子、二性にして二の旨二の行を有つ人及び神なる主を生み給へり。

又

イルモス、イサイヤに熱炭として現れし日は童貞女の腹より黒暗に迷ひし者に輝きて、神を知る知識の光照を賜ふ。

至聖なる神元に近く立ちて光り輝けるヘルウィム、セラフィム及び至高なる寶座は神に倣ひて、他の者を光照す。二次。

悉くの光の原因なる神の言よ、爾は光明なる天軍、樂と正直なる智慧とを以て爾の光照を受くる者を造り給へり。

### 生神女讚詞

潔き神の聘女よ、聖にせられし天使首ガウリイルは天より飛び下りて爾に原祖の憂を解く歡喜を福音せり。

### 第六歌頌

イルモス、我罪の淵に溺れて、爾が憐の量り難き淵に呼ぶ、神よ、我を淪滅より引

き上げ給へ。

我蛇の悪毒に倒されて、失望の牀に臥す。言を以て癡癡の者を起ししハリストスよ、我をも起し給へ。

人を愛する主よ、蛇の暴風に荒され、常に罪の浪に溺らさるる我をペトルの如く救ひ給へ。

致命者讃詞

致命者よ、爾等は性の界に限られずして、性に超えて苦を忍べり、故に智慧に超ゆる福樂を獲たり。

致命者讃詞

至榮なる致命者よ、爾等は善なる者、美なる者、尊貴なる者として、至善、至美、至尊の主に體合せられて、常に我等の爲に祈り給ふ。

生神女讃詞

純潔なる者よ、造物主は萬族の中より爾、其愛する所のイアコフの榮を選びて、爾より輝きて現れ給へり。

又

イルモス、主宰よ、傷める靈より祈祷の言の聲を聞きて、我を諸難より脱れしめ給へ、爾は獨我等の救の縁由なればなり。

主宰ハリストスよ、爾の光榮の神聖なる處に光明の天軍は神元の光に輝かされて、常に爾を讃榮して楽しむ。

二次。

神の力に堅めらるるセラフィム等は、黙さぬ聲を以て三聖の歌を奉りて、我等に三位の神性を尊まんことを教ふ。

生神女讃詞

第二調 月曜日の早課 三三一

第二調 月曜日の早課 三三二

少女よ、主は其言ひし如く、昔眞實を以てダウイドに誓ひし事を爾の腹より出づるを以て行へり、爾は天地を宰る者を生みたればなり。

第七歌頌

イルモス、黄金の偶像がデイルの野に奉事せられし時、爾の三人の少者は神に逆ふ命を顧みずして、火の中に投げられ、涼しくせられて歌へり、我が先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

我心の放蕩と悪鬼の攻撃とに由りて凡の耻づべきことに充てられて、蕩子の如く爾の誠に遠ざかれり。今は歸りて呼ぶ、我彼の如く罪を獲たり、我が爲に身を取りしイイススよ、我を厭ふ勿れ。

萬有の神よ、爾は昔痛悔せし三ネワイヤ人を死を生む恐嚇より救へり。獨人を慈む主よ、此くの如く多くの放蕩に汚されたる我が心、今爾に歸る者を烈しき苦より脱れしめ給へ。

致命者讃詞

神福なる聖致命者よ、爾等に傷つけんと欲せし凶悪者は甚しく傷つけられて、瘡されぬ者と爲れり。然るに爾等の傷は古の誘惑者の攻撃にて傷つけられし衆信者の爲に醫治と爲れり。

致命者讃詞

大致命者よ、爾等は猛き獸をも、窘逐者の恐嚇をも、火をも、傷をも、斬る劔をも、焼

く器をも畏れずして、他人の身に於けるが如く一切を忍べり、故に榮冠を獲たり。

### 生神女讃詞

至淨なる神の聘女少女よ、爾の腹は神聖なる智識の輝煌にて無神を退けし無形の光の居處と爲れり。我等彼を歌ひて呼ぶ、我が先祖の神は崇め讃めらる。

又

イルモス、昔少者は智慧深き辯舌者と現れて、至りて敬虔なる靈より口を以て祝讃して歌へり、先祖及び我等の至聖なる神よ、爾は崇め讃めらる。

天の靈智者は爾の言ひ難き光榮の寶座を環りて、常に樂しみて、黙さざる口を以て歌ふ、先祖及び我等の至聖なる神よ、爾は崇め讃めらる。

天使の品位は爾が肉體と共に天に擧げらるるを見る時、爾の爲に天の門を啓きて歌へり、先祖及び我等の至聖なる神よ、爾は崇め讃めらる。二次。

### 生神女讃詞

少女よ、ガウリイルは爾が律法及び諸預言者の首先なるを示して呼べり、獨讃美たる者よ、視よ、爾は先祖及び我等の爲に至聖にして崇め讃めらるる神を生み給ふ。

第二調 月曜日の早課 三三三

第二調 月曜日の早課 三三四

### 第八歌頌

イルモス、昔ワロイロンの火の爐は神の命によりて其勢を分ち、ハルデイを焦して、信者を涼しくせり、主の悉くの造物は主を崇め讃めよと歌へばなり。

我凶悪者に従ひて、其悪謀に由りて奴隸とせられたり、誘惑者は我が大きく弱りたるを見て誇る。迷へる者を喚び歸す慈憐なる主よ、我を彼より脱れしめ給へ。

解かれぬ者の永遠の鐵索を解きたるハリストス救世主よ、肉慾の解き難き鐵索に縛られたる我を解きて、救の道を行くに向はしめ給へ。

### 致命者讃詞

種種の苦の原因なる者は實に我卑微なる者の上に其悉くの姦惡を顯せり。福たる致命者、實にハリストスの苦に倣ひし者よ、我を其毒害より脱れしめ給へ。

### 致命者讃詞

讃美たる致命者よ、爾等は偶像の前に膝を屈めざりしに因りて、古の少者の如く苦の爐に投げられ、神聖なる露に由りて焚かれぬ者と顯れて、ハリストスを世々に歌ふ。

### 生神女讃詞

神の母童貞女よ、凶悪者の多くの攻撃に由りて弱りたる我が不當の靈を、醫治を施す爾の祈祷を以て健康の者と爲し給へ、我が萬世爾を讃榮せん爲なり。

又

イルモス、三重に福たる少者は金の像を顧みずして、變易なき活ける神の像を見て、焰の中に歌へり、造を受けし萬物は主を歌ひて、萬世に讃め揚ぐべし。

言よ、爾は諸天使を爾の仁慈の肖として造り給へり。彼等は熱切に爾の誠を行ひ、

かつしゅう しんじや たす うた ぞう う ばんぶつ しゅ うた ばんせい ほ あ  
且衆信者を助けて歌はしむ、造を受けし萬物は主を歌ひて、萬世に讃め揚ぐべし。  
ハリストスよ、爾は聖天使等の神聖なる華美を以て天の居處を飾り、彼等を光照し  
て爾に歌はしむ、造を受けし萬物は主を歌ひて、萬世に讃め揚ぐべし。  
われら よろこ もだ むけい のもの しんせい うた うた しゅさい しゅくさん かれら とも よ  
我等喜びて、黙すなく無形の者の神聖なる歌を歌ひ、主宰を祝讃して彼等と偕に呼  
ばん、造を受けし萬物は主を歌ひて、萬世に讃め揚ぐべし。

### 生神女讃詞

しせい しょうしんじよ ちえ もつ いっさい つかさ せいちよく しゅ よろ かな なんじ むてん しじょう  
至聖なる生神女よ、智慧を以て一切を宰る正直の主は、宜しきに合ひて爾無玷至淨  
なる童貞女を愛して、言ひ難く爾の内に入り給へり。我等彼を讃榮して呼ぶ、萬物  
は主を歌ひて、萬世に讃め揚ぐべし。

第二調 月曜日の早課 三三五

第二調 月曜日の早課 三三六

次ぎて生神女の歌詠を歌ふ、「我が靈は主を崇め」。

### 第九歌頌

イルモス、<sup>しよく</sup>食に縁りて甚しく朽壞に陥りし<sup>い</sup>アダムを、言ひ難き智慧を以て改めん爲  
に神より來りし神言、我等の爲に測り難く聖なる童貞女より身を取りし主を、我等  
しんじや どうしん うた もつ あが ほ  
信者は同心に歌を以て崇め讃む。

視よ、工作の時なり、靈よ、何ぞ大きく悶えて無智に眠れる。起きて、涙を以て爾  
の燈を整へよ。急げ、靈の新娶者は近づく、遅はる勿れ、恐らくは神聖なる門の外  
に遺されん。

嗚呼凡の行爲を諸天使及び人人の前に裸體にして顯す爾の審判は何ぞ懼るべき、  
嗚呼爾が罪を犯しし者に發せんとする言は何ぞ烈しき。ハリストスよ、終の前に我  
を之より脱れしめて、我に反正の涙を與へ給へ。 **致命者讃詞**

光榮なる聖受難者は 羔及び牧者の神聖なる血を以て印されて、無玷なる 羔の如く屠  
られて悦べり。今は實に在天の冢子の聖なる全教會を裝飾す。

### 致命者讃詞

ゆうかん じゅなんしや なんじら ひ ごと かがや ともしび あらわ なんじら くるしみ こうせん およそ  
勇敢なる受難者よ、爾等は日の如く輝ける燈と顯れて、爾等の苦の光線にて凡の  
たましい てら およそ まよい くらやみ しりぞ ゆえ われら しん もつ よろ かな なんじら さんしょう  
靈を照し、凡の迷の幽闇を斥く。故に我等信を以て宜しきに合ひて爾等を讃頌す。

### 生神女讃詞

主よ、我を宥め、審判せん時我を宥めて、火に定罪する母れ、爾の憤を以て我を責  
むる母れ。ハリストスよ、爾を生みし童貞女と、衆くの天使と、致命者の會とは我が爲  
に爾に祈る。

又

イルモス、神の言、童貞女の子、諸神の神、諸聖の至聖者たる主よ、爾は全く冀望、  
全く甘味なり、故に我等皆爾及び爾を生みし者を崇め讃む。

ハリストスよ、白衣にして現れたる天使等は爾の神聖なる門徒に爾の再度の降臨を  
傳へたり。彼等と偕に我等皆爾を祝讃して崇め讃む。 **二次。**

爾は凡の靈智なる性の恩主として、至大なる仁慈に由りて、爾の元始の光を像る  
第二の光明を造り給へり。故に我等皆感謝して爾を崇め讃む。

生神女讃詞

至りて潔き者よ、神聖なる天軍首は爾の光潔なる童貞を悟り、之を奇として、喜  
を爾に報ぜり。故に我等皆爾を生神女として崇め讃む。

次ぎて「常に福にして」、及び叩拜。小聯禱及び光耀歌。其他常例の如し。

第二調 月曜日の早課 三三七

第二調 月曜日の早課 三三八

挿句に傷感の讃頌、第二調。

仁慈の主よ、我は行ひし不當なる我が行爲を思ひて、税吏と、泣きたる淫婦と、放蕩  
の子に效ひて、爾の慈憐に趨り付き、爾に俯伏して祈る、神よ、我を定罪せざる先  
に我を宥めて、憐み給へ。

句、主よ夙に爾の憐を以て我等に飽かしめよ、然せば我等生涯歡び樂しまん。爾我等  
を撲ちし日、我等が禍に遭ひし年に代へて、我等を樂しましめ給へ。願はくは爾の

工作は爾の諸僕に著れ、爾の光榮は其諸子に著れん。

童貞女より生れし主よ、我が不法を顧みずして、我が心を潔めて、之を爾の聖神の殿  
と爲し給へ。無量なる大仁慈を有つ主よ、我を爾の顔より退くる勿れ。

句、願はくは主吾が神の恵は我等に在らん、願はくは我が手の工作进行を我等に助け給  
へ、我が手の工作进行を助け給へ。

致命者讃詞

嗚呼受難者致命者よ、爾等はハリストスの爲に死に至るまで苦を忍びて、爾等の靈  
を天上に神の手に託し、爾等の不朽體は全世界に尊まる。諸司祭諸王は爾に伏拜し、  
我等衆民は喜びて常に呼ぶ、聖人の死は主の目の前に貴き寝なり。

光榮、今も、生神女讃詞。

生神女よ、我等憑恃を以て爾に負はせたり、願はくは望を失はざらん。惑はさる者  
の扶助者よ、我等を患難より救ひて、諸敵の悪謀を破り給へ、讃美たる者よ、爾は我等  
の救なればなり。

次ぎて「至上者よ、主を讃榮し」。聖三祝文。「天に在す」の後に讃詞及び聯禱。次  
に第一時課、常例の聖詠、及び發放詞。



月曜日の眞福詞、第二調。

我等盜賊の聲を爾に奉りて祈る、救世主よ、爾の國に於て我等を憶ひ給へ。

句、義の爲に窘逐せらるる者は福なり、天國は彼等の有なればなり。

主神よ、我を救ひて、靈を全くして爾を愛する者の分に與る者と爲し給へ。

句、人我の爲に爾等を詬り、窘逐し、爾等の事を譎りて諸の悪しき言を言はん時

は、爾等福なり。

衆天軍は畏を以て爾神に奉事す。彼等の祈祷に因りて我等を救ひ給へ。

句、喜び樂しめよ、天には爾等の賞多ければなり。

受難者よ、爾等は信の武器を以て敵の軍隊に勝ちて、神に攜へられたり。

光榮

第二調 月曜日の眞福詞 三三九

第二調 月曜日の晩課 三四〇

靈智なる品位は人類と共に三位にして一性なる神を尊む。

今も

神を種なく生みし至淨なる女宰よ、彼に我等の救はれんことを祈り給へ。



月曜日の晩課

「主よ、爾に籲ぶ」に讚頌、第二調。

句、主よ若し爾不法を糾さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人の爾の前に敬まん爲なり。

獨罪なきハリストス、獨惡に與らざる者、獨仁慈の泉なる主よ、我が困苦を見よ、我が患難を見よ。我が傷を悉く痊し、爾の慈憐を以て爾の僕を救ひ給へ、我が怠惰の雲を遠く拂ひて、爾至仁なる我が救主を讚榮せん爲なり。

句、我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を恃む。

嗚呼我が卑微なる靈よ、目を注ぎて爾の行爲を見よ、何ぞ穢らはしき。嗚呼爾の裸體、又爾の孤獨なるを見よ、蓋神及び諸天使より離れて、終なき苦に投げられん。醒めて興きよ、急ぎて呼べ、救世主よ、我罪を犯せり、我に赦を予へて、我を救ひ給へ。

句、我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

我肉體を甚しく汚し、靈と心とを穢らはしき思念にて亂し、我が感覺を悉く殘ひ、目を汚し、耳を穢し、舌を言にて汚して、悉く耻づべき者と爲せり。故に爾に俯伏して呼ぶ、主宰ハリストスよ、我罪を獲、爾の前に罪を獲たり、我を赦して救ひ給へ。

又前驅の讚頌、第二調。

句、願はくはイズライリは主を恃まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、彼はイズライリを其悉くの不法より贖はん。

主の光榮なる前驅よ、爾に祈る、急ぎて我を誘惑より脱れしめ給へ、蓋我と戦ふ殘酷なる惡鬼は大きく我を攻めて、爾の僕の靈を弱き禽の如く捕へんと欲す。至りて福たる者よ、終に至るまで我を遣つる母れ、彼等が爾の我が避所たるを知らん爲なり。

句、萬民よ、主を讃め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讃めよ。  
荒れたる胎の至聖なる果、野の榮ゆる花、美しき燕、聲の清き鶯、黄金の鳩なる

第二調 月曜日の晩課 三四一

福たる前驅よ、常に果を結ばざる我が不當の靈を善行の果を繁く結ぶ者と爲し給へ、  
其百倍の穂を生じて、爾に神聖なる讚美を捧げん爲なり。

第二調 月曜日の晩課 三四二

句、蓋彼が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。  
福たる前驅よ、爾に祈る、我自ら罪過にて定罪せられし者を永遠の火、地獄の黒暗、凡  
の憂愁、凡の困苦、凡の苗害より脱れしめて、爾の祈禱を以て、我を救はるる者の分、  
諸聖人の言ひ難き樂と喜との處に與る者と爲し給へ。

光榮、今も、生神女讚詞。

種種の憂、甚しき誘惑、諸の慾は我が卑微なる靈を荒す。婚姻に與らざる少女、  
ハリストス神の母よ、爾の神聖なる帡幪の下に趨り附く我の爲に生命の海に於て導  
く者と爲りて、我を擾す颶風を鎮め、痛悔と安息との穩なる湊に向はしめ給へ。

本日の提綱。「主よ、我等を守り、罪なくして此の晩。」

挿句に傷感の讚頌、第二調。

ハリストス救世主よ、我放蕩の子の如く爾の前に罪を獲たり。父よ、我痛悔する者  
を受けよ、神よ、我を憐み給へ。

句、天に居る者よ、我目を舉げて爾を望む。視よ、僕の目主人の手を望み、婢の目主婦  
の手を望むが如く、我等の目は主我が神を望みて、其我等を憐むを俟つ。

ハリストス救世主よ、我税吏の聲を以て爾に呼ぶ、神よ、我を彼の如く潔めて、我  
を憐み給へ。

句、主よ我等を憐み、我等を憐み給へ、蓋我等は侮に鑿き足れり、我等の靈は驕  
る者の辱と誇る者の侮とに鑿き足れり。

致命者讚詞

聖なる諸致命者が我等の爲に祈り、ハリストスを歌ふに因りて、凡の迷は熄み、人類  
は信を以て救はる。

光榮、今も、生神女讚詞。

神の母よ、我が盡くの恃を爾に負はしむ、我を爾の覆の下に守り給へ。

次ぎて「主宰よ、今爾の言に循ひて」。聖三祝文。「天に在す」の後に聖人の讚詞。

光榮、今も、生神女讚詞、讚詞の調に依る聯禱。發放詞。



第二調 月曜日の晩課 三四三

第二調 月曜日の晩堂課 三四四

月曜日の晩堂課

至聖なる生神女の規程、第二調

第一歌頌

イルモス、全く備はれる力は昔ファラオンの全軍を深水に敷き、人體を取りし言、讚榮せらるる主は萬の悪を致す罪を滅し給へり、彼光榮を顯したればなり。

潔き者よ、教會は神に依りて華さきたる常に榮ゆる頌美の榮冠を、天使首ガウリイルと偕に、爾神の聘女に奉り、慶べよと歌ひて、敬みて爾に冠らす。

神の恩寵を蒙れる潔き者、ハリストス神の讚美たる母よ、爾は智慧に超えて、父の聖なる地と現れ、生命を施す葡萄を耕作して、生活せしむる飲料を全世界に飲ませ給へり。

光榮

至淨なる者よ、甚しく罪惡に打たれて溺らさるる全世界の神及び主、正しく我等を救の湊に向はしむる舵師なるハリストスを爾生み給へり。

今も

避所及び救の城邑なるマリヤ、神の母よ、我等皆信を以て爾に祈りて、熱切に求む、爾の忠信なる諸僕の祈祷を納れて、我等衆を罪過の擬定より釋き給へ。

第三歌頌

イルモス、木を以て罪を殺しし主よ、我等を爾の中に堅めて、爾を畏るる畏を我等、爾を歌ふ者の心に植え給へ。

エワの誘はるるは神が人人より離るる始と爲れり、聖なる生神女は復神を我等に攜へ給へり。

讚美たる者よ、光榮なるイオアキムは爾を生命の寶藏として世界の爲に生みて、至福なる産を喜ぶ、希望が胎の荒れたる親に由りて至りたればなり。

光榮

アンナより喜悅は人類に輝けり、彼の子は童貞女にして王を生み給へり。女等は彼と偕に其産を喜ぶ、此を以て詛より解かれたればなり。

今も

潔き童貞女よ、棘はシナイに於て爾の至榮なる産を前兆せり、爾神性の火を胎内に受けて、之に焚かれざりしに因る。

第四歌頌

イルモス、人を愛する主よ、我爾の光榮なる攝理を聞きて爾の悟り難き能力を讚榮せり。

第二調 月曜日の晩堂課 三四五

第二調 月曜日の晩堂課 三四六

童貞女よ、イアコフは神妙に爾を神が其上に立ちたる梯として預見せり。

至淨なる者よ、天使等の梯を降ることは爾に藉りて言の我等に来るを示せり。

光榮

讚美たる童貞女よ、爾の胎、爾の乳房は福なり、此等に因りて我等皆生命を得た

ればなり。 **今も**  
神の母よ、我等正信なる聲を以て爾に於ける奥義を歌頌す。此の奥義に因りて爾の  
祈禱を以て教會は護らる。

### 第五歌頌

**イルモス**、幽闇に居る者の光照、失望する者の救贖たるハリストス我が救主よ、我  
爾平安の王に朝の祈禱を奉る。爾の光を以て我を照し給へ、我爾の外に他の神を識  
らざればなり。

讚美たる生神女マリヤよ、我等爾を律法及び約匱より最尊き者として崇め歌ふ、爾  
は石板として萬有の造成主及び神を有ちたればなり。

生神女よ、我等爾を神の言の寶座として讚榮す、神は人として其上に坐して、ヘル  
ワィムより最高き者と現れたり。 **光榮**

童貞女よ、爾は神聖なる爾の産に因りて全人類を苦しき奴隷より釋き、ハリストス  
に於ける自由を以て女の性を尊くし給へり。 **今も**

童貞女よ、爾が子を生みしに因りて、女等は勇ましく敵に勝ち、處女は爾に趨り附  
きて童貞を守る。

### 第六歌頌

**イルモス**、我罪の淵に溺れて、爾が憐の量り難き淵に呼ぶ、神よ、我を淪滅より引  
き上げ給へ。

世界の歡喜なる潔き生神女よ、我等正信を以て天使と偕に爾に呼ぶ、童貞女よ、慶  
べ、我等を爾の歡喜に與らしめて、我が憂を消し給へ。

母永貞童女よ、我等正信を以て爾を奪はれざる歡喜の居處として崇め讚む、我等を爾  
の歡喜に與らしめて、我が憂を消し給へ。 **光榮**

神の聘女よ、爾は神聖なる爾の光榮を以て諸天より最高き天と現れたり、我等の神  
が爾の内に入りて、我に現れたればなり。 **今も**

今女の性は喜び、今憂は熄みて、喜悅は輝けり、マリヤが喜悅なる救世主ハリスト

第二調 月曜日の晩堂課 三四七

第二調 月曜日の晩堂課 三四八

ス神を生みたればなり。

次ぎて主憐めよ、三次。光榮、今も、

### 坐誦讚詞、第二調。

神の母よ、我が靈の甚しき怠惰、我が心の柔弱を見て、爾の祈禱を以て之を醫し、我  
を幽闇及び困苦より脱れしめて、救はれし者の分に與からしめ給へ、爾獨我の恃頼、  
我の慰藉なればなり。

### 第七歌頌

**イルモス**、黄金の偶像がデイルの野に奉事せられし時、爾の三人の少者は神に逆ふ命  
を顧みずして、火の中に投げられ、涼しくせられて歌へり、我が先祖の神よ、爾は崇

め讃めらる。

潔き者よ、昔ゲデオンの羊の毛は神の言の爾に降るを預象せり、爾不朽なる童貞女が露の如く之を受けて孕みたればなり。故に我等皆爾に呼ぶ、潔き者よ、爾の腹の果は祝福せられたり。

マリヤ、ハリストス我が神の母よ、爾に於ける奥義は新にして畏るべく、正しくして驚くべし。蓋我等皆爾に依りて神及び主宰と和睦して、今諸天使と偕に歌ふ、潔き者よ、爾の腹の果は祝福せられたり。

光榮

潔き者よ、昔ゲデオンは明に爾の神聖なる産を預兆して、羊の毛を搾るに由りて水の満ちたる鉢を攜ふ、蓋主は全性を以て神妙に爾至淨の者の内に入り給へり。潔き者よ、爾の腹の果は祝福せられたり。

今も

マリヤよ、爾は萬有の神及び救主を生みて、道に迷へる者の郷導、罪を犯しし者の更新、望を失ひし者の冀望、歌ふ者の援助と爲り給へり、潔き者よ、爾の腹の果は祝福せられたり。

第八歌頌

イルモス、火の爐の中にエウレイの少者に降りて、焰を露に變ぜし神を、造物は主として歌ひて、萬世に崇め讃めよ。至聖なる生神女よ、爾は我等の爲に新なる樂園と顯れて、死を致す樹に非ず、乃生命の樹、種なく栽えたる者として主を生じたり。我等皆彼に養はれて、不死の生命を得るなり。

生神女よ、ハリストスの全教會は爾の産を崇め歌ふ、蓋愛を以て爾に趨り附く罪人及び卑微なる者は皆救はる、ハリストスが人人を救はん爲に地に來りたればなり。

第二調 月曜日の晩堂課 三四九

第二調 月曜日の晩堂課 三五〇

光榮

生神童貞女よ、原母は爾に依りて定罪を釋かれたり。視よ、今女等はハリストスの爲に苦を忍び、女の性は喜ぶ、初致命女スクラの呼ぶが如し。

今も

潔き童貞女、神の母よ、信を以て望を爾に負はしむる者は一人も亡びざりき、唯媚嫉を以て爾の印されたる像に伏拜するを拒む者は亾ぶ。

第九歌頌

イルモス、日より前に光り輝きし神、肉體にて我等に臨みし者を、貞潔の腹より言ひ難く生みし讚美たる至淨き生神女よ、我等爾を崇め讃む。

至聖なる童貞女よ、讚美の詞を以て熱切に爾の産を歌頌する我に爾の耳を傾け、嫠婦の禮物の如く我が口の歌を受けて、我が諸罪の赦を求め給へ。

いさぎよ もの なんじ かび ひか なんじ むてん けつじょう かがや これ さら さかん なんじ さん  
潔き者よ、爾の華美は光り、爾の無玷なる潔淨は輝き、是より更に盛に爾の産は  
ひか かがや ひ およ ばんぶつ かみ ぞうせいしゅ なんじ うま ゆえ われら みな なんじ あが ほ  
光り輝く、日及び萬物の神造成主が爾より生れたればなり。故に我等皆爾を崇め讃  
む。

光榮

しょうしんじょ われら なんじけつじょう ひかり どうてい こうめい およ かみ はは よろ かな うた もつ かしょう  
生神女よ、我等爾潔淨の光、童貞の光明、及び神の母を宜しきに合ひて歌を以て歌頌  
し、讚美の聲と共に爾に祈る、我等を童貞に堅め、潔淨に護り給へ。

今も

しけつ しえい なんじ からだ たましい けがれ かみ ため まも よ  
至潔至榮なるマリヤよ、爾は體と靈とを汚なく神の爲に守りしに因りて、ハリス  
トス王は爾の美しきを慕ひ、爾を己の人性の母と爲して我の救を成し給へり。

次ぎて「常に福にして」、及び躬拜。聖三祝文。「天に在す」の後に諸讚詞、其他常  
例の如し、及び發放詞。



火曜日の早課

第一の誦文の後に傷感の坐誦讚詞、第二調。

わ たましい しんもん おそ おも えいえん くるしみ むくい おのの なみだ なが つうかい もつ  
我が靈よ、審問の畏るべきを思ひて、永遠の苦の報に慄き、涙を流して、痛悔を以  
て呼べ、神よ、我罪を犯せり、我を憐み給へ。

句、主よ、爾の憤を以て我を責むる母れ、爾の怒を以て我を罰する母れ。  
主よ、我定罪せられし我が良心を試みて、爾の懼るべき審判に慄く、我の爲には行  
に由る救なければなり。慈憐の富を有つ主として、ハリストス神よ、我を憐みて

第二調 火曜日の早課 三五一

第二調 火曜日の早課 三五二

すく たま  
救ひ給へ。

光榮、今も、生神女讚詞。

しょうしんじょ われら なんじ あが ほ よ つえ よろこ これ たね しょう かみ き うえ  
生神女よ、我等爾を崇め讃めて呼ぶ、杖よ、慶べ、是より種なく生ぜし神は木の上  
に死を滅し給へり。

第二の誦文の後に傷感の坐誦讚詞、第二調。

われ あわれ たま い われ なんじ よ きゅうせいしゅ われ つみ おか つうかい  
我を憐み給へとダウイドは言へり。我も爾に呼ぶ、救世主よ、我罪を犯せり、痛悔  
を以て我が諸罪を潔めて、我を憐み給へ。

句、主よ、爾の憤を以て我を責むる母れ、爾の怒を以て我を罰する母れ。  
神よ、我を憐み、我を憐み給へと、ダウイドは二の罪の爲に泣けり、我は無数の罪過  
の爲に爾に呼ぶ。彼は涙にて其褥を濡せり、我は一滴だに注がざりき。望を失ひ  
て祈る、神よ、爾の大なる憐に因りて我を憐み給へ。

句、神よ、爾は爾の聖所に於て嚴なり。

致命者讚詞

ハリストス神よ、爾は至善なる主として、爾の聖者を黄金よりも耀く者と爲し、爾

の克肖者の榮を顯せり。仁慈なる主として、彼等の祈禱を納れて、我等の生命を平安  
ならしめ給へ。獨聖者の中に休む主よ、我等の禱を香爐の香の如く升らしめ給へ。

光榮、今も、生神女讃詞。

生神女よ、我保護を爾に求むる者を棄つる勿れ、我が靈爾を頼めばなり、我を憐み給  
へ。

第三の誦文の後に坐誦讃詞、第二調。

イオアンよ爾は慈憐の盡きざる泉をイオルダンの流に沈めたり。故に我熱切に爾に  
祈る、多くの慾に溺らされ、日に甚しく世俗の淵に沈めらるる我を、爾の嘉して納  
れらるる祈禱を以て、生命の湊に導き給へ。

至善なるハリストスよ、爾は大なる慈憐に因りて、天を傾けて降りて、爾の造物を  
救はん爲に來れり。故に我等爾の畏るべき定制を歌ひて爾に呼ぶ、爾の前驅の祈禱  
に由りて我等に諸罪の潔淨を與へ給へ、爾獨慈憐の主なればなり。

光榮、今も、生神女讃詞。

夫を識らずして己の造成主を生みて、凡の肉體に糧を賜ふ者に乳を哺まする母を孰  
か見、誰か聞きたる、嗚呼奇跡や。恩寵を蒙れる生神女よ爾の腹はヘルウィムの寶座  
と顯れたり、我等の靈の爲に祈り給へ。

第二調 火曜日の早課 三五三

第二調 火曜日の早課 三五四

傷感の規程、我が主イイスス ハリストス及び聖なる致命者に奉る。其冠詞は、嗚呼  
救世主よ、爾我が涕泣を納れ給ふ。イオシフの作。第二調

第一歌頌

イルモス、靈よモイセイの歌を採りて籲べ、佑け護る者顯れて、我が救と爲れり、彼  
は吾が神なり、我彼を讃め揚げん。

兄弟よ、逝世の先に痛く己の爲に哭かん、善き涙に由りて、其時聊も益を爲さざ  
る苦の涙を逃れん爲なり。

ハリストスよ、我千萬度痛悔せんことを約したれども、感動なき靈を有ちて、罪過  
に陥る。救世主よ、我が弱きを憐み給へ。

致命者讃詞

神性の恩寵に濕されて、苦の火を忍びしハリストスの受難者よ、甚しき慾の中に沈  
みたる我を地獄の火より脱れしめ給へ。

致命者讃詞

讚美たるハリストスの致命者よ、爾等は神の力に由りて敵に對して堅固なる者と顯  
れて、彼等の堅固ならざる力を破れり。

生神女讃詞

イサイヤが昔熾炭を執れる鉗として見たる神の母よ、我が心の肉慾を焼きて、  
全く滅し給へ。

又至導なる預言者前驅聖イオアンの規程。其冠詞は、授洗者よ、禱を受け給へ。

イオシフの作。第二調。

### 第一歌頌

イルモス、全く備はれる力は昔ファラオンの全軍を深水に敷き、人體を取りし言、  
讚榮せらるる主は萬の悪を致す罪を滅し給へり、彼嚴に光榮を顯したればなり。  
ハリストスの授洗者及び前驅よ、常に肉體の逸樂に沈める吾が心を治めて、諸慾の浪  
を止め給へ、我が神聖なる平穩に在りて爾を歌頌せん爲なり。  
授洗者よ、爾は測り難き光照に照されて、光明なる星として靈智の東に先だてり。  
悪鬼の諸の攻撃に味まされたる吾が心が是の東に輝かされんことを祈り給へ。  
睿智なる者よ、爾は昔凡の罪惡を恩寵の洪水にて溺らす淵を河に沈めたり。福たる者  
よ、祈る、爾の神聖なる轉達を以て我が罪過の流を涸らし給へ。

### 生神女讚詞

第二調 火曜日の早課 三五五

第二調 火曜日の早課 三五六

福たる前驅よ、爾は肉體を取りし神を生みたる潔き童貞女の親族たりき。我等彼と偕  
に爾を尊みて、今爾の神聖なる殿に居る者は祈る、我等をも聖神の殿と爲し給へ。

### 第三歌頌

イルモス、諸善を耕作し、諸徳を培養する神よ、爾の慈憐に因りて、實を結ばざる  
我が智慧を實を結ぶ者と顯し給へ。  
我怠惰の眠にて靈を重くせり、ハリストスよ、之を興して、痛悔の爲に警醒せしめ  
て、爾の戒を行はしめ給へ。  
イイススよ、畏るべき日に於て我を望を失ひし者と顯す勿れ。終に至らざる先に我  
を反正せしめて、烈しき苦より脱れしめ給へ。

### 致命者讚詞

熱愛に由りて善くハリストスの苦に效ひしハリストスの受難者よ、我が靈の甚し  
き慾を醫し給へ。

### 致命者讚詞

受難者よ、爾等は天に在る永久の福を獲ん爲に、地に在りて凡の苦難の誘を堅固に忍  
び給へり。

### 生神女讚詞

潔き者よ、爾は母に宜しきが如く萬衆を養ふ者に乳を哺ませ、常に己の手に萬有  
を持つ主を手を抱き給へり。

又

イルモス、爾我を信の石に堅く立て、我が口を啓きて我が敵に對はしめ給へり。蓋  
我が神は樂しみて歌へり、吾が神と侔しく聖なるはなく主よ、爾の外に義なるはな  
し。

主の前驅よ、祈る、我が靈の傷を醫し、怠惰に由りて味まされたる我が智慧を爾の  
神聖なる轉達を以て照して、我を敵の諸の攻撃より脱れしめ給へ。

睿智なる前驅よ、爾は神の攝理に由りて生れて、生みし者の無結果を釋きたり。主の前驅よ、吾が心の無結果を釋きて、爾の轉達を以て今之を諸徳の果を繁く結ぶ者と爲し給へ。

授洗者及び前驅よ、爾の轉達に由りて、愛を以て神聖なる堂を造る者に天上の居處を獲しめんことを祈れ、信を以て爾の殿に奉事する者を聖神の殿と爲し給へ。

### 生神女讚詞

前驅は母の胎内に在りて樂しみ、恩寵を蒙れる者の胎内に在る主を拜せり、彼に我を凡の憂より救はんことを祈り給へ。

### 第四歌頌

第二調 火曜日の早課 三五七

第二調 火曜日の早課 三五八

イルモス、預言者は爾が童貞女より生るるを預見して、傳へて呼べり、ハリストスよ、我爾の風聲を聞いて懼れたり、蓋爾は南より、樹蔭繁き聖山より來給へり。言よ、詭譎の智者たる敵は我の一切を盜まれて貧しくなりたるを見て、我が滅亡を喜ぶ。光榮の主、貧者を富ます者よ、我を其姦惡より救ひ給へ。主よ、我爲すべからざる事を行ひて、手と目を汚し、爾の慈憐と寛忍とを盡して、爾の怒を干せり。至善なる者よ、我を眷みて憐み給へ。

### 致命者讚詞

神は其聖者、彼に聽きて、偶像の迷を破り、アダムが昔遠ざかりし樂園を嗣ぎたる者の中に何ぞ其れ嚴なる。致命者讚詞 福たる者よ、爾等は己の血の流を以て、昔惡鬼に獻げらるる血、之を獻ぐる衆人の滅亡を致す者を止めたり。故に常に讚美せらる。

### 生神女讚詞

生神女よ、預言者の至榮なる會は聖神に因りて智慧に超ゆる爾の奧義を學びて、種種に聖なる現象を以て之を前兆せり、我等は明に其成就せしを見る。

### 又

イルモス、童貞女に藉りて來りし者は使者に非ず、天使に非ず、主親ら人體を取りて、我全き人を救ひ給へり。故に我爾に呼ぶ、主よ、光榮は爾の力に歸す。恩寵に富める者よ、爾は天を傾けて、人人と對話せし者の首を爾の手にて傾けたり。此の手を以て我を助けて、吾が心を謙遜に護り給へ。福たる前驅よ、荒れたる野は爾を其住居者と爲せり。故に我爾に呼ぶ、我が荒れたる靈、凡の聖なる行なき者に之を具へしめ給へ。爾は神の法を守らしめて、不法に屠られたり。故に我爾に祈る、惡鬼の誘惑に誘はれて、常に不法を行ふ我を正しくなし給へ。前驅よ、爾は己を以て主宰・王の爲に殿と爲して、今神聖なる居處に遷れり。爾の爲に至聖なる堂を造りし者に此の居處を獲しめんことを祈り給へ。

生神女讃詞

純潔なる者よ、我病める者を眷みて、我が治し難き甚しき諸慾を醫し給へ、我が爾全人類を尊くせし者を尊まん爲なり。

第五歌頌

イルモス、我が救世主よ、我の靈の黑暗を掃ひて、爾の誠の光にて我を照し給へ、爾獨平安の王なればなり。

第二調 火曜日の早課 三五九

第二調 火曜日の早課 三六〇

我無智にして罪に罪を加へ、我が死する時に頼る所なし、嗚呼我は如何にしてハリストスの前に立たん。

慈憐なる主よ、我破船の如く難に遇ひ、爾が我に賜ひし載を失ひて、今貧しくなりて呼ぶ、ハリストスよ、我を遣つる母れ。

致命者讃詞

受難者よ、爾等は下の光榮を輕じて、之を踐みしに由りて、天の光榮を獲て、ハリストスと共に居るなり。

致命者讃詞

受難者よ、爾等は思念を肉體の愛より離し、信を以て喜びてハリストスの受けし如き苦を受けたり。

生神女讃詞

生神女よ、ダニエルは聖神に由りて爾を大なる山として見たり、石は是より斫られて、悪鬼の偶像を碎く。

又

イルモス、幽闇に居る者の光照、失望する者の救贖たるハリストス我が救主よ、我爾平安の王に朝の祈禱を奉る。爾の光を以て我を照し給へ、我爾の外に他の神を識らざればなり。

イオルダンの流の中に不朽の泉たるハリストスに洗を授けし前驅よ、我が慾の流を涸らして、我に義人等の麗しき歡喜の甘き流を繼がしめんことを祈り給へ。

我行ひし事と未來の畏るべき審判とを思ひて、悲しみ泣き、恐れ慄き、常に惑ふ。慈憐なる主よ、爾の授洗者の祈禱に因りて我を宥め給へ。

前驅よ、爾は人人の救は罪過の痛悔に在りとの法を立てて、律法と恩寵との間に立ちたり。故に我等爾に祈る、痛悔の式にて我等を照し給へ。

恩主・言よ、爾の諸恩を一切浪費せし我に痛悔の時を與へ給へ、悔改の全世界の宣傳者、大なる前驅イオアンの此が爲に爾に祈るに因りてなり。

生神女讃詞

我詭譎の敵の悪謀と誘惑とに因りて殺されたり。萬有の實在の生命を生みし純潔なる女宰生神女よ、我を生かし給へ、我が敬虔にして爾純潔なる者を歌はん爲なり。

第六歌頌

イルモス、救世主よ、我罪の深處に圍まれ、世俗の淵に沈めらる。求む、イオナを猛獸

より救ひし如く、我をも諸慾より引き上げて救ひ給へ。

救世主よ、我昔のハナアンの婦の如く爾に呼ぶ、神の子よ、我を憐みて助け給へ、

第二調 火曜日の早課 三六一

第二調 火曜日の早課 三六二

我甚しく病みて、自ら感覺を回復する能はざる靈を有てばなり。

烈しき諸慾の暴風は我を擾す。イイススハリストスよ、昔海を禁めて、爾の聖なる門徒を救ひし如く、我をも、宥めて救ひ給へ。

### 致命者讃詞。

尊き受難者よ、無形の天軍は爾等が肉體に在りて顯しし忍耐を奇として、爾等に能力と苦勞の報とを賜ふ主を讃美せり。

### 致命者讃詞。

致命者よ、爾等は己の血の流に染められ、目を抉られ、甚しき沍寒に凍えさせられて後、温き生命に移りて、ハリストスを讃め歌ふ。

### 生神女讃詞。

讃美たる者よ、我等爾萬有の神及び養育者たるハリストスを生みし者を、我等が食ひて復飢えざる奥密の餅を載する案として知る。

### 又

イルモス、我罪の淵に溺れて、爾が憐の量り難き淵に呼ぶ、神よ、我を淪滅より引き上げ給へ。

言を傳へし聲よ、衆の聲を受けて、信を以て爾を歌ふ者に諸罪の赦を賜はんことを求め給へ。

福たる前驅よ、爾の祈禱を以て我が靈の痛傷を痊し、諸罪の重負を釋き、失望する我を救ひ給へ。

至榮なる前驅よ、爾の手を以て洗を授けしイイススに、我常に手を擧げて彼に向ふ者を罪の手より脱れしめんことを祈り給へ。

### 生神女讃詞

我怠惰の坐睡に侵さる、罪の寢は我が心を重くす。至淨なる者よ、爾の常に警醒する轉達にて我を起して救ひ給へ。

### 第七歌頌

イルモス、少者は爐の中にヘルワィムに效ひて、祝ひて呼べり、神よ、爾は崇め讃めらる、蓋眞實と義判とに縁りて、悉く之を我等の諸罪の爲に降せり。爾は萬世に歌はれ、讃め揚げらる。

ハリストスよ、我爾の法に背きて、無智なる諸慾に服し、不當の事を行ひて、我が無智に於て地上の衆人より虚しき者と爲れり。救世主よ、仁愛に由りて、我が凶ぶるを容す母れ。

主よ、我ダワイドの如く呼ぶ、視よ、我は不法に於て生まれ、淫婦の如く涙を流す、

我われ 悲かな しまする 僕ぼく の 如ごと く、 爾なんじ 獨どく 一いつ 仁じん 慈じ なる 神かみ を 悲かな しませたり。 救きゅう 世せい 主しゅ よ、 仁じん 愛あい に 由よ りて、 我わ が 込ほろ ぶる を 容ゆる す 母なか れ。

致命者讚詞。

受じゅ 難なん 者しゃ の 會かい は 言ことば を 以もつ て 萬ばん 物ぶつ を 造つく り し 神かみ を 切せつ に 愛あい する に 由よ りて、 諸しょ 難なん を 受う けて、 功こう 勞ろう を 顯あらわ せり。 故ゆえ に 生いのち 命めい を 施ほどこ す 手て より 致ちめい 命めい 者しゃ に 適かな ふ 榮えい 冠かん を 冠こうむ らせられ、 今いま 天てん 上じょう に 悦よろこ びて、 神しん 聖せい なる 嗣しぎょう 業ぎょう を 樂たの しみ。

致命者讚詞。

至し 榮えい なる 者もの は 目め を 抉く られ、 手て と 足あし と を 斷た たられ、 天てん に 登のぼ る 途みち に 遣つかわ されて、 恒つね に 此こ の 途みち を 遮さ ぎ 敵てき を 斃たお せり。 言ことば よ、 彼かれ 等ら の 祈きとう 禱と に 因よ りて、 爾なんじ を 讚さん 頌しょう する 衆しゅう を 救すく ひ 給たま へ。

生神女讚詞。

讚さん 美び たる マリヤよ、 爾なんじ が 智ち 慧えい に 超こ 越え る 産さん を ヘルワィムは 讚さん 榮えい し、 セラフィムは 歌かし 頌しょう し、 寶ほう 座ざ、 權けん 柄べい、 主しゅ 制せい は 常じょう に 讚さん 美び す、 爾なんじ 獨どく 身み にて 神かみ を 生う みたればなり。 潔い き 者きぎよ よ、 彼かれ に 我われ 等ら 衆しゅう 愛あい を 以もつ て 爾なんじ を 尊とうと む 者もの の 救すく はれん こと を 祈いの り 給たま へ。

又

イルモス、 不ふ 法ほう なる 虐しいたげ 者びと の 神かみ に 戻もと る 命めい 令れい は 高たか き 焔ほのお を 起おこ したれども、 讚ほめ む 歌うた は るる ハリストス は 敬けい 虔けん の 少しょう 者しゃ に 屬ぞく 神しん の 露つゆ を 降くだ し 給たま へり。

前ぜん 驅く よ、 爾なんじ の 傳つた へし 悔かい 改かい の 斧おの を 以もつ て 我われ が 心こころ の 諸しよ 慾よく の 棘いばら を 根ね より 絶た ちて、 之これ を 抜ぬ き、 神しん 聖せい なる 無な 慾よく と 凡およ そ 凡あ く 我われ を 遠とお ざく る 神かみ を 畏おそ る 畏おそれ と を 其その 内うち に 植う え 給たま へ。 光こう 榮えい なる 前ぜん 驅く よ、 爾なんじ は 水みづ の 上うへ に 己おのれ の 宮みや を 建た つる 主しゅ に イオルダン の 流ながれ の 中うち に 洗せん を 授さず けたり。 彼かれ に 常つね に 吾われ が 眼め に 神しん 聖せい なる 傷しょう 感かん の 水みづ を 賜たま はん こと を 祈いの り 給たま へ。 罪つみ を 任にな ぶ 神かみ の 羔こひつじ を 世つた に 傳つた へし 光こう 榮えい なる 前ぜん 驅く よ、 彼かれ に 祈いの りて、 我われ を 山やぎ 羊ぶん の 分ぶん に 與あ ざらざる 者もの と 爲な して、 右みぎ なる 綿ひつじ 羊あわ に 合あ せん こと を 求もと め 給たま へ。

生神女讚詞

童どう 貞てい 女じょ よ、 荒あ れたる 胎たい は 果み を 結むす びて、 爾なんじ 己おのれ の 胎たい 内ない に 身み を 取と り し 言ことば を 宿やど せる 者もの に 逢あ ひたるに、 其その 胎たい に 在あ りし 大おおい なる 前ぜん 驅く は 爾なんじ の 至し 聖せい なる 果み を 識し りて、 歡よろこ び 躍おど りて 之これ を 拜はい せり。

第八歌頌

イルモス、 昔むかし シナイ 山ざん に 於おい て 棘いばら の 中うち に モイセイ に 童どう 貞てい 女じょ の 奇き 跡せき を 預あ らかじ しめ 示しめ し 者もの を 尊とうと み 歌うた ひ、 崇あ げ 讚ほ めて、 萬ばん 世せい に 讚ほ め 揚あ げよ。

爾なんじ は 慈じ 憐れん に 由よ りて 我われ 等ら を 神しん 成せい せん 爲ため に 人じん 體たい を 取と り 給たま へり、 唯ただ 我われ 逸いつ 樂らく に 耽ふ りて、 聊い も 之さ にかんどう 感動せ ざりき。 衆しゅう 人じん の 救すく なる ハリストス よ、 爾なんじ の 仁じん 慈じ を 以もつ て 我われ を 反はん 正せい せ しめ 給たま へ。

善よ き 牧ぼく 者しゃ たる 言ことば よ、 罪ざい 惡あく の 山やま の 中なか に 迷ま ひし 我われ が 不ふ 當とう の 靈たましい を 返かえ して 救すく ひ 給たま へ、 詭き 譎げつ なる 敵てき が 終おわり に 至いた る まで 我われ を 嚙か ま ざらん 爲ため なり。

致命者讚詞

美善なる受難者は甚しく傷つけられて、互に呼べり、勇みて偕に立たん、視よ、ハリストスは萬世に凋まざる勝利の榮冠を與へ給ふ。

### 致命者讚詞

爾等は堅固なる忍耐を以て、強き索を以てするが如く、悪謀を抱きて爾等を誘はんと欲する蛇を絞め殺して、樂園の糧を嗣ぐ者と顯れたり。

### 生神女讚詞

生神童貞女よ、神は我等を神成せん爲に、爾の潔き血より身を取りて、人と爲り給へり。彼に爾を尊む者の爲に常に祈り給へ。

又

イルモス、昔ワロイロンの火の爐は神の命によりて其勢を分ち、ハルデイを焦して、信者を涼しくせり主の悉くの造物は主を崇め讃めよと歌へばなり。

手を伸べて、水を以て穢なき者を洗ひし前驅よ地に仆れたる我に手を授けて、我を肉慾の穢より出し、痛悔を以て我が全身を潔めて、我を救ひ給へ。

靈よ、痛悔の爲に時を有ちて、怠惰の最深き眠を拂ひ、速に醒めて、爾の主宰に呼べ、慈憐なる主よ、爾の授洗者の祈祷に由りて我を宥め給へ。

福たる前驅よ、慾の流、悪の水は我が靈にまで至れり。河の流を以て至りて安靜なる無慾の淵を洗ひし者よ、速に我を援け給へ。

禍なる哉多くの悪を行ひし我や、禍なる哉至仁なる神を怒らしし我や。ハリストスの授洗者よ、我を助けて、爾の轉達を以て我が罪過を釋き、我が債の赦を與へ給へ。

### 生神女讚詞

至上の神を身にて生みし純潔なる者よ、我を侵害する諸慾の汚穢より出し、至りて貧しくなりし我を神聖なる徳に富まし給へ、我が救はれて爾を歌頌せん爲なり。

### 第九歌頌

イルモス、童貞女が孕める者と現れて、産苦なく子を生みし事、地上の者の中誰か是くの如きを聞き、或は誰か何の時にか見たる。潔き童貞女よ、爾の奇跡は斯くの如し、我等爾を崇め讃む。

嗚呼爾の審判座は何ぞ畏るべき、ハリストスよ、我其前に審判せらるべきに、聊も畏るを感じずして、怠惰を以て吾が年を送る。獨一の造成主、罪を犯ししマナッシャを

第二調 火曜日の早課 三六七

第二調 火曜日の早課 三六八

反正せしめし者よ我を反正せしめ給へ。

ハリストスよ爾に呼ぶ、我が無量の悪の流を止めて、我が無知に因りて陥りし汚穢を洗はん爲に我に涙の流を與へ給へ。中心より痛悔せし淫婦を爾の慈憐を以て救ひし主よ、我を救ひ給へ。

### 致命者讚詞

聖受難者の光明なる記憶は日の如く我等に輝きて、地の四極を照し、神聖なる神を以て拜偶像の闇と靈を害する諸慾の味とを拂ふ。

致命者讃詞

尊貴なる隊、凱旋する軍、選抜の兵、聖致命者の會、福たる品位は無形軍の品位に合せられたり。ハリストスよ彼等の祈祷に由りて、我等衆を爾の國に與る者と爲し給へ。

生神女讃詞

童貞女マリヤよ、爾の腹より我等に輝きて、無神の夜を拂ひし主の光れる光線にて信を以て爾を尊む衆を照して、審判の時に永遠の幽闇より脱れしめ給へ。

又

イルモス、無原の父の子、神と主は、童貞女より人體を取り、我等に顯れて昧まされし者を明かし、散らされし者を集め給へり。故に我等讚美たる生神女を崇め歌ふ。獨罪なくして慈憐多き主よ、爾を人人の罪を任ふ神の羔として全世界に傳へし授洗者の祈祷に因りて、我を罪惡の汚穢より出し給へ。主の前驅よ、我は爾を芳しき花、薫る松、凋まざる百合、尊き香料として有ち、爾の帟幪の下に趨り附きて、爾の祈祷に因りて我が行爲の臭氣より脱さる。至りて福たる者よ、我を悪しき行の果を結ばずして、常に諸徳の善き果を結ぶ者、主の子、神の國に與る者、聖人の會の同住者と爲し給へ。主の前驅よ、我等爾を愛し、愛を以て爾を尊み、爾の神聖なる殿に集まりて祝讚する者に、天より諸難の解放、度生の悔改、諸罪の赦免を與へ給へ。

生神女讃詞

預言者よ、爾は萬物を其手に持ちて、神母の胎内に懐かるる主を拜せり。彼に我が卑微なる靈、毎日多くの罪に陥る者の救はれんことを神母と偕に祈り給へ。

次ぎて「常に福にして」、及び躬拜。小聯禱、光耀歌、及び常例の聖詠。

挿句に傷感の讃頌、第二調。

我衆人に超えて罪を犯せり、誰にか效ひて痛悔せん、若し税吏の如く歎息せば、

第二調 火曜日の早課 三六九

第二調 火曜日の早課 三七〇

恐らくは天を侵さん、若し淫婦の如く泣かば、涙にて地を汚さん。然れども神よ、我に諸罪の赦を與へて、我を憐み給へ。

句、主よ、夙に爾の憐を以て我等に飽かしめよ、然せば我等生涯歡び樂しまん。爾我等を撲ちし日、我等が禍に遭ひし年に代へて、我等を樂しましめ給へ。願はくは爾の工作は爾の諸僕に著れ、爾の光榮は其諸子に著れん。

童貞女より生れし主よ、我が不法を顧みずして、我が心を潔めて、之を爾の聖神の殿と爲し給へ。無量なる大仁慈を有つ主よ、我を爾の顔より退くる勿れ。

句、願はくは主吾が神の恵は我等に在らん、願はくは我が手の工作を我等に助け給へ、我が手の工作を助け給へ。

聖なる致命者はハリストスの十字架を勝たれぬ武器として執りて、惡魔の悉くの力を空しくし、天の榮冠を受けて、我等の垣牆と爲りて、我等の爲に祈り給ふ。

光榮、今も、生神女讃詞。

よろこぶ、生神女マリヤ、毀たれぬ殿、更に言へば聖なる殿や、預言者の呼ぶが如し、爾の聖なる殿は義に於て奇異なり。

次ぎて「至上者よ、主を讃榮し」。聖三祝文。「天に在す」の後に讃詞及び聯禱。次に第一時課、常例の聖詠、及び其他常例の如し、并に發放詞。



火曜日の眞福詞、第二調。

我等盜賊の聲を爾に奉りて呼ぶ、主よ、爾の國に於て我等を憶ひ給へ。

句、義の爲に窘逐せらるる者は福なり、天國は彼等の有なればなり。

我慾を以て盜賊及び淫婦に超えたり。救世主よ、我自ら定罪せられし者を宥め給へ。

句、人我の爲に爾等を語り、窘逐し、爾等の事を譎りて諸の悪しき言を言はん時は、爾等福なり。

慈憐の淵を水に沈めし前驅よ、爾の祈禱を以て我が諸慾を滅し給へ。

句、喜び樂しめよ、天には爾等の賞多ければなり。

ハリストスの受難者よ、爾等は己の血の流にて迷の流を涸らして、宜しきに合ひて讃榮せらる。

光榮

録されし如く、人の智慧は辯才を盡して、宜しきに合ひて神性の三位なる一元を歌ふ能はず。

今も

無原なる神を焚かれずして生みし者を我等皆讃歌を以て絶えず歌頌せん。



第二調 火曜日の眞福詞 三七一

第二調 火曜日の晩課 三七二

火曜日の晩課

「主よ、爾に籲ぶ」に十字架の讃頌、第二調。

句、主よ、若し爾不法を糾さば主よ、孰か能く立たん、然れども爾に赦あり、人の爾の前に敬まん爲なり。

言よ、爾十字架に在りて暮れしに、光體は光るに忍ばずして晦み、地は震ひ、磐は崩れ、殿の飾は中より裂け、墓は啓け、死者は興き、地獄は下に在る衆を出し、悪魔は勝たれ、死は衆人の爲に寝と爲れり。

句、我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を恃む。

ハリストスよ、睿智なる盜賊は爾が實繁き葡萄たるを見て、最巧なる盜賊と爲りて、甚少き言を以て先に行ひし諸罪の赦を盗む。我等皆務めて彼に效ひて呼ばん、人

を愛する主よ、我等をも憶ひ給へ。

句、我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

ハリストスよ、爾の十字架は、星の天に於けるが如く、實に神聖なる教會の中に光りて、悪鬼を焼き、信者を照し、爾を釘せし者の面を辱かしむ。昔爾は十字架を前兆する木を以て先祖を奴隷より引き出し、野に於て石より蜜を吸ふを致せり。

次ぎて月課經の讚頌。若し月課經なくば、至聖生神女の讚頌。同調。

句、願はくはイズライリは主を待まん、蓋 憐は主にあり、大なる贖も彼にあり彼はイズライリを其 悉くの不法より贖はん。

女宰よ、慈憐によりて爾の内に我が合成を衣て、我等の爲に十字架と死とを受けたる主は爾を衆人の轉達者、衆信者の大なる避所、衆の保護者と顯し給へり。故に神の聘女よ、常に彼に祈りて、我等衆に諸罪の潔を降さんことを求め給へ。

句、萬民よ主を讃め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讃めよ。

昔童貞女及び牝羊は其胎より生れし羔が定罪せられて、二の犯罪者と共に木に懸れるを見て、呼びて曰へり、我が子及び神よ、見る所の畏るべき奥密は奇異なり、然れども爾の智慧の淵は誰も測る能はず、我爾の恒忍を歌ふ。

句、蓋彼が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。

爾の姿容の美しきは何處にかある、子よ爾の華美の榮は何處にか隠れたる、言ひ難き華美を造りし神、人の子より美しき吾が子よ、如何ぞ卑しめられ、辱かしめられて、善き姿容もなく、華榮もなく、衆人の爲に木の上に懸りたると、至善なる童貞女は歎息涕泣して呼べり。

第二調 火曜日の晩課 三七三

第二調 火曜日の晩課 三七四

### 光榮、今も、十字架生神女讚詞。

光體の光は十字架に露れたる靈智の光に勝たれて隠れたり、常に小き者は大なる者に勝たれ、善き者は更に善き者に位を譲る、ハリストスの光るに、如何ぞ物質の光は隠るるに宜しからざらんと、至淨なる者は爾光の光を觀て、聞くに勝ふる者に謂へり。

次ぎて「穩なる光」。提綱、主よ、願はくは爾の仁慈と慈憐とは、我が生命ある日我に伴はん。及び「主よ、我等を守り、罪なくして此の晩」。其他。

### 挿句に十字架の讚頌、第二調。

ペトルを海に救ひしハリストス救世主よ、十字架の力を以て我を救へ、神よ、我を憐み給へ。

句、天に居る者よ、我目を舉げて爾を望む。視よ、僕の目主人の手を望み、婢の目主婦の手を望むが如く、我等の目は主我が神を望みて、其我等を憐むを俟つ。

常に爾の諸恩を樂しむ者は十字架に釘せらるべしと呼べり、義人等を殺す者は恩主に代へて犯罪者を赦さんことを乞へり。爾は、ハリストスよ、苦を受けて我等を救は

んと欲して、黙して彼等の残忍を忍び給へり、人を愛する主なればなり。  
句、主よ、我等を憐み、我等を憐み給へ、蓋我等は侮に鑿き足れり、我等の靈は驕  
る者の辱と誇る者の侮とに鑿き足れり。

### 致命者讃詞

致命者の會は窘逐者に敵して曰へり、我等は萬軍の王の兵士なり、爾等火及び種種の  
苦に我等を付すとも、聖三者の力を諱まざらん。

### 光榮、今も、十字架生神女讃詞。

至淨なる者よ、爾の子及び神が釘せられし時、爾は多くの苦痛を忍び、歎息涕泣し  
て呼べり、嗚呼甘愛なる子よ、如何ぞアダム以來の地上の者を救はんと欲して、非義  
に苦を受くると。至淨なる童貞女よ、我等信を以て爾に祈る、彼を我等の爲に慈憐  
なる者と爲し給へ。

次ぎて「主宰よ、今爾の言に循ひて」。聖三祝文。「天に在す」の後に讃詞。聯禱及  
び發放詞。

~~~~~

第二調 火曜日の晩課 三七五

第二調 火曜日の晩堂課 三七六

火曜日の晩堂課

至聖なる生神女の規程、第二調。

第一歌頌

イルモス、人人よ、來りて、海を分ちて、エジプトの奴隸より引き出しし民を過らせ
しハリストス神に歌を歌はん、彼光榮を顯したればなり。

純潔なる者よ、我には爾を讃頌する爲に一も言なし、我が罪の幽闇が我を蔭へばな
り。唯祈る、嗚呼神の母よ、悶ゆる我を納れ給へ。

至淨なる者よ、我無量の罪より爾の庇覆の下に趨り附く。潔き者よ、神及び主宰を
寛容の者と爲して、我を救ひ給へ。 光榮

女宰よ、爾は我の爲に熱切なる潔淨なり。爾に趨り附きて、我助けられて靈の救
を得ん、爾は萬有の神の母として、能はざることなければなり。

今も

靈の誘惑者は我を滅亡の坎に誘へり。生神童貞女よ、爾の權能の手を我に伸べて、
速に光に上せ給へ。

第三歌頌

イルモス、木を以て罪を殺しし主よ、我等を爾の中に堅めて、爾を畏るる畏を我等、
爾を歌ふ者の心に植え給へ。

我不當の者は多くの盜賊に遇ひ、衣を剥がれ、傷つけられて遺されたり。潔き生神女

よ、爾我を遣つる勿れ。

蛇は嘗て木に縁りてアダムを誘ひて裸體にせり、今は彼輒く我が靈を虜にせり。

女宰よ、爾に祈る、我を宥め給へ。 **光榮**

我今爾我が眞の轉達者及び庇覆たる者に我が密事を告ぐ、爾の子が其義なる審判の時我に之を責めざらん爲なり。

今も

潔き者よ、我等を憐み、我等を憐み給へ、蓋行に由りては敢て我等に救なし。故に熱切なる信を以て爾に呼ぶ、爾の諸僕を憐み給へ。

第四歌頌

イルモス、主よ、我爾を歌ふ、蓋風聲を聞きて懼れたり、爾は我迷へる者を尋ねて、我にまで至ればなり。故に慈憐深き主よ、我に於ける爾の大なる寛容を讚榮す。

女宰よ、我醫されずして病める者、我貧しくなりたる者を遣つる母れ。童貞女よ、爾の慈憐の油を我に注げ、爾の慮を以て神よりする不朽の黄金にて我を富まし給

第二調 火曜日の晩堂課 三七七

第二調 火曜日の晩堂課 三七八

へ。我凡の善を剥がれて諸悪の中に臥す、我之を昔陥りし者より多く衣たり。神の聘女よ、今彼の者を以て我を飾り、此の者より脱れしめ給へ。

光榮

我言に於て旨に於て常に淫を以て淫婦に超え、貪を以て税吏に超えたり。女宰よ、我に終の至らざる先に痛悔を以て二の者を潔むるを得しめ給へ。

今も

神の母よ、我爾より遠ざかりて、哀しき野に居るなり、誰か我に翼を予へん、我飛びて、爾我が特頼、不當なる我を煩悶より救ふ者に至らん。

第五歌頌

イルモス、光を賜ひ、世を造りし主よ、爾の誠の光の中に我等を導き給へ、我等爾の外に他の神を識らざればなり。

潔き女宰よ、爾の腹より地に居る者に輝きし暮れざる光を以て、我が晦みたる靈を照して、我が心より凡の暗を拂ひ給へ。

女宰よ、我が不當なる悪しき行の甚しき夜は我を蔽ふ。讚美たる者よ、我爾に呼ぶ、爾の子及び主宰の神聖なる光に我を導き給へ。

光榮

潔き者よ、爾の子萬有の造成主が放蕩の子を受けし如く、我をも受け給へ。我蕩子と偕に呼ぶ、我實に罪を犯せり、女宰よ、我を救ひ給へ。

今も

十字架に於て身に傷つけられし主を言ひ難く生みし至淨の者よ、爾慈憐なるに因り

て、凶悪者の攻撃にて傷つけられたる我が心を癒し給へ。

第六歌頌

イルモス、我罪の淵に溺れて、爾が憐の量り難き淵に呼ぶ、神よ、我を淪滅より引き上げ給へ。

我罪の坎に陥りて、目を舉げて義なる神に向ふを畏る。神の聘女よ、我爾を吾が恃頼と爲す。

吾が心は甚しく無量の罪過の浪に打たる。生神童貞女よ、爾の有能の祈祷を以て之を穩静なる港に導き給へ。

光榮

女宰我が恃頼なる者よ、我が身より離れん時我に爾の光榮の華美を觀るを得しめ給へ、我が之に因りて罪過の赦さるるを知らん爲なり。

今も

第二調 火曜日の晩堂課 三七九

第二調 火曜日の晩堂課 三八〇

聖なる女宰よ爾の諸僕、信を以て爾に趨り附く者を、神に奉る爾の祈祷を以て、諸の誘惑と苗害と憂患より脱れしめ給へ。

次ぎて主憐めよ、三次。光榮、今も。

坐誦讚詞、第二調。

生神女よ、我等爾を崇め讃めて呼ぶ、杖よ、慶べ、是より種なく生ぜし神は木の上に死を滅し給へり。

第七歌頌

イルモス、黄金の偶像がデイルの野に奉事せられし時、爾の三人の少者は神に逆ふ命を顧みずして、火の中に投げられ、涼しくせられて歌へり、我が先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

敵は今口を開きて我を其腹に受けんと欲す、蓋諸方より誘を進め、網を張りて、悉く吾が途を遮る。童貞女母よ、急ぎて我を其悪謀より援け給へ。

敵は我が感覺を汚し、智慧を擾して、我を失望の坎に落さんと務む。故に我獨爾に呼ぶ、我が避所なる神の聘女よ、我を此の凶悪者の手より脱れしめ給へ。

光榮

昔三人の少者を燃ゆる爐より救ひし我がハリストスよ、爾親ら言よ、婚姻に與からざる爾の母の祈祷に因りて、我をも吾が無量の悪を以て盛に燃しし焰より救ひて涼しくし給へ。

今も

敗壞者は吾が心の肉慾に傾くを見て之を殺せり。婚姻に與からざる母よ、爾の神聖なる力を以て之を生かして、我に敵に勝つを得しめ給へ、我が信を以て爾に、身にて神を生みし童貞女よ、爾は崇め讃めらると、呼ばん爲なり。

第八歌頌

イルモス、火の爐の中にエウレイの少者に降りて、焰を露に變ぜし神を、造物は主として歌ひて、萬世に崇め讃めよ。

われ おお あく た がた おもに よ かが あえ わ め てん あ え ただ
我多くの悪の勝へ難き重負に因りて屈められて、敢て吾が目天に擧ぐるを得ず、唯
なんじ よ ゆい いち しょうしんじよ われ おちい もの あわれ たま
爾に呼ぶ、惟一の生神女よ、我陥りし者を憐み給へ。
い きぎよ もの われ なんじ こ およ かみ いかり おか われ すく たま しじょう もの かれ しんもん
潔き者よ、我爾の子及び神の怒を干せり、我を救ひ給へ。至淨なる者よ、彼が審問
せんとき わ たすけ な われ ひだり やぎ ぶん のが たま
せん時、我が援助と爲りて、我を左の山羊の分より脱れしめ給へ。

光榮

かみ よめ しょうじよ われ むりよう あく よ たましい ころ もの おこ たま なんじ きとう もつ
神の聘女・少女よ、我無量の悪に因りて靈の殺されし者を起し給へ。爾の祈祷を以て
われ たましい がい てき およ せつが いしゃ およそ いざない たす たま
て我を靈を害する敵及び殺害者の凡の誘惑より援け給へ。 **今も**

第二調 火曜日の晩堂課 三八一

第二調 火曜日の晩堂課 三八二

あく あらた たましい なん はじめ うらわ まった うしな なん なんじ ぞうせいしゅ お
悪の改められぬ靈よ、何ぞ始の美しきを全く失ひたる、何ぞ爾の造成主に於ける
けいやく ことごと す かれ てき な と きた けいけん しょうしんじよ ほし つ
契約を悉く棄てて、彼の敵と爲りたる。疾く來りて、敬虔にして生神女に趨り附け。

第九歌頌

しよく よ はなはだ きゆうかい おちい い がた ちえ もつ あらた ため
イルモス、食に縁りて甚しく朽壞に陥りしアダムを、言ひ難き智慧を以て改めん爲
かみ きた かみ ことば われら ため はか せい どうていじよ み と しゅ われら
に神より來りし神言、我等の爲に測り難く聖なる童貞女より身を取りし主を、我等
しんじや どうしん うた もつ あが ほ
信者は同心に歌を以て崇め讃む。

われ ふとう おこない もつ かんかく けが はじ こと み しじょう もの われ
我不當の行を以て感覺を汚して、耻づべき事に満てられたり。至淨なる者よ、我に
しょうかん おこ きよ たま わ つね なんじ あが ほ ため
傷感を起さしめて、我を潔め給へ、我が常に爾を崇め讃めん爲なり。

しょうしんじよ かくじん みつじ あきらか あらわ とき なんじ われ ぎ な たま なんじまこと ちから たも
生神女よ、各人の密事の明に顯れん時、爾我を義と爲し給へ、爾誠に力を有てば
なんじ きとう もつ われ くらやみ のが い がた よろこび ひかり ところ い たま
なり。爾の祈祷を以て我を黒暗より脱れしめて、言ひ難き喜悅のある光の處に容れ給
へ。

光榮

ことば なんじ いの おわり いた さき われ ねつせつ つうかい かんどう ていきゆう また けつじょう けんぞん
言よ爾に祈る、終の至らざる先に我に熱切なる痛悔と感動と涕泣と、又潔淨と謙遜
しんせい あい たま なんじ ぼくぐん あわ たま なんじ う もの きとう よ
と神聖なる愛とを賜ひて、爾の牧群に合せ給へ、爾を生みし者の祈祷に由りてなり。

今も

こうえい とうとつし もつ かみ ほか ゆうけい むけい もの こ どうていじよ われ ざいか もつ ちじょう つみ
光榮と尊敬とを以て神の外に有形無形の者に超ゆる童貞女よ、我罪過を以て地上に罪
おか きゆうしん ひとびと こ もの いと なんじ きとう もつ われ すく たま
を犯しし舊新の人人に超ゆる者を厭はずして、爾の祈祷を以て我を救ひ給へ。

次ぎて「常に福にして」、及び躬拜。聖三祝文、「天に在す」の後に讃詞。其他常例の如し、及び發放詞。



水曜日の早課

第一の誦文の後に十字架の坐誦讃詞、第二調。

かみ なんじ すくい ち うち な じゅうじか なんじ しじょう て の ばんみん
ハリストス神よ、爾は救を地の中に作し、十字架に爾の至淨なる手を伸べて、萬民
あつ よ しゅ しょうしん せい
を集めて呼ばしむ、主よ、光榮は爾に歸す。

しゅ わ かみ あが ほ その あしだい ふ おが これ せい
句、主我が神を崇め讃め、其足凳に伏し拜めよ、是れ聖なり。

しゅ てき き しょう しよく もつ とりこ ごと か なんじ みずか じゅうじか き
主よ、敵が木の生ずる食を以てアダムを虜にせし如く、斯く爾は親ら十字架の木

と爾の苦とを以て敵を虜にせり、第二のアダムとして爾は殊に迷ひし者を尋ね、死せし者を生かさん爲に來りたればなり。神よ、光榮は爾に歸す。

光榮、今も、生神女讃詞。

第二調 水曜日の早課 三八三

生神女よ、我等爾を崇め讃めて呼ぶ、杖よ、慶べ、是より種なく生ぜし神は木の上
に死を滅し給へり。

第二の誦文の後に坐誦讃詞、第二調。

主よ、爾が我等不當の者に爾の仁慈に因りて賜ひし生命を施す十字架を我等祈祷の
中に爾に捧ぐ。獨人を愛する主よ、生神女に因りて、皇帝と爾の城邑とを救ひて、平安
を與へ給へ。

句、神我が古世よりの王は救を地の中に作せり。

十字架を以て地上の者を照し、罪ある者を痛悔に召し給ひし善き牧者よ、我を爾の群
より遠ざくる勿れ。獨仁慈にして人を愛する主宰よ、我迷ひし者を尋ねて、爾の聖
なる群に合せ給へ。

句、神よ、爾は爾の聖所に於て嚴なり。

致命者讃詞

ハリストス神よ、爾は至善なる主として、爾の聖者を黄金よりも耀く者と爲し、爾
の克肖者の榮を顯せり。仁慈なる主として、彼等の祈祷を納れて、我等の生命を平安
ならしめ給へ。獨聖者の中に休ふ主よ、我等の禱を香爐の香の如く升らしめ給へ。

光榮、今も、十字架生神女讃詞。

ハリストスよ、童貞女爾の母は爾十字架に懸けられて死せし者を觀て、痛く泣きて曰
へり、吾が子よ、此の恐るべき秘密は何ぞや、衆に永遠の生命を賜ふ者は如何ぞ甘
じて十字架に耻づべき死を以て死する。

第三の誦文の後に坐誦讃詞、第二調。

生命を賜ふイイス、獨罪なき者よ、爾は多くの慈憐に由りて、我等の爲に十字架
に釘せられて、死者と爲ることを忍び給へり、爾の手の造物を死の定罪より救はん爲
なり、爾は仁慈なる神にして人を愛する主なればなり。

甘じて我等の爲に苦を受けし主よ、我盜賊の如く承け認めて、爾至善の者に呼ぶ、主
よ、爾の國に於て我を憶ひて、彼と偕に我を算へ給へ。

光榮、今も、十字架生神女讃詞。

潔き女宰生神女よ、我等皆爾の子の尊き十字架に護られて、輒く敵の凡の攻撃に勝
つ。故に爾を神の母、獨我が靈の特頼なる者として宜しきに合ひて崇め讃む。

尊貴にして生命を施す十字架の規程、其冠詞は、十字架の樹つは悪鬼の倒なり。イオ
シフの作。第二調。

第二調 水曜日の早課 三八五

第一歌頌

イルモス、全く備はれる力は昔ファラオンの全軍を深水に敷き、人體を取りし言、讚榮せらるる主は萬の悪を致す罪を滅し給へり、彼嚴に光榮を顯したればなり。昔初めて造られし人は始の誠に背きて、木に縁りて死を受けたり。木に上げられし不死の主は死を嘗めて、衆人に不死を賜へり。十字架が地に立てられしに、敵に因る迷は解けて、全く空しくせられたり、前に退けられし人は復樂園に入る。光榮は爾斯く爲すことを嘉せし我等の唯一の神に歸す。

致命者讚詞

讚美たる致命者よ、爾等皆牡羊の如く、有智なる羔の如く屠られ、無慙に寸斷せられて、屠られし主に祭祀として獻ぜられたり。故に今は聖なる冢子の教會の中に輝く。

致命者讚詞

睿智なる受難者よ、爾等は劍にて斬られ、火と水とに投げられしに、常に堅く信に立ちて、詭譎なる敵を斃せり。故に福たる終を獲たり。

生神女讚詞

至淨なる女宰よ、預言者の聖にせられし會は爾を過られぬ門、選ばれたる地、斫られぬ山と名づけたり。蓋爾は萬有の主宰、甘じて十字架の死を受けし者を生み給へり。

又至聖なる生神女の規程、第二調。

イルモス、人人よ、來りて、海を分ちて、エジプトの奴隸より引き出しし民を過らせしハリストス神に歌を歌はん、彼光榮を顯したればなり。

信者皆來りて、同心に生神女を歌はん。蓋彼は人の智慧に超えてハリストスを生みて、絶えず我等衆の救はれんことを祈る。

神の母よ、父の實在の像は爾より我が合成を受けて、朽ちたる像を新にして、之を榮せり。

爾はヘルウィムより最尊く、諸天より最高くなれり、蓋無懲にして智慧に超えて神を爾の胎内に宿し給へり。

爾は我が諸罪の贖たる恩主を生みて、死せし原祖アダムを生かし、人性を天に升せ給へり。

第三歌頌

イルモス、主よ、荒地の如く實を結ばざる異邦の教會は、爾の來るに因りて、百合の如く華さけり、我が心は此に縁りて固められたり。

主よ、爾は十字架に釘せられて萬物を震はせ、信者を堅めて、彼等に爾の力と、爾の言ひ難き寛容とを歌はしめ給ふ。

主宰よ、爾は十字架を以て樂園を開きて、其内に爾の國と爾の神聖なる慈憐の富とを悟りし盜賊を入れ給へり。 **致命者讃詞**

致命者は芳しき花の如く、靈智なる谷の中に發きて、惡臭の迷を拂ひ、信者の心を薰らせたり。 **致命者讃詞**

世界の燈、信者の聖なる扶助者よ、聖神の輝ける光線を以て宜しきに合ひて爾等を讚美する衆を照し給へ。 **生神女讃詞**

純潔なる者は萬有の主宰が木に上げられ、萬衆に生命を賜ふ者の甘じて死するを見て、心痛く苦しめり。

又

イルモス、木を以て罪を殺しし主よ、我等を爾の中に堅めて、爾を畏るる畏を我等、爾を歌ふ者の心に植え給へ。

童貞女よ、我等爾を實に黄金の香爐、「マンナ」の壺、神の山、神聖なる美しき宮と稱ふ。

言の殿及び聖にせられし居處たる至淨なる生神女・永貞童女よ、我が爲に諸罪の潔淨と爲り給へ。

生神女よ、地に生るる者の舌も、無形の者の智慧も爾の産を述ぶる能はず、爾は天性及び智慧に超えて造成主を生みたればなり。

生神童貞女よ、信を以て爾に趨り附きて、爾を神の母と傳ふる者の爲に保固と避所及び庇覆と爲り給へ。

第四歌頌

イルモス、童貞女に藉りて來りし者は使者に非ず、天使に非ず、主親ら人體を取りて、我全き人を救ひ給へり。故に我爾に呼ぶ、主よ、光榮は爾の力に歸す。

唯一の主よ、爾は木に上げられて、殘忍なる世君の權を空しくし、詛を滅せり。故に我等爾に救はれたる者は爾を讚榮す。

全能の主よ、日は爾が木に懸けられしを見て光を隠し、山と磐とは崩れ、殿の幔は裂けたり。 **致命者讃詞**

主の致命者よ、爾等は殺されて敵を殺し、鐵にて爬かれ、死に屬する麤き皮を剥がれて、光榮を衣せられたり。 **致命者讃詞**

致命者よ、爾等は首を斬られ、凶惡なる能力の首を斬りて、永在の光榮を繼ぎて喜ぶ。 **生神女讃詞**

第二調 水曜日の早課 三八九

第二調 水曜日の早課 三九〇

婚姻に與らざる少女よ、父の光なるハリストスは爾の胎より輝き出でて、十字架に釘せられて世界を照し、惡鬼の黑暗を散じ給へり。

又 イルモス同上

女宰よ傷感の一滴を我に滴らせて、吾が心の熱を去らしめ、我が思の濁れる流を止

め給へ。

至淨なる者よ我逸樂の武器に傷つけられ、病みて臥す者を棄つる母れ。十字架に釘せられし爾の子我が神の戈と血とを以て我を痊し給へ。

女宰たるを以て萬物を富ましし純潔なる者よ、我甚貧しくなりたる者に神聖なる恩寵を豊に垂れ給へ、我が爾至善なる轉達者を崇め讃めん爲なり。

童貞女よ、痛悔を以て我を涼しくし、諸慾の熱に因りて涸れたる吾が心を濕し、爾の慈憐の油と醫治とを我に灌ぎ給へ。

第五歌頌

イルモス、ハリストス神よ、爾は神と人との中保者と爲れり、主宰よ、我等は爾に依りて、無智の闇より光の原なる爾の父に就くを得たればなり。

ハリストスよ、爾は十字架に釘せられて、地の基を動かし、戈にて刺されて、悪の魁たる蛇を殺し、救の流を衆に注ぎ給へり。

言よ、爾の手に造られし者の迷へるを見るに勝へずして、爾は手を木の上に伸べて殺されて、昔木に縁りて死せし者を生かし給へり。

致命者讃詞

ハリストスの友、人人の熱心なる保護者、美しき花、聖神の最尊き器たる睿智なる受難者は宜しきに合ひて讚美せらる。

致命者讃詞

惟一なる立法者よ、爾の聖なる受難者の會は法の爲に苦を受けて、不法の者を辱しめ、爾の力に因りて馳すべき程を盡して、致命者に宜しきが如く榮冠を冠りたり。

生神女讃詞

潔き者よ、爾は産の後に不朽の者と顯れたり、神が爾より身を取りて生れたればなり。爾は其十字架に釘せらるるを見て、忍びずして、痛く苦しみて呼べり。

又

イルモス、光を賜ひ、世を造りし主よ、爾の誠の光の中に我等を導き給へ、我等爾の外に他の神を識らざればなり。

神の母よ、我等信者は爾より種なく身を取りて生れし子の眞の神及び實性の人なる

第二調 水曜日の早課 三九一

第二調 水曜日の早課 三九二

を知れり。故に爾を讚榮す。

至淨なる童貞女よ、我等信者は信を以て常に爾の庇覆及び保護の下に趨り附きて、爾に依りて凡の敵の侵害より救はる。

至淨なる童貞女よ、我等を誘惑と擾れたる意思、凡の怒と凡の罪、饑饉と疫病、及び永遠の苦より脱れしめ給へ。

我等の轉達者と拯救と恃頼なる「ハリストティアニン」等の女宰、讚美たる童貞女よ、愛を以て常に忠信に爾を歌頌する者を救ひ給へ。

第六歌頌

イルモス、イオナは鯨の中より主に籲べり、祈る、我を地獄の深處より引き上げ給へ、我が讚美の聲と眞實の神とを以て爾救主に祭を獻げん爲なり。

言よ、昔イアコフは手を少者の首に按せて、十字架を預徴せり。ハリストスよ、爾は其上に手を伸べて、人類を詭譎なる敵の手より救ひ給へり。

萬有の王ハリストスよ、爾甘じて釘せられしに、王たる罪は滅され、昔樂園より逐ひ出されしアダムは復其中に入れられて、爾を讚め歌ふ。

致命者讚詞

創痍にて飾られ、天の華美に妝はれたる實に主の至愛にして神聖なる致命者を、我等中心より讚め歌はん。致命者讚詞

神聖なる致命者は其燈を滅されずして守り、己の血を以て盛に之を燃して、神聖なる殿に入るを得て喜ぶ。生神女讚詞

讚美たる童貞女よ、我等爾讚め歌はるる神を生みし者を歌ふ。彼は木に縁りて仇敵を滅し、彼の苦を歌頌する者を朽壞より救ひ給へり。

又

イルモス、我罪の淵に溺れて、爾が憐の量り難き淵に呼ぶ、神よ、我を淪滅より引き上げ給へ。

己の旨を以て萬物を造りし主は其旨を以て婚姻に與らざる者の胎内に入りて、朽壞を以て病める者を、慈憐なるに因りて、不朽にて富まし給へり。

純潔なる者よ爾は天上の軍より上にして聖なり、容れられぬ言を性に超えて爾の胎内に容れたればなり。

女宰よ、我生命の道に迷ひて、屢罪の無道に入る者を、痛悔の道に向はしめ給へ。潔き女宰よ、我等爾に恃頼を負はせし爾の諸僕の祈祷を棄つる勿れ、爾は靈の爲

に避所及び潔淨なればなり。

第二調 水曜日の早課 三九三

第二調 水曜日の早課 三九四

第七歌頌

イルモス、不法なる虐者の神に戻る命令は高き焰を起したれども讚め歌はるるハリストスは敬虔の少者に屬神の露を降し給へり。

慈憐なる主よ、爾十字架に上げられて、戈を以て刺されしに、昔の自ら旋る劍は我の前より退く。故に我爾の尊き苦に由りて苦なきを得て、爾を崇め讚む。

モイセイに因りて木に上げらるる蛇は、詭譎なる蛇を殺して、犯罪に因りて殺されたる我等衆を生かししハリストスの上げらるるを預象せり。

致命者讚詞

聖なる者よ、爾等は無原の父の同無原の子の至淨なる苦に效ひて、彼と最親しくなるを以て神の子と爲れり。故に彼は爾等を兄弟及び其國の嗣と稱ふ。

致命者讃詞

捧神なる致命者よ、爾等は主宰の如く十字架に上げられ、戈にて刺され、劍にて斬られ、火と水とに投げられ、刃輪にて寸断せられて喜べり。

生神女讃詞

潔き者よ、爾は耕作せずして生育せし實りたる葡萄が木に懸けられしを見て呼べり、吾が甘愛なる子よ、諸慾の酔を醒ますべき美酒を滴らし給へ。

又 イルモス同上

我が力と歌と救、堅固なる保護と破られぬ墻たる女宰よ、我と戦ふ悪鬼、常に我を殺さんと謀る者を破り給へ。二次。

童貞女よ、爾は童貞の血より身を取りて人類を神成せし神を生み給へり。故に爾の祈祷を以て我諸慾に汚され、敵の悪謀に因りて朽壊せし者を救ひ給へ。

純潔なる者よ、爐は爾の産を預象せり、蓋少者を焚かざりき、止められぬ火の爾の胎に於けるが如し。故に我等爾に祈る、爾の諸僕を永遠の火より脱れしめ給へ。

第八歌頌

イルモス、昔ワフィロンの火の爐は神の命によりて其勢を分ち、ハルデイを焦して、信者を涼しくせり、主の悉くの造物は主を崇め讃めよと歌へばなり。

恒忍なる主よ、爾の不朽の脅より滴りし血に因りて造物は聖にせられ、多神の川は涸らされ、迷の早を退くる敬信の雨雲は現れたり。

言よ、日は爾が十字架に釘せらるるに耻ぢて、其光線を隠し、磐は裂け、地獄は下に畏れ、義者の靈は楽しみて全き救を待てり。

第二調 水曜日の早課 三九五
第二調 水曜日の早課 三九六

致命者讃詞

受難者の不朽體の遺片は信者に醫療を流し、常に醫し難き病の苦惱を醫す。故に我等感謝して呼ぶ、主よ、爾は爾の聖なる致命者の中に嚴なり。

致命者讃詞

受難者よ、爾等は猛獸の口と鼎鑊の熱湯、烈しき沍寒と甚しき暑熱、身の裂かるることと牢獄に閉さること、及び苦惱の死を堅固に忍びたり、故にハリストスと偕に榮せらる。

生神女讃詞

神の恩寵を蒙れる女宰よ爾の子は甘じて爾の腹より身を取り、見られぬ者にして見ゆる者と爲りて、釘殺を受け、詛と名づけられて、衆人を詛より脱れしめ給ふ。

又

イルモス、昔火焰の中にエウレイの少者に露を注ぎ、奇異にしてハルデヤ人を其中に蒸し主を歌ひて云はん、彼を崇め讃めて、世世に讃め揚げよ。

我等地に生るる者の生命及び救贖たる神の羔を生みし無玷なる牝羊よ、我を棄つる勿れ。蓋我呼ぶ、主の悉くの造物は主を崇め讃めよ。

至しじょう淨ものなる者なんじよ、爾しんせいの神聖さんなる産われらは我等あらたを新しゅうにして、衆ひかりを光この子な晝ゆえの子と爲なせり。故ゆえに我等われら救すくはれて呼よぶ、主しゅの悉ことごとくの造物ぞうぶつは主しゅを崇あがめ讃ほめよ。
潔いさぎよき者ものよ、爾なんじは童貞どうていの胎たいより活いける水みずを生うみて、醫治いやしの泉いずみより信者しんじやに赦罪しやざいを流ながし給たまへり。故ゆえに我等われら皆呼みなよぶ、主しゅの悉ことごとくの造物ぞうぶつは主しゅを崇あがめ讃ほめよ。
潔いさぎよき者ものよ、爾なんじは生命いのちの實みのりたる葡萄ぶどうを生ふどう育せいせり、蓋けだし爾なんじは諸福しよふくを以もつて地ちを樂たのしましむる葡萄ぶどうの樹きなり。我等われら之これを歌うたひて呼よぶ、主しゅの悉ことごとくの造物ぞうぶつは主しゅを崇あがめ讃ほめよ。

第九歌頌

イルモス、無原むげんの父ちちの子こ、神かみと主しゅは、童貞女どうていじよより人體じんたいを取り、我等とに現われられて、味あまされし者ものを明あかし、散さんらされし者ものを集あつめ給たまへり。故ゆえに我等われら讚美さんびたる生神女しよしんじよを崇あがめ歌うたふ。量はかり難がたき言ことばよ、爾なんじの傷きずに因よりて我わが朽壞きゆうかいと困苦こんくとて痊いやし給たまへ。主しゅ我わが救すくの神かみよ、爾なんじの苦くるしみに因よりて、惡慾あくよくの中に埋うちれたる爾うもの像なんじを潔ぞうめ給きよめ給たまへ。
主宰しゅさいよ、爾なんじ聖せい三者せいさんの一いつ、二性にせいにして一位いちいなる者ものは、仁慈じんじに因よりて人類じんるいを救すくはん爲ために松まつ・杉すぎ・黄楊つげに上あげらるる者ものと見あらわれたり。

致命者讃詞

致命者ちめいしやよ、爾等なんじらは十字架じゆうじかに盾たての如ごとく掩おおはれて、惡あくの魁かしらの悉ことごとくの箭やに惱なやまされぬ者もの
第二調 水曜日すいようびの早課そうか 三九七
第二調 水曜日すいようびの早課そうか 三九八
と顯あらわれたり。故ゆえに今彼いまかれを踐ふみて、恒つねに憎にくむべき鳥とりとなして晒わらふ。

致命者讃詞

受難者じゆなんしや致命者ちめいしや教會きやうかいの動うごかされぬ柱はしらよ、地ちは口くちを開ひらきて爾等なんじらの血ちを受け、天てんは爾等なんじらの神聖しんせいなる神しんを受けたり。今爾等いまなんじらは火ひの如ごとき品位ひんいと偕ともに神かみの寶座ほうざの前まえに立たち給たまふ。

生神女讃詞

童貞女どうていじよよ、爾なんじは性せいに超こえて生うみ、童貞女どうていじよに止とどまりて、原祖げんその朽壞きゆうかいしたる性せいを新あらたにせり、萬有ばんゆうの性せいを造つくりし主しゅを生うみたればなり。至淨しじょうなる母ははよ爾なんじ昔彼むかしかれが十字架じゆうじかに懸かかけられしを見みて顛よべり。

又

イルモス、食しょくに縁よりて甚はなはだしく朽壞きゆうかいに陥おちりしアダムいを、言いひ難がたき智慧ちえを以もつて改あらためん爲ために神かみより來きたりし神言かみことば、我等われらの爲ために測はかり難がたく聖せいなる童貞女どうていじよより身みを取りし主しゅを、我等われら信者しんじやは同心どうしんに歌うたを以もつて崇あがめ讃ほむ。

爾なんじより身みを取りし仁慈じんじなる神かみを言いひ難がたく生うみたる唯一ゆいいちの少女しやうじよよ、我われを神聖しんせいなる仁慈じんじを蒙こうむるに勝たふる者ものと爲なして、愛あいを以もつて爾なんじを讚榮さんえいする者ものを將來しやうらいの焰ほのお及び凡およその苦くるしみより脱のがれしめ給たまへ。

讚美さんびたる者ものよ、我等われら皆獨みなひとり爾なんじを堅固けんこなる轉達てんたつしや者と恃頼たのみ、保護ほごと希望きぼう、確たしかなる庇覆おおいと破やぶられぬ城しろ、穩おだやかなる港みなとと堅かたき避所かくれがとして得えて救すくはる。

神聖しんせいなる光ひかりを生うみし少女しやうじよよ、諸慾しよよくの多おほくの侵害しんがいと惡敵あくてきの謀はかりごととに味くらまされたる吾わが心こころを照てらし給たまへ。童貞女どうていじよよ、我われを罪つみの汚けがれより潔きよむる涙なみだの點滴したたりを常つねに我われに與あたへ給たまへ。

次ぎて「常に福にして」、及び躬拜、小聯禱、光耀歌、及び常例の聖詠。

挿句に十字架の讃頌、第二調。

ハリストス神よ、爾は十字架の木を我等爾を信ずる者の爲に生命の樹と爲し、此を以て死の權を乗る者を虚しくして、罪に因りて殺されし者を生かし給へり。故に我等爾に呼ぶ、衆人の恩者主よ、光榮は爾に歸す。

句、主よ、夙に爾の憐を以て我等に飽かしめよ、然せば我等生涯歡び樂しまん。爾我等を撲ちし日、我等が禍に遭ひし年に代へて、我等を樂しましめ給へ。願はくは爾の工作は爾の諸僕に著れ、爾の光榮は其諸子に著れん。

ハリストス神よ、アダムの貧しくなりしに因りて爾は甘じて貧しくなり、童貞女より身を取りて地に來り、我等を敵の奴隸より救はん爲に釘殺を受け給へり。主よ、光榮は爾に歸す。

句、願はくは主吾が神の恵は我等に在らん、願はくは我が手の工作进行を我等に助け給

第二調 水曜日の早課 三九九

第二調 水曜日の眞福詞 四〇〇

へ、我が手の工作进行を助け給へ。

致命者讃詞。

嗚呼受難者致命者よ、凡の城邑と地方とは爾等の不朽の體を尊む、蓋爾等は法に遵ひて苦しむを忍びて、天より榮冠を受けたり。故に爾等は成聖者の譽、諸王の勝利、諸教會の裝飾なり。

光榮、今も、十字架生神女讃詞、第二調

潔き者よ、爾は耕作せずして胎内に宿せし全く實りたる葡萄が木に懸けられしを觀て、泣き號びて呼べり、子及び恩主よ、爾を生みし我の爲に己の愛憐に促されて、諸慾の醉を醒ますべき甘味を滴らせ給へ。

次ぎて「至上者よ、主を讃榮し」、聖三祝文。「天トロバリに在す」の後に讃詞、聯禱、第一時課、其他、及び發放詞。



水曜日の眞福詞、第二調。

我等爾に盜賊の聲を奉りて祈る、救世主よ、爾の國に於て我等を憶ひ給へ。

句、義の爲に窘逐せらるる者は福なり、天國は彼等の有なればなり。

救世主よ、爾十字架に上りしに、悉くの人の性、絶えず爾を歌ふ者を共に上せ給へり。

句、人我の爲に爾等を語り、窘逐し、爾等の事を偽りて諸の悪しき言を言はん時は、爾等福なり。

人を愛する主よ、爾は戈を以てアダムの書券を裂きて、彼を生者の書に録し給へり。

句、喜び樂しめよ、天には爾等の賞多ければなり。

致命者よ、爾等は十字架に釘せらるるを忍びし主に效ふ者と爲りて、其光榮にも與る者と顯れたり。

光榮

無原なる父、同無原の子は、聖神と共に同一の尊貴及び光榮に於て歌はるべし。

今も

少女よ、爾は種なく生みし者の十字架に在るを見て、涕泣して、彼の恒忍を歌頌せり。



第二調 水曜日の眞福詞 四〇一

第二調 水曜日の晩課 四〇二

水曜日の晩課

「主よ、爾に籲ぶ」に聖使徒の讚頌、第二調。

句、主よ、若し爾不法を糾さば、主よ、孰か能く立たん、然れども爾に赦あり、人の爾の前に敬まん爲なり。

睿智なる主の門徒よ、爾等は神靈の川の如くエデムより分れて、全地を潤し、之を耕作して救の傳道を播き、繁く實りたる穂なる救はれし者の靈を穫りて、之を最尊き寶として無形の寶藏に納めたり。

句、我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を恃む。

無形の東の光體なる者よ、多慾なる吾が心を諸慾及び逸樂の黒暗より出し給へ。邪教の夜の迷を拂ひし日を衆人に傳ふる其至りて輝ける光線よ、其實見者として彼に我等の思念をも照さんことを祈り給へ。

句、我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

爾等は實に神の刻みたる新なる恩籠の石板と現れ、救の言を載する、父の指にて聖神を以て録されたる活ける書卷と現れたり。故に四極を周りて、衆人に眞實の教と天に行かしむる道とを明に示せり。

次ぎて若し之あらば、月課經の聖人の讚頌。若しなくば、聖大奇跡者ニコライの讚頌。同調。

句、願はくはイズライリは主を恃まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、彼はイズライリを其悉くの不法より贖はん。

聖神父ニコライ、ハリストスの成聖者よ、爾は有形にしてミラ城に生を度り、無形の香膏を抹られて、實に香料と現れ、信を以て爾の庇覆の下に趨り附く者に不死の芳香を薫らせて、主に獻る爾の祈禱を以て彼等を苗害危難憂愁より解き給ふ。

句、萬民よ、主を讚め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讚めよ。

神父ニコライよ、我多くの誘惑に圍まれ、世俗の累に纏はれ、危難の浪に溺らされ、憂

に攻めらるる者は我が一切の望を爾に負はしむ。福たる者よ、爾が主宰、我等の神に奉る祈禱を以て我が悉くの患難を解き給へ。

句、蓋彼が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。

至福なるニコライよ、我思念の黒暗と悪鬼の誘惑とに圍まれ、肉體の慾に荒らされ、罪の法に勝たるる者に至りて、恩寵の光を以て照し給へ、爾は世界の中に神の光線にて輝く光なればなり。

光榮、今も、生神女讃詞。

第二調 水曜日の晩課 四〇三

第二調 水曜日の晩課 四〇四

父及び聖神と同尊なる言、末の時に童貞女・神の少女より地に輝きし大なる日たる者は爾等を、光榮なる使徒等よ、其光線として遣して、正教の光を以て迷の黒暗にある衆人を照し、神聖なる教訓を以て彼等を之に導き給ふ。

次ぎて「穩なる光」。本日の提綱、神よ、爾の名を以て我を救ひ、爾の力を以て我を判き給へ。句、神よ、我が禱を聴き、我が口の言を聆き納れ給へ。

挿句に使徒の讃頌、第二調。

救世主よ、爾は首たる使徒等の名を世界に大なる者と爲せり。蓋彼等は天の事を習ひて、地上の者に言ひ難き醫治を與へたり彼等の影すらも諸病を痊せり。漁者より出でし者は奇跡を行ひ、イウデヤ人より出でし者は恩寵の教を宣傳せり。慈憐なる主よ、彼等に由りて我等に大なる憐を與へ給へ。

句、天に居る者よ、我目を擧げて爾を望む。視よ、僕の目主人の手を望み、婢の目主婦の手を望むが如く、我等の目は主我が神を望みて、其我等を憐むを俟つ、我等常に不義なる行に攻められて、爾眞の神に趨り付き、爾の門徒の聲を爾に奉りて云ふ、夫子よ、我等を救へ、殆ど囚ふ。祈る、今も爾が使徒の祈禱に因りて、多くの慈憐を以て、人人の罪を顧みずして、彼等を覆ひて、患難より救ふことを我等の諸敵に示し給へ。主よ、光榮は爾に歸す。

句、主よ、我等を憐み、我等を憐み給へ、蓋我等は侮に鑿き足れり、我等の靈は驕る者の辱と誇る者の侮とに鑿き足れり。

聖なる者よ、爾等が信を以て得たる光榮は大なり、蓋唯苦の中に敵に勝ちしのみならず、死せし後にも悪鬼を逐ひ、病者を醫す。靈體の醫師よ、主に我等の靈を憐まんことを祈り給へ。

光榮、今も、生神女讃詞。

青き橄欖樹たる童貞女は爾生命の果を結べり、世界の爲に大にして豊なる憐を繁殖せしめん爲なり。

次ぎて「主宰よ、今爾の言に循ひて」。聖三祝文。讃詞及び發放詞。

~~~~~

水曜日の晩堂課

至聖なる生神女に奉る祈禱の規程、第二調。

第一歌頌

イルモス、人人よ、來りて、海を分ちて、エジプトの奴隸より引き出しし民を過ら

第二調 水曜日の晩堂課 四〇五

第二調 水曜日の晩堂課 四〇六

せしハリストス神に歌を歌はん、彼光榮を顯したればなり。

至淨なる者よ、我靈と口とを以て敬虔にして爾を眞の生神女と承け認むる者を、  
今諸難、諸病、諸罪より救ひ給へ。

生神女よ、我等爾の中に恩寵の淵あるを知れり。故に熱心に爾の神聖なる庇覆の下  
に趨り附きて救はる。 光榮

至淨なる者よ、我等爾を歌ふ者の爲に爾の純潔尊貴なる血より身を取りし主に祈り  
て、我等を罪過及び苦しき病より脱れしめんことを求め給へ。

今も

神の恩寵を蒙れる者よ、我等衆信者は爾を美譽と喜悅、避所と保固、恃頼と保護、及  
び靈の救として獲たり。

第三歌頌

イルモス、木を以て罪を殺しし主よ、我等を爾の中に堅めて、爾を畏るる畏を我等、  
爾を歌ふ者の心に植え給へ。

潔き者よ、爾が生みし神を、爾の祈禱を以て、爾の帟幪の下に趨り附きて、熱心  
に爾の産を拜する爾の諸僕の爲に慈憐なる主と爲し給へ。

讚美たる童貞女よ、我が心の深處より爾に奉る我が祈禱の詞を聽きて、我を諸慾及  
び諸難より救ひ給へ。 光榮

童貞女・神の聘女、我が憑恃及び轉達者よ、我が生涯を治めて、我を誘惑、侵害、及  
び患難より脱れしめ給へ。 今も

神の實在の睿智を手に抱きし神の母よ、我等が無智及び迷惑より救はれんことを祈り  
給へ。

第四歌頌

イルモス、人を愛する主よ、我爾の光榮なる攝理を聞きて、爾の悟り難き能力を讚榮  
せり。

神を生みし女宰よ、我が靈の傷を醫し、肉慾の穢を潔め給へ。

童貞女よ、我諸慾と、思念と、世俗の累にて汚されし者を希望及び信仰にて堅め給  
へ。 光榮

神の母、惟一讚美たる者よ、爾の祈禱を以て我を侵害と、颶風と、患難より脱れし  
め給へ。 今も

童貞女よ、我生命の浪に荒さるる者を助けて、爾の港に導き給へ。

### 第五歌頌

イルモス、光を賜ひ、世世を造りし主よ、爾の誠の光の中に我等を導き給へ、我等

第二調 水曜の日晚堂課 四〇七

第二調 水曜日の晩堂課 四〇八

爾の外に他の神を識らざればなり。

我等爾潔き生神女を識る者は敵の諸の誘惑に對して勝たれぬ武器を有ちて、凡の侵害より救はる。

ヘルウィムより上なる者よ、爾は律法の成滿たる、身を取りし神の言、獨生の子を生み給へり。彼に爾の諸僕の爲に祈り給へ。

### 光榮

萬有の造成主を爾の手に抱きし潔き者よ、彼を、爾の祈禱を以て、今心を全くして爾に趨り附く我等の爲に慈憐なる者と爲し給へ。

### 今も

我不當の者は苦しみて病める靈より爾に祈禱を奉る。獨憐の原因たる言を生みし者よ、我を憐みて救ひ給へ。

### 第六歌頌

イルモス、我罪の淵に溺れて、爾が憐の量り難き淵に呼ぶ、神よ、我を淪滅より引き上げ給へ。

我爾を救の港と識る者は、憂多き生命の海を濟りて呼ぶ、我が靈を導く者となり給へ。

我災難に遇ひて、我が潔淨の衣を剥がれたり。永貞童女、神を生みし母よ、我に歡喜の衣を與へ給へ。

### 光榮

我愆ある者は潔き生命に離れて、怠惰の中に度生せり。祝福せられたる女幸よ、我を興して、爾の子の誠に従はしめ給へ。

### 今も

至りて慈憐なる言、己の血を以て人人を朽壞より救ひし主を生みし生神女よ、我を爾の慈憐を被るに堪へさせ給へ。

次ぎて主憐めよ、三次。光榮、今も、

### 坐誦讚詞、第二調。

潔き永貞童女よ、爾の祈禱を以て我を天國に入るに勝ふる者と爲し、惡愆の械を壞りて、我を將來の焔より脱れしめ給へ。

### 第七歌頌

イルモス、黄金の偶像がデイルの野に奉事せられし時、爾の三人の少者は神に逆ふ命を顧みずして、火の中に投げられ、涼しくせられて歌へり、我が先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

かみ はは なんじ み と もの じゅうじか てい かきつけ さ  
神の母よ爾より身を取りし者は十字架に釘せられて、アダムの書券を裂きたり。

第二調 水曜日の晩堂課 四〇九

第二調 水曜日の晩堂課 四一〇

どうていじょ いま かれ いの しん もつ なんじ み かみ う もの あが ほめらると、呼ぶ者を凡の悪より脱れしめんことを求め給へ。

じょさい なんじ しんじや ぜん たのみ およ ほごしや われら いまなんじ いの およそ なんじ たの もの  
女宰よ、爾は信者の善なる侍頼及び保護者なり。我等今爾に祈る、凡そ爾を頼む者に豊なる慈憐を垂れ給へ、蓋彼等爾に呼ぶ、身にて神を生みし者は崇め讃めらる。

### 光榮

われ いのち はなはだ くらやみ かこ うれい とも われ あわれみ もの え どうていじょ  
我生命の甚しき黒暗に圍まれて、憂を共にして我を憐む者を得ざりき。童貞女よ、  
なんじ ふかり もつ ざいあく くらやみ と われ てら なんじ うた たま み かみ う もの  
爾の光を以て罪惡の黒暗を解き、我を照して爾に歌はしめ給へ、身にて神を生みし者は崇め讃めらる。

### 今も

われ ふとう もの せんれい よ き すくい いましめ うるわ ころも おこたり もつ けが どうていじょ  
我不當の者は洗禮に由りて衣たる救の戒の美しき衣を怠惰を以て汚せり。童貞女  
よ、今爾に趨り附きて、爾に依りて復救の衣を衣んことを求む。

### 第八歌頌

イルモス、火の爐の中にエウレイの少者に降りて、焰を露に變ぜし神を、造物は主として歌ひて、萬世に崇め讃めよ。

われ ちじやく ふかみ おちい いま わ おもい よわ しょうほう しゅじゅ あく かこ  
我耻辱の深處に陥りて、今我が思念は弱る、諸方より種種の悪に圍まるればなり。

どうていじょ なんじ われ いや な よく ひかり き たま  
童貞女よ、爾我を醫して、無慾の光を衣せ給へ。

しじょう もの われら しん もつ なんじ けんご はしら およ もとい ほごしや およ てんたつしや え  
至淨なる者よ、我等信を以て爾を堅固なる柱及び基、保護者及び轉達者として獲て、  
いま すく なんじ さん うた これ ばんせい あが ほ  
今救はれ、爾の産を歌ひて、之を萬世に崇め讃む。

### 光榮

しょうしんじょ われら なんじ ふし ひかりおよ いずみ し けだしなんじ ふし ちち ことば かれ ばんせい  
生神女よ我等爾を不死の光及び泉として知る。蓋爾は不死なる父の言、彼を萬世に崇め讃むる衆人を死より救ふ者を生み給へり。

### 今も

いさぎよ もの なんじ つね われら しんじや いやし ながれ そそ たま われら こ ゆたか おんちよう く  
潔き者よ、爾は常に我等信者に醫治の流を注ぎ給ふ、我等斯の豊かな恩寵を汲みて、  
なんじ いさぎよ さん うた ばんせい あが ほ  
爾の潔き産を歌ひて、萬世に崇め讃む。

### 第九歌頌

イルモス、食に縁りて甚しく朽壞に陥りしアダムを、言ひ難き智慧を以て改めん爲に神より來りし神言、我等の爲に測り難く聖なる童貞女より身を取りし主を、我等信者は同心に歌を以て崇め讃む。

しんぶく しょうじょ われ おっしん わ いっさい のぞみ なんじ お まこと いのち いさぎよ はは  
神福なる少女よ、我熱心にして我が一切の望を爾に負はせたり。眞の生命の潔き母  
よ、我を救ひ、信と愛とを抱きて、歌を以て爾を崇め讃むる者を永遠の糧に飽かし  
めんことを祈り給へ。

しんせい ひかり もん あらわ いさぎよ どうていじょ なんじ わけい ひかり もつ わ たましい くらやみ てら  
神聖なる光の門と顯れたる潔き童貞女よ、爾の無形の光を以て我が靈の黒暗を照し、  
なんじ てんたつ よ われ えいえん ひ のが え たま わ た なんじ  
爾の轉達に由りて我に永遠の火を遁れんことを得しめ給へ、我が絶えず爾を

第二調 水曜日の晩堂課 四一一

崇め讃めん爲なり。 光榮  
女宰よ、悪慾に陥りて、靈と體とを病み、今甚しく憂ふる者を見て、爾の慈憐を以て之を醫して解き給へ、彼等が信と愛とを抱きて、歌を以て爾を崇め讃めん爲なり。

今も

神の母よ、永遠の父が腹より生みし子は爾の腹に入り、全き人と爲りて、信を以て爾の言ひ難き産を拜する我等の爲に爾を恩寵の泉と現し給へり。

次ぎて「常に福にして」、及び躬拜。其他常例の如し、並に發放詞。



木曜日の早課

第一の誦文の後に使徒の坐誦讃詞、第二調。

爾の言ひ難き仁愛に因りて漁者を辯論者に超ゆる智者と爲し、之を傳道師として全地に遣ししハリストス神、獨聖者の中に息ふ主よ、彼等に因りて爾の教會を堅め、信者に爾の祝福を降し給へ。

句、其聲は全地に傳はり、其言は地の極に至る。

神聖なる使徒等よ、爾等は神の睿智の門徒及び實見者として、智者及び辯論者の智慧を無智と爲し、傳道の愚を以て諸民に惟一の造物者及び主を醇正に歌頌する智慧を授けたり。

光榮、今も、生神女讃詞。

生神女よ、我等爾を讃め揚げて呼ぶ、入らざる光の雲よ、慶べ、蓋爾は彼、光榮の主たる者を爾の手に抱き給へり。

第二の誦文の後に坐誦讃詞、第二調。

ハリストス神、獨仁慈にして人を愛する主よ、漁者は聖神の網を以て諸民を漁して、地の四極に爾に父及び聖神と共に伏拜せんことを教へたり。彼等に因りて爾の教會を堅め、信者に爾の祝福を降し給へ。

句、主よ、諸天は爾の奇異なる事を讃榮せん。

再右の坐誦讃詞を誦すべし。次に、

句、神よ、爾は爾の聖所に於て嚴なり。

致命者讃詞

主の受難者よ、爾等の血を呑みし地は福なり、爾等の體を受けし殿は聖なり、蓋爾等は審判に於て敵を辱め、ハリストスを勇ましく傳へたり。祈る、其至善の主なる

に因りて彼に我等の靈の救はれんことを求め給へ。

光榮、今も、生神女讃詞。

生神女・永貞童女よ、我等爾に依りて神の性に與る者と爲れり、爾我等の爲に身を取りし神を生みたればなり。故に我等皆宜しきに合ひて敬虔に爾を崇め讃む。

第三の誦文の後に坐誦讃詞、第二調。

言よ、爾は聖なる爾の門徒を輝ける光體として世界に遣して、天下を照し、衆人を無智の黒暗より脱れしめ給へり。人を愛する主よ、常に彼等の祈禱を納れて、黒暗に在る我が靈を照して、我を救ひ給へ。

至りて熱切なる轉達者ニコライよ、爾は奇跡の光線にて普天下を照し、憂の暗を解き、菑害の至るを防ぐ。

光榮、今も、生神女讃詞。

婚姻に與らざる至淨にして聖なる生神女、聘女ならぬ聘女よ、爾が性に超えて身にて生みし爾の子に、常に諸使徒と偕に、凡そ爾を歌ふ者に諸罪の赦免、生命の更新、諸慾の絶滅を賜はんことを祈り給へ。

聖使徒の規程、フェオファンの作。第二調。

第一歌頌

イルモス、全く備はれる力は昔ファラオンの全軍を深水に敷き、人體を取りし言、讃榮せらるる主は萬の悪を致す罪を滅し給へり、彼嚴に光榮を顯したればなり。信に因りて神聖なる光の閃電となりし光明なる救世主の使徒よ、我逸樂の穢に味まされ、怠惰の中に我が生涯を送りし者を照し給へ。二次。

ハリストスの門徒及び友よ、我悪業に由りて敵の友と爲りし者を此より脱れしめて、吾が靈に、慈憐に由りて人類を愛せし主を愛する情を起し給へ。

卑微なる吾が靈よ、死に先だちて務めて痛悔し、己の殺されしを哭け。願はくは慈憐に因りて四日目のラザリを復活せしめし主は使徒の祈禱に因りて爾をも復活せしめん。

生神女讃詞

仁慈なる神、凡そ朽壞に陥りし者に恩を施す主を生みし純潔無玷なる者よ、彼に諸預言者、致命者、使徒と共に衆を患難より救はんことを祈り給へ。

又聖大奇跡者潤膏者ニコライの規程。其冠詞は、ニコライよ、愛の禱を納れ給へ。イオシフの作。第二調。

イルモス、人人よ、來りて、海を分ちて、エジプトの奴隷より引き出しし民を過ら

第二調 木曜日の早課 四一五

第二調 木曜日の早課 四一六

せしハリストス神に歌を歌はん、彼光榮を顯したればなり。常に恩寵の神聖なる寶座の前に立つニコライよ、信を以て爾を呼ぶ爾の諸僕に恩寵と慈憐とを賜はんことを祈り給へ。

地上に菑害に遭ふ者の爲に神は爾を大なる轉達者と爲せり。故に祈る、晝に夜に我の爲に轉達して、我を敵の誘惑より護り給へ。

神父ニコライよ、我爾を光れる星として観る。願はくは爾の輝ける光線に由りて我  
誘惑、患難、諸罪の黒暗より脱れん。

### 生神女讃詞

獨神の恩寵を蒙れる者よ、我を肉體の病より護り、吾が靈の隠れたる傷を醫し、我  
を永遠の火より脱れしめ給へ。

### 第三歌頌

イルモス、主よ、荒地の如く實を結ばざる異邦の教會は、爾の來るに因りて、百合  
の如く華さけり、我が心は此に縁りて固められたり。

聖にして奇異なる見神者よ、爾等は父の睿智を教師として得て、聖神に因りてエルリ  
ンの智慧を愚と爲せり。二次。

讚美たる使徒、至福なる言の實見者よ、我が靈の無結果を解きて、我に行に於て  
諸徳の美果を結ばしめ給へ。

萬衆の恩恵、慈憐多き主よ、我今敵の毒の齒に甚しく嚙まれたる者を爾の使徒の祈祷  
に因りて醫し給へ。

### 生神女讃詞

至淨なる者よ、至仁の神に衆使徒と偕に祈りて、爾を尊む者が凡の懊惱と誘惑及、  
び災難より救はれんことを求め給へ。

### 又

イルモス、木を以て罪を殺しし主よ、我等を爾の中に堅めて、爾を畏るる畏を我等、  
爾を歌ふ者の心に植え給へ。

醫治の泉たる聖なる者よ、吾が靈の慾を痊し、我が生命を護り、我爾の僕をして菑害  
に遭ふことなからしめ給へ。

大なるニコライよ、我が轉達者として我が心の迷を正し、我と戦ふ見ゆると見えざ  
る敵の害より我を救ひ給へ。

福たる者よ、唯一至善なる主は爾を善なる保護者として人人に與へたり。故に爾に祈  
る、諸の悪より我を脱れしめ給へ。

### 生神女讃詞

純潔なる者よ、爾は我の力と喜と樂、堅固なる牆と轉達者なり、爾は我を諸

第二調 木曜日の早課 四一七

第二調 木曜日の早課 四一八

の誘惑及び菑害より脱れしめ給ふ。

### 第四歌頌

イルモス、童貞女に藉りて來りし者は使者に非ず、天使に非ず、主親ら人體を取り  
て、我全き人を救ひ給へり。故に我爾に呼ぶ、主よ、光榮は爾の力に歸す。

唯一人を愛する主よ、爾を全世界に傳へし使徒等の神聖なる祈祷に由りて、我常に餓  
えて飢餓に苦しめらるる者を救の糧に飽かしめ給へ。二次。

人を愛する主よ、爾は世俗の海に爾の光榮なる使徒等を馬の如く放ちて、其不信の

しおはゆ にが みず みだ  
鹹く苦き水を亂せり。

ひ 日たるハリストスを幽闇に居る者に報ぜし至りて讚美たる使徒等よ、罪の幽闇に臥す  
われ てら わ こころ よこしま おもひ しりぞ たま  
我を照して、我が心の邪なる念を退け給へ。

### 生神女讃詞

ばんぶつ うた かんじ うた つね うた もの なんじ うた もの ため しと ら とも われら  
萬物に歌はるる神を生みし常に歌はるる者よ、爾を歌ふ者の爲に使徒等と共に我等  
しよざい しよなん しんがい すく いの たま  
が諸罪と諸難と侵害より救はれんことを祈り給へ。

又

イルモス、しゅ われ なんじ うた けだし おとづれ き おそ なんじ われ まよい もの たず われ  
イルモス、主よ、我爾を歌ふ、蓋風聲を聞いて懼れたり、爾は我迷へる者を尋ねて、我  
いた じゆえ じれん ふか しゅ われ お なんじ おおい かんよう さんえい  
にまで至ればなり。故に慈憐深き主よ、我に於ける爾の大なる寛容を讚榮す。

しよとく もつ しゆきようざ かざ なんじ せいせいしゃ とうと かざり あらわ ゆえ なんじ  
諸徳を以て主教座を飾りしニコライよ、爾は成聖者の尊き飾と顯れたり。故に爾  
いの わ みにく たましい かざ われ せぞく いざない すく たま  
に祈る、我が醜き靈を飾りて、我を世俗の誘惑より救ひ給へ。

しふく 至福なるニコライよ、彼の世に往く途を我が爲に平にせよ、世俗の浪の中に我を護  
なんじ おおい てんたつしや とみ え もの いのち みなと つ え たま  
りて、爾大なる轉達者より富を獲たる者として、生命の港に著くを得しめ給へ。

かみ ことば したが おおい わ ことば き われ あくき いざない ふほう ひとびと  
神の言に順ひし大なるニコライよ、我が言を聞いて、我を悪鬼の誘惑、不法の人人、  
およ もろもろ わざわい のが たま  
及び諸の害より脱れしめ給へ。

### 生神女讃詞

せい せい じよざい しょうしんじよ われ あくき こうげき たお おお つみ おちい もの ひる よる きよ まも  
聖なる女宰生神女よ、我悪鬼の攻撃に仆されて、多くの罪に陥る者を晝に夜に潔め、護  
すくい みちび たま  
りて、拯救に導き給へ。

### 第五歌頌

イルモス、かみ なんじ かみ ひと なかだち な しゆざい われら なんじ よ  
イルモス、ハリストス神よ、爾は神と人との中保者と爲れり、主宰よ、我等は爾に依  
むち やみ ひかり もと なんじ ちち つ え  
りて、無智の闇より光の原なる爾の父に就くを得たればなり。

おおい ぼくしや その しんせい もんと ひつじ ごと おおかみ なか つかわ せんれい おんちよう ちから ぜん  
大なる牧者は其神聖なる門徒を羊の如く狼の中に遣して、洗禮の恩寵の力と善な  
ことば もつ これ へんえき  
る言とを以て之を變易せり。二次。

しんぶく 神福たる使徒等よ、爾等は神聖なる光を以て迷の黒暗にある人人の心を照せり。

第二調 木曜日の早課 四一九

第二調 木曜日の早課 四二〇

ゆえ なんじら いの よく いつらく くら われ てら たま  
故に爾等に祈る、慾の逸樂に味まされたる我を照し給へ。

ふとう 不當なる靈よ、終の前に務めて痛悔して、主に呼べ、主宰よ、我罪を犯せり、使徒等  
よ じれん もつ われ ゆる すく たま  
に因りて慈憐なるを以て我を赦して救ひ給へ。

### 生神女讃詞

ひかり すまい いた いぎよ もの なんじ ひかり もつ くらやみ ふ われ てら しと ら とも  
光の居處たる至りて潔き者よ、爾の光を以て黒暗に臥す我を照して、使徒等と偕  
いの なんじ きとう よ われ およそ きなん すく もと たま  
に祈りて、爾の祈祷に因りて我を凡の危難より救はんことを求め給へ。

又

イルモス、ひかり たま よよ つく しゅ なんじ いましめ ひかり うち われら みちび たま われら なんじ  
イルモス、光を賜ひ、世を造りし主よ、爾の誠の光の中に我等を導き給へ、我等爾  
ほか たの かんを 識らざればなり。

かみ ほう おこな しふく しぜん かみ いの われ しんせい ほう まも  
神の法を行ひし至福なるニコライよ、至善なる神に祈りて、我をして神聖なる法を守  
かつ ふほう てき およ あくき がい われ のが たま  
らしめ、且不法なる敵及び悪鬼の害より我を脱れしめ給へ。

神智なる聖ニコライよ、昔轉達して三人の少者を救ひし如く、斯く我をも神に奉る  
爾の祈祷を以て凡の罪より救ひ給へ。  
ハリストスの聖務者、罪人等の轉達者、大なる奇跡者よ、仁慈なる神に審判の時に於  
て我を辱かしめざらんことを祈り給へ。

生神女讃詞

潔き主の母よ、慈憐なるにに因りて轉達して、多くの慾に耽りたる我を之より脱れ  
しめ給へ、我が救はれて、靈と心と舌とを以て爾を讃め歌はん爲なり。

第六歌頌

イルモス、我罪の淵に溺れて、爾が憐の量り難き淵に呼ぶ、神よ、我を淪滅より引  
き上げ給へ。  
活ける水を有つ救世主の門徒よ、祈る、罪の熱に焚かるる吾が靈に之を飲ませ給へ。

二次。

神靈の天と爲りし光明なる使徒等よ、爾等は言ひ難き神の光榮を傳へたり、我等衆  
が此を獲んことを祈り給へ。  
ハリストスよ、我世の海に烈しく荒らさるる者は爾衆の舵師なる者に呼ぶ、爾の  
使徒等に因りて我を救の港に向はしめ給へ。

生神女讃詞

神の聘女よ、衆天軍と、諸預言者と、使徒及び致命者と偕に我等の爲に爾の子に祈  
り給へ。

又 イルモス同上

ミラ城に首座と爲りて、爾の善業を以て信者の會を薰らせしニコライよ、諸罪の

第二調 木曜日の早課 四二一

第二調 木曜日の早課 四二二

悪臭より我を脱れしめ給へ。  
日よりも明なる心を獲たる神父ニコライよ、我全身を照して、誘惑と憂愁との黑暗  
を拂ひ給へ。  
宏き恩を有つニコライよ、我を狭むる悪敵より援けて、我が窄き路に由りて主に往  
くを堅め給へ。

生神女讃詞

至淨なる者よ、我何の時に爾に呼ぶ、願はくは爾を凡の禍及び畏るべき苦よ  
り我を援くる扶助者として得ん。

第七歌頌

イルモス、不法なる虐者の神にに返る命令は高き焰を起したれども、讃め歌はるる  
ハリストスは敬虔の少者に屬神の露を降し給へり。  
聖神の火に燃されし使徒等よ、爾等は迷の熾炭を滅して、衆信者の心に神聖なる熱信  
を燃し給へり。故に我等聲を揚げて爾等を崇め讃む。二次。  
神聖なる使徒等よ、爾等は世と凡そ世にある事とを悪みて、世に於て人人に體合せ

しハリストスを愛せり。彼に生涯我を凡の悪より救はんことを祈り給へ。  
義なる審判者、心を洞徹する主、獨我が隠れたる罪過を知る者よ、爾の使徒の祈禱  
に因りて、審判の時に我を定罪する勿れ、我を火に遣す勿れ。

### 生神女讃詞

婚姻に與らざる童貞女よ、爾は言ひ難く生みて、神性の火に焚かれざりき。潔き者  
よ、爾を讃榮する我を永遠の焰より救はんことを使徒等と偕に祈り給へ。

### 又

イルモス、黄金の偶像がデイルの野に奉事せられし時、爾の三人の少者は神に逆ふ命  
を顧みずして、火の中に投げられ、涼しくせられて歌へり、我が先祖の神よ、爾は崇  
め讃めらる。

神父ニコライよ、我毎日誘惑の火に觸れ、禽の如く羅の中を行きて、爾の宏恩なる帟幪  
の下に趨り附く。仁慈なる主神に祈りて、我を害なく護り給へ。

神父ニコライよ、我が言を遡に聴きて、急ぎ來りて、我諸の憂、生命の累、及  
び悪鬼の攻撃に荒らさるる者を助け給へ、我が救はれて爾の轉達を歌はん爲なり。  
昔夢に王に見れて、死に定められたる無罪の者を救ひし神父ニコライよ常に我に逼  
る誘惑、身の病及び靈の憂より我を救ひ給へ。

第二調 木曜日の早課 四二三

第二調 木曜日の早課 四二四

### 生神女讃詞

至淨なる者よ、我獨爾を扶助者と有ち、爾を衆人の生命の守護者と信ず、我爾の僕  
を遣つる勿れ。惟一の世界の轉達者よ、我が先祖の神は崇め讃めらると歌ふ我を救ひ  
給へ。

### 第八歌頌

イルモス、昔ワウイロンの火の爐は神の命によりて其勢を分ち、ハルデイを焦し  
て、信者を涼しくせり、主の悉くの造物は主を崇め讃めよと歌へばなり。

言の神聖なる使徒等よ、至聖神は火の舌の形を以て現に爾等に降りて、爾等を無神  
を焚き、衆敬虔者を照す光體と爲せり。二次。

慈憐なる主よ、祈る、爾の門徒の祈禱に因りて、烈しく慾に荒らさるる我が治し難  
き心を醫し、我が靈を照し、悪に傾きたる我が智慧を直くし給へ。

我が靈よ、歎息し、中心より涙を流し、終の前に己の爲に泣きて、慰められぬ憂  
の未爾に及ばざる先に主に呼べ、慈憐なる主よ、爾の使徒の祈禱に因りて我を救ひ給  
へ。

### 生神女讃詞

純潔なる童貞女よ、昔少者を焚かざりし爐は爾の産を預象せり。故に爾に祈る、  
使徒等及び衆預言者と偕に「ゲエンナ」の火より我を救はんことを祈り給へ。

### 又

イルモス、火の爐の中にエウレイの少者に降りて、焰を露に變ぜし神を、造物は主

として歌ひて、萬世に崇め讃めよ。

神より縛り及び釋く權を受けし神智なる神父ニコライよ、爾の祈祷を以て我が惡の縲紲を釋き、甘じて人と爲りし主宰の神聖なる愛に我を繋ぎ給へ。

聖なるニコライよ、爾の神聖なる眷顧にて晝に夜に我を眷みて、我が卑微なる靈の爲に途を平にし、我を凶悪者の逼る誘惑に惱まされぬ者として護り給へ。

昔少者を苦しき死より救ひしニコライよ、我に神聖なる援助の手を授けて、惡敵の侵害より護り給へ、我が爾を慈憐なる轉達者として尊まん爲なり。

神よ、爾が世界を審判せん爲に畏るべき寶座に坐する時、爾の僕と訟を爲す母れ。

ニコライの祈祷に由りて、我を救はるる者の分に與る者と爲し給へ。

### 生神女讃詞

神の母よ、爾は性に超ゆる爾の産を以て我等大にして數へ難き惡に因りて小くなりし者を大なる者と爲せり。故に我等爾に祈る、至淨なる者よ、爾の豊なる憐

第二調 木曜日の早課 四二五

第二調 木曜日の早課 四二六

を我等の中に大なる者と顯し給へ。

### 第九歌頌

イルモス、無原の父の子、神と主は、童貞女より人體を取り、我等に現れて、昧まされし者を明かし、散らされし者を集め給へり。故に我等讚美たる生神女を崇め歌ふ。光榮なる使徒、福たる使徒、救世主の門徒、睿智なる傳道師よ、我を凡の惱、凡の怒、凡の罪、凡の誘、及び諸の菑害より脱れしめ給へ。二次。

我定罪せられし者、我迷ひし者、爾の誠を輕じて、惡鬼の誘惑に従ひし者を、主よ、爾の使徒の祈祷に因りて還し給へ。

人を愛する主よ、我治し難き靈、罪過の中に葬られし良心、汚れたる心、昧みたる思念を贖して、爾に呼ぶ、使徒等に因りて爾の慈憐を以て我を宥め給へ。

### 生神女讃詞

至淨なる者よ、使徒等は爾の子を全世界に神及び人として傳へたり。故に彼等と偕に祈りて、信を以て爾を讃め揚ぐる者が審判の畏るべき日に苦より脱れんことを求め給へ。

### 又

イルモス、食に縁りて甚しく朽壞に陥りしアダムの言ひ難き智慧を以て改めん爲に神より來りし神言、我等の爲に測り難く聖なる童貞女より身を取りし主を、我等信者は同心に歌を以て崇め讃む。

睿智なるニコライよ、我爾を成聖者の則、溫柔の模として知る。聖にせられし父よ、日に我を擾す諸愆諸難の暴風を鎮め、爾の祈祷を以て我を惱まされぬ者として護り給へ。

ミラ城の睿智なる首成聖者よ、爾は慈憐に因りて地に注がれし神聖なる香料を盈つ

る聖にせられし器として、我等衆の心を薰らせ、爾の祈祷を以て誘惑の悪臭を拂ひ給へ。

神父ニコライよ、我が善なる轉達者として、爾は多くの見えざる敵に苦しめらるる我が靈を慰め、爾は詭譎の者の晝に夜に我に勧むる無量の誘惑を止め給へ。

畏るべき主宰の日は近づきて門の側にあり、嗚呼靈よ、多くの罪を抱きて何をか爲さん。終の前に痛悔して、熱切に主に呼べ、爾の成聖者ニコライの祈祷に由りて我を救ひ給へ。

生神女讃詞

主よ、審判せんとする時我を宥め、我を宥めて、火に我を定罪する母れ、爾の憤

第二調 木曜日の早課 四二七

第二調 木曜日の早課 四二八

を以て我を責むる母れ。ハリストスよ、爾を生みし童貞女と、衆くの使徒及び光榮なるニコライは之を爾に祈る。

次ぎて「常に福にして」、及び躬拜。小聯祷、光耀歌、常例の聖詠。

挿句に使徒の讃頌、第二調。

救世主よ、爾は首たる使徒等の名を世界に大なる者と爲せり。蓋彼等は天の事を習ひて、地上の者に言ひ難き醫治を與へたり、彼等の影すらも諸病を痊せり。漁者より出でし者は奇跡を行ひ、イウデヤ人より出でし者は恩寵の教を宣傳せり。慈憐なる主よ、彼等に由りて我等に大なる憐を與へ給へ。

句、主よ、夙に爾の憐を以て我等に飽かしめよ、然せば我等生涯歡び樂しまん。爾我等を撲ちし日、我等が禍に遭ひし年に代へて、我等を樂しましめ給へ。願はくは爾の工作は爾の諸僕に著れ、爾の光榮は其諸子に著れん。

我等常に不義なる行に攻められて、爾眞の神に趨り付き、爾の門徒の聲を爾に奉りて云ふ、夫子よ、我等を救へ、殆ど囚ふ。祈る、今も爾が使徒の祈祷に因りて、多くの慈憐を以て、人人の罪を顧みずして、彼等を覆ひて、患難より救ふことを我等の諸敵に示し給へ。主よ、光榮は爾に歸す。

句、願はくは主吾が神の恵は我等に在らん、願はくは我が手の工作进行を我等に助け給へ、我が手の工作进行を助け給へ。

ハリストスよ、爾の聖人の大數は爾に祈る、人を愛する主として我等を憐みて救ひ給へ。

光榮、今も、生神女讃詞

神の母よ、我が盡くの恃を爾に負はしむ、我を爾の覆の下に守り給へ。

次ぎて「至上者よ、主を讃榮し」、聖三祝文。「天に在す」の後に讃詞、及び聯祷。

次に第一時課、常例の聖詠、及び發放詞。



木曜日の眞福詞、第二調。

我等爾に盜賊の聲を奉りて祈る、救世主よ、爾の國に於て我等を憶ひ給へ。

句、義の爲に窘逐せらるる者は福なり、天國は彼等の有なればなり。

睿智なる使徒等よ、爾等は地の極を巡りて、人人を誘惑と邪教との黒暗より救ひ給へり。

句、人我の爲に爾等を詬り、窘逐し、爾等の事を譎りて諸の悪しき言を言はん時は爾等福なり。

救世主の門徒よ、爾等は恩寵の網を以て巧に衆人を虚誕の深處より擧げ給へり。

第二調 木曜日の眞福詞 四二九

第二調 木曜日の晩課 四三〇

句、喜び樂しめよ、天には爾等の賞多ければなり。

馳すべき程を盡して、信を守りし主の受難者を、我等信者は心を合せて歌はん。

光榮

我等は父と均しく行爲する子を聖神と偕に傳へて、造られざる三者を歌はん。

今も

至淨なる童貞女よ、爾は使徒の美譽、受難者の裝飾、世界の拯救なり。



木曜日の晩課

「主よ、爾に籲ぶ」に十字架の讚頌、第二調。

句、主よ、若し爾不法を糾さば、主よ、孰か能く立たん、然れども爾に赦あり、人の爾の前に敬まん爲なり。

救世主よ、爾十字架に釘せられしに、日は靦て畏に因りて昧み、殿の幔は裂け、地は震ひ、磐は慄きて崩れたり、己の造成主及び神が甘じて木の上に非義に苦を受け、不法者より辱しめらるるを見るに勝へざればなり。

句、我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を恃む。

人を愛する主よ、爾木に擧げられしに、至りて凶悪なる蛇は全く地に仆され、遍く傷つけられて臥し、先に定罪せられしアダムは詛より釋かれて救はる。故に我等も祈る、慈憐なる主よ、我等衆を救ひて、爾の國に入るを得しめ給へ。

句、我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

罪なき者よ、爾十字架に上げられ、戈にて脇を刺されて辱しめられしに、日は之を觀るに勝へずして隠れ、地は震ひ、磐は畏に由りて裂け、衆造物は呼べり、救世主、人を愛する言よ、光榮は衆人の救と爲りし爾の十字架に歸す。

次ぎて月課經の聖人の讚頌。若し月課經なくば、左の十字架生神女の讚頌を歌ふ。

第二調。

句、願はくはイスラエリは主を恃まん、蓋 憐 は主にあり、大なる 贖 も彼にあり、彼はイスラエリを其 悉 くの不法より 贖 はん。

イイスよ、婚姻に與らざる者は爾が十字架の木に擧げられしを見て、哭きて云へり、甘愛なる子よ、何ぞ我爾を生みし者を獨遺したる。無原なる父の近づき難き光よ、速に光榮を獲よ、爾の神聖なる苦を讚榮する者も神聖なる光榮を受けん爲

第二調 木曜日の晩課 四三一

第二調 木曜日の晩課 四三二

なり。

句、萬民よ、主を讚め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讚めよ。

童貞女は生命の主が木の上に死して、戈にて其脇の痛く刺さるるを見て、哭きて呼べり、吾が子及び神よ、恩寵に悖る會は何ぞ是くの如く爾に報いたる、嗚呼主宰よ、爾が此の苦を受くるを見て、我悲に勝へずして心裂かる。

句、蓋彼が我等に施す 憐 は大なり、主の眞實は永く存す。

夫を識らざる童貞女は其子の木より下されて、氣息なき人の如く地に置かるるを見て、懷に抱きて、其口と目とに接吻して、彼に呼べり、萬衆を生かす主なるに、我今如何ぞ其聲なくして動かざるを見る、誠に大なる奇跡なる哉。

### 光榮、今も、十字架生神女讚詞。

無玷なる牝羊は其 羔 の甘じて人の如く屠の爲に牽かるるを見て、哭きて云へり、ハリストスよ、爾を生みし我を爾は今子なき者と爲す、衆人の救主よ、何ぞ斯く爲したる。然れども人を愛する主よ、我は智慧及び言に超ゆる爾の至大なる仁慈を歌頌 讚榮す。

次ぎて「穩なる光」。本日の提綱、我が助は天地を造りし主より來る。句、我目を擧げて山を望む、我が助は彼處より來らん。次に「主よ、我等を守り、罪なくして此の晩」。

### 挿句に十字架の讚頌、第二調。

ペトルを海に救ひしハリストス救世主よ、十字架の力を以て我を救へ、神よ、我を 憐 み給へ。

句、天に居る者よ、我目を擧げて爾を望む。視よ、僕の目主人の手を望み、婢の目主婦の手を望むが如く、我等の目は主我が神を望みて、其我等を 憐 むを俟つ。

常に爾の諸恩を樂しむ者は十字架に釘せらるべしと呼べり、義人等を殺す者は恩主に代へて犯罪者を赦さんことを乞へり。爾は、ハリストスよ、苦を受けて我等を救はんと欲して、黙して彼等の殘忍を忍び給へり、人を愛する主なればなり。

句、主よ、我等を憐み、我等を憐み給へ、蓋我等は 侮 に鑿き足れり、我等の 靈 は驕る者の 辱 と誇る者の 侮 とに鑿き足れり。

### 致命者讚詞

受難者よ、爾等は地上の 樂 を愛せずして、天上の福樂を獲、諸天使の同住者と爲れ

り。主よ、彼等の祈禱に由りて我等を憐みて救ひ給へ。

光榮、今も、十字架生神女讃詞。

第二調 木曜日の晩課 四三三

救世主よ、不法の人人が爾萬衆の生命たる者を木に擧げし時、潔くして至りて無玷なる爾の母は前に立ちて、哭きて呼べり、吾が甘愛なる子、吾が目の光よ、嗚呼如何ぞ爾は地を水の上に懸けし主なるに、犯罪者の間に十字架に定罪せらるるを忍びたる。

次ぎて「主宰よ、今爾の言に循ひて」。聖三祝文。「天に在す」の後に讃詞、及び發放詞。



木曜日の晩堂課

至聖なる生神女に奉る祈禱の規程、第二調。

第一歌頌

イルモス、全く備はれる力は昔ファラオンの全軍を深水に敷き、人體を取りし言、讃榮せらるる主は萬の悪を致す罪を滅し給へり、彼嚴に光榮を顯したればなり。神は爾を女の中に美しき者、全く善なる者無玷なる者と選びて、爾の無玷なる腹に入り給へり。至りて無玷なる者よ、彼に爾を歌ふ衆人を諸罪の玷より救はんことを祈り給へ。

潔き者よ、爾は、聖詠に言へる如く、皇后として爾の腹より輝きし王の右に立てり。至りて無玷なる者よ、彼に應報の日に於て我を右に立つ者と爲さんことを祈り給へ。

光榮

天の雨を生みし者は不當なる行に由りて枯れたる人の性を全く新にせり。故に祈る、神の聘女よ、吾が靈の枯れたる畝を繁く實らしむる者と爲し給へ。

今も

潔き生神女よ、我等は知識の樹に殺されて、智慧に超えて爾より生ぜし生命の樹たるハリストス神に由りて永遠の生命に召されたり。勇を以て彼に吾が靈の救はれんことを祈り給へ。

第三歌頌

イルモス、主よ、荒地の如く實を結ばざる異邦の教會は、爾の來るに因りて、百合の如く華さけり、我が心は此に縁りて固められたり。

至淨なる者よ、造物主は我人を衣て、爾の腹より出でて、多くの悪事に因りて裸體となりたる者に不朽の衣を賜へり。

女宰よ、爾は至りて尊き神言を生み給へり。彼に熱切に祈りて、逸樂の穢を患

ふる我が卑微なる靈を宥めんことを求め給へ。

光榮

至淨なる者よ、我が靈の傷を醫し、蛇の毒に惱まされたる吾が卑微なる心を爾の効驗ある治療を以て醫し給へ。 今も

女宰よ、母として爾の子の前に勇を有ちて、迫害せらるる人人の爲に助を求め、不法の者の驕傲を滅し給へ。

第四歌頌

イルモス、童貞女に藉りて來りし者は使者に非ず、天使に非ず、主親ら人體を取りて、我全き人を救ひ給へり。故に我爾に呼ぶ、主よ、光榮は爾の力に歸す。女宰よ、我に傷感の滴を注ぎて、我が心の熱と我が憂とを悉く退け、有害なる攻撃を防ぎ給へ。

至淨なる者よ、我逸樂の武器に傷つけられ、病みて臥す者を棄つる母れ。十字架に釘せられし爾の子我が神の戈と血とを以て我を痊し給へ。

光榮

凡の主宰の恩寵に富まされたる純潔なる者よ、痛く貧しくなりたる我に神聖なる恩寵を得しめ給へ、我が爾を善なる私の保護者として崇め讃めん爲なり。

今も

婚姻に與らざる少女よ、父の光なるハリストスは爾の腹より輝き出でて、十字架に釘せられて全地を照し、悪鬼の幽闇を滅し給へり。

第五歌頌

イルモス、ハリストス神よ、爾は神と人との中保者と爲れり、主宰よ、我等は爾に依りて、無智の闇より光の原なる爾の父に就くを得たればなり。

生命の途を生みし至淨なる者よ、我無智にして無道及び誘惑の坎に墜されたる者を今直き途に向はしめ給へ。

我無知にして神の睿智より離れ、諸愆の遠き路に迷ひて、放蕩に生活せり。潔き童貞女よ、我を返して、爾の宥を以て救ひ給へ。 光榮

至淨なる童貞女母よ、爾の活ける水を我罪の炎に焚かれ、悪鬼の攻撃に燃さるる爾の僕に飲ませ給へ。 今も

至淨なる生神女よ、イサイヤの預言せし如く、視よ、爾は言に超えて腹の内にハリストス神を宿し、性に超えて神の母として之を生み給へり。

第六歌頌

イルモス、我罪の淵に溺れて、爾が憐の量り難き淵に呼ぶ、神よ、我を淪滅より引

あ たま  
き上げ給へ。

じよさい しょうらい しんぱん おい われ あくき よろこび な なか しんぱんしゃ なんじ こ じれん もつ われ  
女宰よ、將來の審判に於て我を悪鬼の悦と爲す勿れ、審判者爾の子に慈憐を以て我  
を見んことを祈り給へ。

しゆ われ よこしま おもい ふけつ おこない もつ なんじ いか もの わ ため なんじ いの なんじ  
主よ、我邪なる思と不潔なる行とを以て爾を怒らしし者を我が爲に爾に祈る爾  
の母の祈祷に由りて憐みて救ひ給へ。 光榮

しんぱんしゃ およ ばんゆう かみ う さんび じよさい われ つみ よ みずか ていざい もの  
審判者及び萬有の神を生みし讚美たる女宰よ、我罪に因りて自ら定罪せられし者を  
定罪より脱れしめ給へ。 今も

しじよう どうていじよ はは なんじ せい こ み もつ う きゆうせいしゆ なんじ しょぼく  
至淨なる童貞女母よ、爾が性に超えて身を以て生みしイイスス救世主に爾の諸僕の  
患難より救はれんことを祈り給へ。

次ぎて主憐めよ、三次。光榮、今も、

セダレン  
坐誦讚詞、第二調。

どうていじよ なんじ はは なんじ じゆうじか か し もの み いた な い  
ハリストスよ、童貞女爾の母は爾十字架に懸けられて死せし者を覩て、痛く泣きて曰  
へり、吾が子よ、此の奇異なる秘密は何ぞや、衆に永遠の生命を賜ふ者は如何ぞ甘  
じて十字架に耻づべき死を以て死する。

第七歌頌

ふほう しいたげびと かみ もと めいれい たか ほのお おこ ほ うた  
イルモス、不法なる虐者の神に戻る命令は高き焰を起したれども、讚め歌はるるハ  
リストスは敬虔の少者に屬神の露を降し給へり。

わ ちから うた すくい けんご ほご やぶ かき じよさい われ たたか あくき つね われ ころ  
我が力と歌と救、堅固なる保護と破られぬ墻たる女宰よ、我と戦ふ悪鬼、常に我を殺  
さんと謀る者に勝ち給へ。

どうていじよ なんじ どうてい ち み と かみ う じんらい しんせい たま ゆえ われ なんじ  
童貞女よ、爾は童貞の血より身を取りし神を生みて、人類を神成し給へり。故に我爾  
に祈る、爾の祈祷を以て我諸慾に汚され、敵の悪謀に因りて朽壞せし者を救ひ給へ。

光榮

じゆんけつ もの いろり なんじ さん ましやう けだししやうしゃ や とど ひ なんじ  
純潔なる者よ、爐は爾の産を預象せり、蓋少者を焚かざりき、止められぬ火の爾  
の胎に於けるが如し。故に我等爾に祈る、爾の諸僕を永遠の火より脱れしめ給へ。

今も

いさぎよ もの なんじ ひとり どうていじよ とど しじよう みごもり ふきゆう さん あらわ けだし  
潔き者よ、爾は獨童貞女に止まりて、至淨なる降孕と不朽なる産とを顯せり、蓋  
萬有の神にして人と成りしハリストスを信者の救及び贖罪の爲に妊み給へり。

第八歌頌

むかし ひ いろり かみ めい そのいきおい わか こが  
イルモス、昔ワロロンの火の爐は神の命によりて其勢を分ち、ハルデイを焦し

第二調 木曜日の晩堂課 四三九

第二調 木曜日の晩堂課 四四〇

しんじゃ すず しゆ ことごと ぞうぶつ しゆ あが ほ うた  
て、信者を涼しくせり、主の悉くの造物は主を崇め讚めよと歌へばなり。

わ たましい あく とお ぜん した しんせい おこない おもんばか けだし じんじ じれん かみ はは  
吾が靈よ、悪に遠ざかりて善を慕ひ、神聖なる行を慮れ、蓋仁慈慈憐なる神の母、  
衆人の耻を得ざる保護者は爾の爲に祈る。

しじよう かみ はは なんじ じんらい いにしえ ていざい なわめ と ゆえ なんじ いの わ ころ  
至淨なる神の母よ、爾は人類の古の定罪の縛を解きたり。故に爾に祈る、我が心  
の凡の悪の縛を解きて、造成主を愛する神聖なる愛を以て我を縛り給へ。

光榮

父の光榮の光を生みし生神女よ、罪惡の耻を患ふる我が心を照して、我を永在の光榮に與る者と爲し給へ、我が信を以て爾を讚榮せん爲なり。

今も

神の母よ、至上者は爾より身を取りて、我等に眞の義の日と顯れて、神性の光線を以て萬有を照し給へり、我等彼を讚め歌ふ。

第九歌頌

イルモス、無原の父の子、神と主は、童貞女より人體を取り、我等に現れて、味まされし者を明かし、散らされし者を集め給へり。故に我等讚美たる生神女を崇め歌ふ。至淨なる者よ、アダムは死を交へたる食を嘗めて、木の苦に害せられたり、爾の子は木に釘せられて、不死の甘を流し給へり。故に我等爾を崇め讚む。少女よ、爾は王たるハリストス、地獄の國を破りし主を言ひ難く生みたる女王なり。彼に爾を尊む衆人が上なる國に入るを得んことを熱切に祈り給へ。

光榮

慈憐なる主の母にして慈憐なる女宰よ、逸樂の慾に迫害せらるる我が卑微なる心に慈憐を垂れて、我を痛悔の善なる門に入れ給へ。

今も

言よ、爾は十字架に擧げられて死者と爲り、此を以て蛇を殺せり。故に我爾に呼ぶ、悪しき行に殺されたる吾が靈を憐みて、爾を生みし者の祈祷に因りて之を生かし給へ。

次ぎて「常に福にして」、及び躬拜。聖三祝文、「天に在す」の後に讚詞。其他常例の如し、及び發放詞。



第二調 木曜日の晩堂課 四四一
第二調 金曜日の早課 四四二

金曜日の早課

第一の誦文の後に十字架の坐誦讚詞、第二調。

ハリストス神よ、爾は救を地の中に作し、十字架に爾の至淨なる手を伸べて、萬民を集めて呼ばしむ、主よ光榮は爾に歸す。

句、主我が神を崇め讚め、其足凳に伏し拜めよ、是れ聖なり。

主よ、敵が木の生ずる食を以てアダムを虜にせし如く、斯く爾は親ら十字架の木と爾の苦とを以て敵を虜にせり、第二のアダムとして爾は殊に迷ひし者を尋ね、死せし者を生かさん爲に來りたればなり。神よ、光榮は爾に歸す。

光榮、今も、十字架生神女讚詞。

ハリストスよ、童貞女爾の母は爾十字架に懸けられて死せし者を観て、痛く泣きて曰へり吾が子よ、此の奇異なる秘密は何ぞや、衆に永遠の生命を賜ふ者は如何ぞ甘じて十字架に耻づべき死を以て死する。

第二の誦文の後に坐誦讃詞、第二調。

主よ、爾が我等不當の者に爾の仁慈に因りて賜ひし生命を施す十字架を我等祈祷の中に爾に捧ぐ。獨人を愛する主よ、生神女に因りて、皇帝と爾の城邑とを救ひて、平安を與へ給へ。

句、神我が古世よりの王は救を地の中に作せり。

仁慈なるハリストス神よ、我等爾の至淨なる聖像に伏拜して、我が諸罪の赦を求む。蓋爾は其造りし者を敵の奴隷より救はん爲に、甘じて身にて十字架に升起給へり。故に我等感謝して爾に呼ぶ、世界を救はん爲に來りし我が救世主よ、爾は衆人を欣喜に満て給へり。

句、神よ、爾は爾の聖所に於て嚴なり。

致命者讃詞

聖人等は世に在りて爾雲を以て天を覆ふ主を己の衣と爲して、不法者より受くる苦を忍び、偶像の迷を空しくせり。救世主よ、彼等の祈祷に因りて、我等をも見えざる敵より脱れしめて救ひ給へ。

光榮、今も、十字架生神女讃詞。

ハリストスよ、種なく爾を生みし者は爾の十字架の側に立ち、非義に苦を受くるを見るに忍びずして、歎息して爾に呼べり、至りて甘愛なる子、性に於て苦に與らざる者よ、如何ぞ苦を受くる。我爾の至大なる仁慈を歌ふ。

第三の誦文の後に坐誦讃詞、第二調。

甘じて我等の爲に苦を受けし主よ、我盜賊の如く承け認めて、爾至善の者に呼ぶ、

第二調 金曜日の早課 四四三

第二調 金曜日の早課 四四四

主よ、爾の國に於て我を憶ひて、彼と偕に我を算へ給へ。爾の十字架を以て地上の者を照し、罪ある者を痛悔に召し給ひし善き牧者よ、我を爾の群より遠ざくる勿れ。獨仁慈にして人を愛する主宰よ、我迷ひし者を尋ねて、爾の聖なる群に合せ給へ。

光榮、今も、十字架生神女讃詞。

潔き女宰生神女よ、我等皆爾の子の尊き十字架に護られて、輒く敵の凡の攻撃に勝つ。故に爾を神の母、獨我が靈の特頼なる者として宜しきに合ひて崇め讃む。

尊貴にして生命を施す十字架の規程、其冠詞は、十字架は樹てられて悪鬼の誘は墜ちたり。イオシフの作。第二調。

第一歌頌

イルモス、選ばれたるイズライリは曾て履まれぬ、常ならぬ、海の路を足を濡らさず

して過りて呼べり、主に謳はん、彼光榮を顯したればなり。  
言よ、爾は十字架に釘うたる辱を受け給へり、爾の自由なる苦を讚榮する衆人を貴くせんと欲したればなり。  
天を幔の如く張りたる救世主よ、爾は十字架に手を伸べて、此を以て諸民諸族、爾の自由なる苦を讚榮する者を抱き給へり。

### 致命者讚詞

受難者よ、爾等は十字架を肩に任ひ、熱心に十字架に釘せられしハリストスに従ひて、其神聖なる苦に效へり。  
凱旋の致命者、見神者よ、天軍は爾等の苦を見て歌頌し、悪鬼の大數は哭けり。

### 生神女讚詞

女宰よ、尊き預言者の言は應へり、蓋爾が己の子の十字架に釘せられしを見し時、劍は爾の心を貫けり。

### 又至聖なる生神女の規程、第二調。

イルモス、人人よ、來りて、海を分ちて、エジプトの奴隸より引き出しし民を過らせしハリストス神に歌を歌はん、彼光榮を顯したればなり。  
無慾の泉を生みし獨神の恩寵を蒙れる少女よ、慾に傷つけられし我を醫して、永遠の火より脱れしめ給へ。  
獨神の恩寵を蒙れる者よ、我を肉體の病より護り、吾が靈の不當なる慾を醫し、我を永遠の火より脱れしめ給へ。  
至淨なる童貞女母よ、我今爾の仁慈の下に趨り附く、爾の僕を靈の病、心を害

第二調 金曜日の早課 四四五

第二調 金曜日の早課 四四六

する慾、及び永遠の火より救ひ給へ。  
女宰よ、爾は我の篤き保護なり、我爾に趨り附きて助を蒙り、靈の救を得、爾は神の母として衆人を救ふを能すればなり。

### 第三歌頌

イルモス、爾我を信の石に堅く立て、我が口を啓きて我が敵に對はしめ給へり。蓋我が神は楽しみて歌へり、吾が神と侔しく聖なるはなく、主よ、爾の外に義なるはなし。  
木に懸れる不朽の葡萄たるイイスス、吾が靈の贖罪主は、神聖なる甘味を滴らせて、人人の心を樂しましめ、恩寵にて悪の酔を醒ます。  
慈憐多きイイススよ、爾は甘じて木に擧げられて、悉く悪魔の悪業を墜し、迷へる智慧に由りて滅亡に陥りし人人を擧げ給へり。

### 致命者讚詞

神を愛する愛の火に燃ゆる勇敢なる者は不死の賜、終なき悦、入らざる光を受けんことを望みて、火を畏れず、死を忌まざりき。

致命者讃詞

受難者は己の血を以て美しく朱袞衣を染めて之を衣、右の手に帝笏の如く神聖なる十字架を執りて、主と偕に常に王たるなり。

生神女讃詞

神の聘女少女よ、無形の品位は爾を尊む。蓋爾は身を取りし萬有の主宰、木に縁りて縛られし衆を解き、信者を己の愛に繋ぎし者を生み給へり。

又 イルモス同上

童貞女母よ、爾は無原の王、爾より身を取りし者を生み給へり。其人を愛する主なるに因りて、彼に爾の僕を諸の憂及び將來の定罪より救はんことを祈り給へ。永生の泉を生みし者よ、爾の神聖なる力を以て我が心の惑を釋き、傷を痊し、痛を去らしめ、傷感の流を我に予へ給へ。

至淨なる神の母よ、悪鬼の攻撃と失望とに因りて傷める吾が靈を醫し、痛悔の涙を我が心に與へ、我が主宰を畏るる畏を其中に入れ給へ。

女宰よ、我怠惰の中に我が生命を費し、慾にて吾が心を汚しし者は靈の傷感を抱き、爾に來りて祈る、痛悔の範を以て我を導き、我を宥めて救ひ給へ。

第四歌頌

イルモス、童貞女に藉りて來りし者は使者に非ず、天使に非ず、主親ら人體を取り

第二調 金曜日の早課 四四七

第二調 金曜日の早課 四四八

て、我全き人を救ひ給へり。故に我爾に呼ぶ、主よ、光榮は爾の力に歸す。地を水の上に懸けし全能者よ、爾は十字架に懸けられ、戈を以て脅を刺されて、血と水とを滴らせ給へり、衆人の贖罪の爲なり。

ハリストスよ、爾の脅の刺されしに、吾が病は愈され、手を以て頬の批たれしに、我自由を獲、瞻を嘗めしに、我逸樂の食の毒より救はれたり。

致命者讃詞

神聖なる致命者よ、爾等は詭譎なる蛇を傷にて掩ひ、常に救世主の泉より恩寵を流して、我が心の傷を醫し給ふ。致命者讃詞

至りて尊き見神者受難者よ、爾等は血を流す傷を受け、十字架に舒べられ、皮を剥がれたるに、悪敵の全體に傷を被らせたり。

生神女讃詞

純潔なる者よ、至上者は爾の至りて潔き血より身を取り給へり。爾は其非義に木に擧げらるるを見て、歎息して哭き、其仁慈を讃頌せり。

又

イルモス、主よ、我爾を歌ふ、蓋風聲を聞きて懼れたり、爾は我迷へる者を尋ねて、我にまで至ればなり。故に慈憐深き主よ、我に於ける爾の大なる寛容を讃榮す。

誠に讃美たる者よ、我爾至りて讃美たる神言を性に超えて生みし者を歌ひて祈る、

わ ひび たましい やまい いや われ おそ ていざい のが たま  
我が卑微なる 靈の病を醫し、我を畏るべき定罪より脱れしめ給へ。  
どうていじょ つね なんじ ゆたか じれん われら そぞ ふのう いや たましい しょよく とど  
童貞女よ、常に爾の豊なる慈憐を我等に注ぎて、不能を醫し、靈の諸慾を止め、  
わ こころ しょざい たびよう なわめ と たま  
我が心の諸罪と多病との縛を解き給へ。  
われ しょよく もつ たましい けが しじょう もの ため いた いさぎよ すまい な かみ はは われ  
我諸慾を以て 靈を汚せり。至淨なる者の爲に至りて 潔き居處と爲りし神の母よ、我  
を潔めて、つうかい ひかり みちび われ しょうらい ひ のが たま  
痛悔の光に導き、我を將來の火より脱れしめ給へ。  
しじょう じょさい なんじ いの わ ちえ てら にくたい のぞみ せい わ よく こころ なみ しず  
至淨なる女宰よ、爾に祈る、我が智慧を照し、肉體の望を制し、我が慾の心の浪を鎮  
めて、しんせい みなと つ たま  
神聖なる港に著かしめ給へ。

### 第五歌頌

イルモス、イサイヤに<sup>やけずみ</sup> 藪炭として<sup>あらわ</sup> 現れし日は<sup>ひ</sup> 童貞女の<sup>どうていじょ</sup> 腹より<sup>はら</sup> 黒暗に<sup>くらやみ</sup> 迷ひし者に<sup>まよ</sup> 輝き<sup>もの</sup> ながら<sup>かがや</sup>  
て、神を知る<sup>かみ</sup> 知識の<sup>し</sup> 光照を<sup>ちしき</sup> 賜ふ。<sup>こうしょう</sup>  
しゅさい なんじ じれん よ じゅうじか あ われ あく ふかみ ひ いた あまん  
主宰よ、爾は慈憐に<sup>なんじ</sup> 因りて<sup>じれん</sup> 十字架に<sup>よ</sup> 擧げられて、<sup>じゅうじか</sup> 我を<sup>あ</sup> 惡の<sup>われ</sup> 深處より<sup>あく</sup> 引き出し、<sup>ふかみ</sup> 甘じ  
て<sup>ひ</sup> 辱を受けて、<sup>い</sup> 我を<sup>いだ</sup> 尊くして<sup>あまん</sup> 父と<sup>はな</sup> 偕に<sup>もつ</sup> 坐せしめ給へり。<sup>ぜん</sup>  
はな もつ ぜん ち こうむ ことば なんじ いばら こうむ わ しょよく いばら ね た なんじ  
花を以て<sup>はな</sup> 全地に<sup>もつ</sup> 冠らす<sup>ぜん</sup> 言よ、<sup>ち</sup> 爾は<sup>こうむ</sup> 棘を<sup>ことば</sup> 冠りて、<sup>なんじ</sup> 我が<sup>いばら</sup> 諸慾の<sup>こうむ</sup> 棘を<sup>わ</sup> 根より<sup>しょよく</sup> 絶ち、<sup>いばら</sup> 爾  
の<sup>ね</sup> 智慧を<sup>た</sup> 我の中に<sup>なんじ</sup> 栽え給ふ。<sup>ちえ</sup>

### 致命者讚詞

第二調 金曜日の早課 四四九

第二調 金曜日の早課 四五〇

せい なんじ ちめいしゃ なんじら うち かみ よわき ひと つよき す よ なんじら たたかい いさ  
聖なる致命者よ、爾等の中に<sup>せい</sup> 神の<sup>ちめいしゃ</sup> 弱は<sup>なんじら</sup> 人の<sup>うち</sup> 強に<sup>かみ</sup> 過ぐるに<sup>よわき</sup> 由りて、<sup>ひと</sup> 爾等は<sup>つよき</sup> 戦に<sup>す</sup> 勇み  
て、あくき ぐん ついや たま  
悪鬼の軍を<sup>あくき</sup> 潰し給へり。<sup>ぐん</sup> 致命者讚詞  
せい もの なんじら ちじょう おおい しんろう てんじよう おおい こうえい え なんじら とうと われら  
聖なる者よ、爾等は<sup>せい</sup> 地上に<sup>もの</sup> 大に<sup>なんじら</sup> 心勞して、<sup>ちじょう</sup> 天上に<sup>おおい</sup> 大なる<sup>しんろう</sup> 光榮を<sup>てんじよう</sup> 獲、<sup>おおい</sup> 爾等を<sup>こうえい</sup> 尊む<sup>え</sup> 我等  
を<sup>え</sup> 大なる<sup>なんじら</sup> 患難より<sup>とうと</sup> 救ひ給ふ。<sup>われら</sup> 生神女讚詞  
おおい かんなん すく たま  
誠に<sup>おおい</sup> 至淨なる<sup>かんなん</sup> 者よ、<sup>すく</sup> 天に<sup>たま</sup> 於て<sup>まこと</sup> 神に<sup>しじょう</sup> 合ふが<sup>もの</sup> 如く<sup>てん</sup> ヘルワィムの<sup>おひ</sup> 肩に<sup>かみ</sup> 荷はるる<sup>かな</sup> 主、<sup>ごと</sup> 爾の<sup>かた</sup> 手に<sup>にな</sup>  
に<sup>しゅ</sup> 坐せし<sup>なんじ</sup> 者は<sup>て</sup> 十字架に<sup>まこと</sup> 釘せられて、<sup>しじょう</sup> 衆人を<sup>もの</sup> 朽壞より<sup>じゅうじか</sup> 救ひ給へり。<sup>てい</sup>

### 又

イルモス、<sup>くらやみ</sup> 幽闇に<sup>お</sup> 居る<sup>もの</sup> 者の<sup>こうしょう</sup> 光照、<sup>しつぼう</sup> 失望する<sup>もの</sup> 者の<sup>きゆうしよく</sup> 救贖<sup>わ</sup> たる<sup>きゆうしゅ</sup> ハリストス<sup>われ</sup> 我が<sup>わ</sup> 救主よ、<sup>きゆうしゅ</sup> 我  
爾<sup>なんじ</sup> 平安の<sup>へいあん</sup> 王に<sup>おう</sup> 朝の<sup>あさ</sup> 祈禱を<sup>いのり</sup> 奉る。<sup>たてまつ</sup> 爾の<sup>なんじ</sup> 光を<sup>ひかり</sup> 以て<sup>もつ</sup> 我を<sup>われ</sup> 照し給へ、<sup>てら</sup> 我爾の<sup>たま</sup> 外に<sup>われ</sup> 他の<sup>なんじ</sup> 神を<sup>ほか</sup> 識  
らざればなり。<sup>かみ</sup>  
ばんゆう じつざい いのち う じゅんけつ じょさい しょうしんじょ きけつ もの あくぼう いざない ころ  
萬有の<sup>ばんゆう</sup> 實在の<sup>じつざい</sup> 生命を<sup>いのち</sup> 生みし<sup>う</sup> 純潔なる<sup>じゅんけつ</sup> 女宰<sup>じょさい</sup> 生神女よ、<sup>しょうしんじょ</sup> 詭譎の<sup>きけつ</sup> 者の<sup>もの</sup> 惡謀と<sup>あくぼう</sup> 誘惑と<sup>いざない</sup> に<sup>ころ</sup> 殺さ  
れし<sup>われ</sup> 我を生かし給へ、<sup>い</sup> 我が<sup>たまた</sup> 敬虔にして<sup>わ</sup> 爾<sup>なんじ</sup> 讚美たる<sup>なんじ</sup> 者を<sup>さんび</sup> 歌はん<sup>もの</sup> 爲なり。<sup>うた</sup>  
こひつじおよ ぼくしゃ はは あらわ どうていじょ あくふう まよ われ ぼく しんばん ひ おい みぎ  
羔<sup>こひつじ</sup> 及び<sup>あわ</sup> 牧者の<sup>あわ</sup> 母と<sup>え</sup> 現れし<sup>たま</sup> 童貞女よ、<sup>なんじ</sup> 惡風<sup>わ</sup> に<sup>なんじ</sup> 迷ひし<sup>すくい</sup> 我を<sup>おんちよう</sup> 牧して、<sup>うた</sup> 審判の<sup>うた</sup> 日に<sup>ため</sup> 於て<sup>た</sup> 右な  
る<sup>しょうじょ</sup> 羊に<sup>い</sup> 合せられん<sup>なんじ</sup> ことを<sup>きとう</sup> 得しめ給へ、<sup>もつ</sup> 我が<sup>われ</sup> 爾の<sup>よく</sup> 救の<sup>くらみ</sup> 恩寵を<sup>あくてき</sup> 歌はん<sup>こうげき</sup> 爲なり。<sup>きた</sup>  
少女よ、<sup>しょうじょ</sup> 祈る、<sup>い</sup> 爾の<sup>なんじ</sup> 祈禱を<sup>きとう</sup> 以て<sup>もつ</sup> 我を<sup>われ</sup> 慾の<sup>よく</sup> 昏昧、<sup>くらみ</sup> 惡敵の<sup>あくてき</sup> 攻撃より<sup>こうげき</sup> 來る<sup>きた</sup> 誘惑、<sup>いざない</sup> 罪を<sup>つみ</sup> 犯す者  
の<sup>ため</sup> 爲に<sup>そな</sup> 備へらるる<sup>しょうらい</sup> 將來の<sup>えいえん</sup> 永遠の<sup>くるしみ</sup> 苦より<sup>すく</sup> 救ひ給へ。<sup>たま</sup>  
ぜんせかい てら ゆいいち かみ ことば い たま かみ よめ いの なんじ きとう もつ われ まこと  
全世界を<sup>ぜんせかい</sup> 照す<sup>てら</sup> 唯一の<sup>ゆいいち</sup> 神の<sup>かみ</sup> 言の<sup>ことば</sup> 入り<sup>い</sup> 給ひし<sup>たま</sup> 神の<sup>かみ</sup> 聘女よ、<sup>よめ</sup> 祈る、<sup>いの</sup> 爾の<sup>なんじ</sup> 祈禱を<sup>きとう</sup> 以て<sup>もつ</sup> 我に<sup>われ</sup> 眞  
の<sup>つうかい</sup> 痛悔の<sup>ひかり</sup> 光を<sup>てら</sup> 照し、<sup>わ</sup> 我が<sup>よく</sup> 慾の<sup>くらやみ</sup> 幽暗を<sup>はら</sup> 拂ふ<sup>すくい</sup> 救の<sup>こうせん</sup> 光線を<sup>われ</sup> 我に<sup>かがや</sup> 輝かし給へ。<sup>たま</sup>

### 第六歌頌

イルモス、主宰よ、傷める<sup>しゅざい</sup> 靈より<sup>いた</sup> 祈禱の<sup>たましい</sup> 言の<sup>いのり</sup> 聲を<sup>ことば</sup> 聞きて、<sup>こえ</sup> 我を<sup>き</sup> 諸難より<sup>われ</sup> 脱れしめ給<sup>しよなん</sup>

へ、爾は獨我等の救の縁由なればなり。  
救世主よ、爾は背を以て撻つに、爾の頬を以て批つに、面を以て唾せらるるに任せて、知ると知らずして爾の前に多く罪を犯しし我を救ひ給へり。  
ハリストス我が神よ、爾は羔の如く屠られん爲に牽かれて、無形の狼の毒齒に嚙まれて死せし者を復生命に升せ給へり。光榮は爾の釘殺に歸す。

### 致命者讃詞

主宰の致命者は法を守りて、法に悖る者の不法の命に服せずして、死して將來の生命を受けたり。  
聖人等は喜びて敵の首領と戦ひ、神聖なる武器を以て之に勝ちて、神より勝利の榮冠を受けたり。

### 致命者讃詞

### 生神女讃詞

第二調 金曜日の早課 四五一

第二調 金曜日の早課 四五二

童貞女よ、神は人を神成せん爲に爾より生れ、十字架に釘せられて死を嘗め、昔我を殺しし者を十字架にて殺し給へり。

### 又

イルモス、我罪の淵に溺れて、爾が憐の量り難き淵に呼ぶ、神よ、我を淪滅より引き上げ給へ。

讚美たる者よ、我今爾に趨り附く、爾の祈祷を以て我を守りて救ひ給へ、爾は衆を堅むる者の母として、欲する所能せざるなればなり。

生神童貞女よ、我憂患の暴風に擾され、侵害の浪に溺らさるる爾の僕を救ひ給へ。我無慈悲及び姦悪なる者に爾の慈憐を蒙らせて、我を將來の苦及び永遠の火より脱れしめ給へ。

純潔なる者よ、爾は世の罪を任ふ至淨なる羔を孕みて生み給へり、我に諸罪の赦を賜はんことを絶えず彼に祈り給へ。

### 第七歌頌

イルモス、不法なる虐者の神に戻る命令は高き焰を起したれども、讚め歌はるるハリストスは敬虔の少者に屬神の露を降し給へり。

衆人の復活なる言よ、爾は十字架に擧げられて、我罪に因りて陥りし者を興し、我を陥れし敵を倒して、此を殺せり。光榮は爾の權柄に歸す。

ハリストスよ、爾釘せられしに、釘を以て原祖の罪を十字架に打ち付け、葦にて撃たれしに、此を以て衆人の爲に自由を書せり。光榮は我等を諸愆の黒暗より脱れしめし爾の苦に歸す。

### 致命者讃詞

ハリストスの凱旋の致命者は殺人者の不潔なる手にて肉體を斬られ、靈を以ては神に離れず、勇敢の劍にて詭譎なる敵を斬り殺せり。

### 致命者讃詞

十字架に釘せられしハリストスを破られぬ固と有つ勝たれぬ軍は迫害者の軍を滅し、

苦しみを受けて、勝利の榮冠たる永遠の福樂の生命を獲たり。

生神女讚詞

童貞女よ、爾は王の活ける宮、及び火の状の寶座と現れたり、之に坐して彼は衆人を始の墮落より起して、父と偕に坐する尊貴を賜へり。

又 イルモス同上

實在の生命たる主、死を以て死を滅しし者を我等の爲に生みし潔き童貞女よ、吾が心の諸慾を殺して、我に涙の泉を與へ給へ、我が常に爾を讚榮せん爲なり。

第二調 金曜日の早課 四五三

第二調 金曜日の早課 四五四

純潔なる者よ、爾を恃む我の爲に耻を得ざる冀望、堅固なる恃頼、壞られぬ牆、幘幘及び扶助と爲りて、我を痛悔と傷感との光に導き給へ。

爾の僕が悪鬼の凡の侵害、憂患、定罪、及び永遠の火より救はれんことを爾の子に祈り給へ、我が信を以て常に爾を讚榮せん爲なり。

潔き者よ、爾は獨童貞女に止まりて、至淨なる降孕と不朽なる産とを顯せり、蓋萬有の神にして人と成りしハリストスを信者の救及び贖罪の爲に妊み給へり。

第八歌頌

イルモス、三重に福たる少者は金の像を顧みずして、變易なき活ける神の像を見て、焰の中に歌へり、造を受けし萬物は主を歌ひて、萬世に讚め揚ぐべし。

慈憐なる主よ、畏なく不法を行ふ頑陋なる人人は、不法者を義と爲す爾を犯罪者の間に木に擧げて釘せり、然れども萬物は爾を神及び主宰と讚榮して、爾の恒忍を讚め歌ふ。

ハリストスよ、爾は木に釘せられて、血に染みたる爾の指を以て、昔悪鬼に獻げられて獻ぐる者を害する血を拭へり。故に萬物は爾萬衆の神を讚榮して、爾の仁愛を讚め歌ふ。

致命者讚詞

活ける水に満たされたる致命者は其血の神聖なる流にて迷の川を涸らし、撓まざる信を以て呼べり、造を受けし萬物は主を歌ひて、萬世に彼を讚め揚ぐべし。

致命者讚詞

聖なる者よ、爾等の無量の血は邪教の火を滅し、エルリンの多神の迷を亘し、衆信者を照して歌はしむ、萬物は主を歌ひて、萬世に彼を讚め揚ぐべし。

生神女讚詞

諸預言者及び致命者の裝飾なる無玷の牝羊は爾無原なる言が羔の如く木に擧げられしを見て、痛く哭きて曰へり、造を受けし萬物は主を歌ひて、世々に彼を讚め揚ぐべし。

又

イルモス、火の爐の中にエウレイの少者に降りて、焰を露に變ぜし神を、造物は主として歌ひて、萬世に崇め讚めよ。

「ハリストティアニン」等の避所及び扶助者なる至りて潔き童貞女よ、我常に諸難及び詭譎なる悪鬼の多くの攻撃に圍まるる者を我が憂の中に棄つる勿れ。威嚴なる轉達者よ、爾に祈る者の聲を忘れずして、爾の祈祷を以て彼等を凡の病

第二調 金曜日の早課 四五五

第二調 金曜日の早課 四五六

凡の危難より脱れしめ給へ、爾の母たる祈祷は神を傾くればなり。祝福せられし潔き少女よ、今我が諸愆の烈しき暴風を鎮め、卑微なる我を絶えず攻むる無形の諸敵に勝ち給へ、我が信を以て爾を歌はん爲なり。獨神の母、信者の轉達者よ、終の時に於て我を誘惑の爐、諸罪の焰、諸愆の火、「ゲンナ」、及び悪鬼の侵害より脱れしめ給へ。

### 第九歌頌

イルモス、生神女よ、爾の位に合ひて能く爾を讚美する舌なし、天上の智慧も如何に爾を歌頌するを知らず、唯爾、仁慈の者として、我等の信を納れ給へ、我等の熱切なる愛を知らばなり、蓋爾は「ハリストティアニン」等の轉達なり、我等爾を崇め讚む。

言よ、昔イサクは爾の苦を預象せん爲に縛られ、又預象としておひつじは縛られし者を解きたるに、實に不自由なる祭祀は釋されたり、蓋爾は自由にして祭祀に獻ぜられしに、我等は諸悪より解かれたり。

人の子より至りて美しきハリストスよ、爾は姿容もなく威嚴もなくして、苦しめられ、十字架の木に懸けられて、全人類の醜きを妝ひ給へり。惟一慈憐なる主よ、光榮は爾の仁愛に歸す。

### 致命者讚詞

聖なる致命者よ、爾等上なるシオンに住む者と爲りて、天使の同居者として彼等と同尊なる者と顯れ、致命の榮冠を冠りて、冢子の教會を美しく飾り、神聖なる光を以て耀き給ふ。

### 致命者讚詞

主の聖なる致命者、大に爾等を愛せし者の至愛なる友よ、我を肉體に於ける有害の愛より脱れしめ、凡そ爾の記憶を行ふ者の爲に成聖、光照、及び諸罪の赦を求め給へ。

### 生神女讚詞

光體は爾義の日は甘じて十字架に擧げられしを覩て、其常の美しきを變じ、童貞女は童貞の門徒と偕に哭きて呼べり、嗚呼哀しい哉、斯の奇異なる顯現は何ぞや。

又

イルモス、無原の父の子、神と主は、童貞女より人體を取り、我等に現れて、味まされし者を明かし、散らされし者を集め給へり。故に我等讚美たる生神女を崇め歌ふ。童貞女よ、爾は智慧及び言に超えて、人を愛する主、獨慈憐多き者を生み給へり。彼に審判の畏るべき時に於て爾の僕を永遠の火より救はんことを祈り給へ。

第二調 金曜日の早課 四五七

第二調 金曜日の早課 四五八

かみ よめ われら なんじ うた しん もつ さんえい つね なんじ しんせい おおい した はし つ  
神の聘女よ、我等爾を歌ひ、信を以て讚榮し、常に爾の神聖なる帟幪の下に趨り附  
もの われら くる しよざい しよよく と てん あた われら ていざい およ えいく  
く者に、我等を苦しむる諸罪諸愆の解かるるを天より與へて、我等を定罪及び永苦よ  
りのが たま  
り脱れしめ給へ。

われ ころ つみ み み うるわ あじわ いとにが われ あ これ くら おそ  
我を殺しし罪の果は、見れば美しく、味へば最苦し、我飽くまで之を食ひて、畏る  
しんぱん ま しせい どうていじよ はは われ これ のが たま  
べき審判を俟つ。至聖なる童貞女母よ、我を之より脱れしめ給へ。

じれん しゅ はは じれん じよざい いつらく よく はくがい わ ひび ころ  
慈憐なる主の母にして慈憐なる女宰よ、逸樂の慾に迫害せらるる我が卑微なる心に  
じれん た われ つうかい ぜん もん い たま  
慈憐を垂れて、我を痛悔の善なる門に入れ給へ。

次ぎて「常に福にして」、小聯禱、光耀歌、及び常例の聖詠。

くづけ スティヒラ  
挿句に十字架の讚頌、第二調。

かみ なんじ じゆうじか き われら なんじ しん もの たため いのち き な これ もつ  
ハリストス神よ、爾は十字架の木を我等爾を信ずる者の爲に生命の樹と爲し、此を以  
し げん と もの むな つみ よ ころ もの い たま ゆえ われら なんじ  
て死の權を乗る者を虚しくして、罪に因りて殺されし者を生かし給へり。故に我等爾  
よ しゆうじん おんしや しゅ こうえい なんじ き  
に呼ぶ、衆人の恩者主よ、光榮は爾に歸す。

しゅ つと なんじ あわれみ もつ われら あ しか われら しょうがいよるこ たの  
句、主よ、夙に爾の憐を以て我等に飽かしめよ、然せば我等生涯歡び樂しまん。

なんじ われら う ひ われら わざおい とし か われら たの たま ねが  
爾我等を撲ちし日、我等が禍に遭ひし年に代へて、我等を樂しましめ給へ。願はく  
なんじ わざ なんじ しよぼく あらわ なんじ こうえい その しよし あらわ  
は爾の工作是爾の諸僕に著れ、爾の光榮は其諸子に著れん。

かみ まず よ なんじ あまん どうていじよ  
ハリストス神よ、アダムの貧しくなりしに因りて爾は甘じて貧しくなり、童貞女よ  
み と ち きた われら てき どれい すく たため ていざつ う たま しゅ こうえい  
り身を取りて地に來り、我等を敵の奴隷より救はん爲に釘殺を受け給へり。主よ、光榮  
なんじ き  
は爾に歸す。

ねが しゅ わ かみ めぐみ われら あ ねが わ て わざ われら たす たま  
句、願はくは主吾が神の恵は我等に在らん、願はくは我が手の工作进行を我等に助け給  
わ て わざ たす たま  
へ、我が手の工作进行を助け給へ。

致命者讚詞

ああ じゆなんしや ちめいしや なんじら たため し いた なんじら くるしみ う よ  
嗚呼受難者致命者よ、爾等はハリストスの爲に死に至るまで苦を受けしに因りて、  
なんじら たましい てん かみ て あ なんじら ふきゆう たい ぜんせかい どうと しよしさい しよおう これ  
爾等の靈は天に神の手に在り、爾等の不朽の體は全世界に尊まれ、諸司祭諸王は之  
ふくはい われら ひとびと みなよるこ どうしん よ せいじん ねむり しゅ め まえ どうと  
に伏拜し、我等人人皆悦びて同心に呼ぶ、聖人の寝は主の目の前に貴し。

光榮、今も、十字架生神女讚詞。

むてん めひつじ そのこひつじ あまん ひと ごと ほふり たため ひ み な い  
無玷なる牝羊は其羔の甘じて人の如く屠の爲に牽かるるを見て、哭きて云へり、  
なんじら う われ なんじ いま こ もの な しゆうじん きゆうしゅ なん か な  
ハリストスよ、爾を生みし我を爾は今子なき者と爲す、衆人の救主よ、何ぞ斯く爲し  
しか ひと あい しゅ われ ちえ およ ことば こ なんじ しだい じんじ かしよう  
たる。然れども人を愛する主よ、我は智慧及び言に超ゆる爾の至大なる仁慈を歌頌  
さんえい  
讚榮す。

トロバリ  
次ぎて「至上者よ、主を讚榮し」、聖三祝文。「天に在す」の後に讚詞、聯禱、第一  
時課、常例の聖詠、及び發放詞。

~~~~~

第二調 金曜日の早課 四五九

第二調 金曜日の眞福詞 四六〇

金曜日の眞福詞、第二調。

我等爾に盜賊の聲を奉りて祈る、主よ、爾の國に於て我等を憶ひ給へ。

句、義の爲に窘逐せらるる者は福なり、天國は彼等の有なればなり。

恒忍なる主宰よ、爾は甘じて棘の冠を冠りて、惡の棘を根より絶し給へり。

句、人我の爲に爾等を詬り、窘逐し、爾等の事を偽りて諸の悪しき言を言はん時は、爾等福なり。

罪なき者よ、爾は髑髏の處に釘せられて、凶悪者の首を碎き、衆人を救ひ給へり。

句、喜び樂しめよ、天には爾等の賞多ければなり。

致命者よ、爾等は毀られて、敵の一切の力を毀り、勝利の榮冠を受け給へり。

光榮

我等信者は神聖なる血の濺ぐを以て光照せられて、三位の中に惟一の神性を尊む。

今も

純潔なる者はハリストスが羔の如く木に懸けられしを觀て、泣き號びて彼を讚榮せり。



金曜日の晩課

「スポタ」の奉事の始及び晩課と早課との式、此等に関する規定は皆第一調に載す。

「主よ、爾に籲ぶ」に聖命者と成聖者と克肖者との讚頌、第二調。

句、主よ、若し爾不法を糾さば、主よ、孰か能く立たん、然れども爾に赦あり、人の爾の前に敬まん爲なり。

至りて讚美たる致命者よ、爾等は肉體を傷つくるに任せ、烈しき苦難と苦しき死とを忍びて、窘逐者を辱かしめ、實に偶像の尊きを滅して、ハリストス惟一の神及び主宰を傳へたり。光榮なる榮冠者よ、今爾等は天使の品位と偕に彼の前に立ち給ふ。

句、我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を恃む。

又上の讚頌、「至りて讚美たる致命者よ」、を踊す。

句、我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

福たる者よ、爾等は地に現れし言の聖なる傳道師と爲りて、衆人に敬虔を教へ、神聖なる正教を述べて、異端を遠くハリストスの教會より逐へり。故に聖三者の聖務者として衆を永遠の生命の居處に入れ給へ。

第二調 金曜日の晩課 四六一

第二調 金曜日の晩課 四六二

又致命者の讚頌。同調。

句、願はくはイズライリは主を恃まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、彼はイズライリを其悉くの不法より贖はん。

受難者よ、爾等は地上の樂を愛せずして、天上の福樂を獲、諸天使の同住者と爲れり。主よ、彼等の祈祷に由りて我等を憐みて救ひ給へ。

句、萬民よ、主を讚め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讚めよ。

聖致命者の我等の爲に祈りてハリストスを歌ふに、凡の迷謬は熄み、人の族は信を以て救はる。

句、蓋彼が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。

致命者の會は窘逐者に敵して曰へり、我等は萬軍の王の兵士なり、爾等火及び種種の苦に我等を付すとも、聖三者の力を諱まざらん。

光榮、今も、生神女讚詞。

恩寵來りて、法律の影は去れり。蓋燃ゆる棘の焚けざりし如く、童貞女は生みし後も永く童貞女なり。焰の柱の代に義の日は出でて光る、モイセイの代に我が靈の救者ハリストスは現れたり。

次ぎて「穩なる光」。本日の提綱、我が神我を憐む者は我に先だたん。句、我が神よ、我を我が敵より援け、我を攻むる者より護り給へ。次に「主よ、我等を守り、罪なくして此の晩」。

挿句に讚頌、第二調。

聖なる者よ、爾等が信を以て得たる光榮は大なり、蓋唯苦の中に敵に勝ちしのみならず、死せし後にも悪鬼を逐ひ、病者を醫す。靈體の醫師よ、主に我等の靈を憐まんことを祈り給へ。

句、主よ、爾が選び近づけし者は福なり。

死者の讚頌

ハリストス神よ、花の凋むが如く、影の過ぎ去るが如く、凡の人は壞らる、然れども籟の鳴らん時、地震ひ、死者皆興きて爾を迎へん。主宰よ、其時我等より遷しし爾の諸僕の靈を爾の聖なる住處に入れ給へ。

句、彼等の靈は福に居らん。

死者の讚頌

嗚呼靈が體に別るる時、苦勞如何許ぞ、噫嘻斯の時、涕を流すこと幾何ぞ、唯之を憐む者なし、天使等に目を擧ぐるも祈るに驗なく、人人に手を伸ぶるも扶くる者なし。故に我が愛すべき兄弟よ、我等の生の短きを念ひて、世を逝りし者に安息を、

第二調 金曜日の晩課 四六三

第二調 金曜日の晩堂課 四六四

我等の靈に大なる憐を賜はんことをハリストスに求むべし。

光榮、今も、生神女讚詞。

生神童貞女よ、爾の諸僕を災禍より救ひ給へ、我等皆爾を破られぬ牆及び轉達として、神の次に爾に趨り附けばなり。

次ぎて「主宰よ、今爾の言に循ひて」。聖三祝文。「天に在す」の後に讚詞、及び發

放詞。



金曜日の晩堂課

至聖なる生神女に奉る祈禱の規程。第二調。

第一歌頌

イルモス、人人よ、來りて、海を分ちて、エジプトの奴隷より引き出しし民を過らせしハリストス神に歌を歌はん、彼光榮を顯したればなり。

生命の首及び主を生みし潔き童貞女母よ、爾は生命の泉と爲りて、信を以て爾を讚揚する衆人の生命を潤し給ふ。

無垢無玷なる童貞女よ、我等爾を生神女と承け認むる者は爾を保固及び慈憐なる轉達者として獲て、生命の暴風より救はる。 **光榮**

不死の生命を生みし獨神の恩寵を蒙れる少女よ、諸愆に傷つけられし我を醫して、永遠の火より脱れしめ給へ。 **今も**

信者の避所、爾に趨り附く者の有能の扶助たる永貞童女よ、我等を凡の危難及び敵の侵害より救ひ給へ。

第三歌頌

イルモス、木を以て罪を殺しし主よ、我等を爾の中に堅めて、爾を畏るる畏を我等、爾を歌ふ者の心に植え給へ。

童貞女よ、我等爾を實に黄金の香爐、「マンナ」の壺、神聖なる山、神の美しき宮と稱ふ。

言の殿及び聖ににせられし居處たる至聖なる生神童貞女よ、常に我が爲に諸罪の潔淨と爲り給へ。 **光榮**

生神女よ、地上の者の舌も、無形の者の智慧も爾の産を述ぶる能はず、爾は天性及び智慧に超えて造成主を生みたればなり。 **今も**

第二調 金曜日の晩堂課 四六五

第二調 金曜日の晩堂課 四六六

生神童貞女よ、信を以て爾に趨り附きて、爾を神の母と承け認むる者の爲に保固と避所及び庇覆と爲り給へ。

第四歌頌

イルモス、人を愛する主よ、我爾の光榮なる攝理を聞きて、爾の悟り難き能力を讚榮せり。

生神女よ、我等「ハリストティアニン」等は爾を大なる援助として獲たり。我等を甚しき患難より脱れしめ給へ。

婚姻に與らざる女宰、神を胎内に孕みし者よ、我等衆を菑害及び憂患より救ひ給へ。

光榮

いさぎよ しょうしんじょ われら しんじゃ なんじ てき しんがい おい やぶ かき およ ゆうのう たのみ
潔き生神女よ、我等信者は爾を敵の侵害に於て壞られぬ墻及び有能なる憑恃として
獲たり。

今も

じょさい われら なんじ きとう けんご もとい え もるもろ うれい たす
女宰よ、我等は爾の祈禱を堅固なる基として獲て、諸の憂患より援けらる。

第五歌頌

イルモス、ひかり たま よよ つく しゅ なんじ いましめ ひかり うち われら みちび たま われら なんじ
イルモス、光を賜ひ、世世を造りし主よ、爾の誠の光の中に我等を導き給へ、我等爾
の外に他の神を識らざればなり。

かみ はは われら しんじゃ なんじ たね み と うま こ まこと かみ およ じつせい ひと
神の母よ、我等信者は爾より種なく身を取りて生れし子の眞の神及び實性の人なる
を知れり。故に爾を讚榮す。

しじょう どうていじょ われら しんじゃ しん もつ つね なんじ おおい およ ほご もと はし つ なんじ
至淨なる童貞女よ、我等信者は信を以て常に爾の庇覆及び保護の下に趨り附きて、爾
に依りて凡の敵の侵害より救はる。

光榮

しじょう どうていじょ われら いぎない みだ およそ いかり およそ つみ ききん えきびょう およ
至淨なる童貞女よ、我等を誘惑と擾れたる意思、凡の怒と凡の罪、饑饉と疫病、及
び永遠の苦より脱れしめ給へ。

今も

われら てんたつしや すくい たのみ ら じょさい きんび どうていじょ あい
我等の轉達者と拯救と特頼なる「ハリストティアニン」等の女宰、讚美たる童貞女よ、愛
を以て常に忠信に爾を歌頌する者を救ひ給へ。

第六歌頌

イルモス、われ つみ ふち おぼ なんじ あわれみ はか がた ふち よ かみ われ ほろび ひ
イルモス、我罪の淵に溺れて爾が憐の量り難き淵に呼ぶ、神よ、我を淪滅より引き
上げ給へ。

おのれ むね もつ ばんぶつ つく しゅ その むね もつ こんいん あずか もの たいない い きゆうかい
己の旨を以て萬物を造りし主は其旨を以て婚姻に與らざる者の胎内に入りて、朽壞
を以て病める者を、慈憐なるに因りて、不朽にて富まし給へり。

じゅんけつ もの なんじ てんじょう ぐん うえ せい い ことば せい こ なんじ
純潔なる者よ爾は天上の軍より上にして聖なり、容れられぬ言を性に超えて爾の
胎内に容れたればなり。

光榮

じょさい われ いのち みち まよ ししば つみ ぶどう い もの つうかい みち むか たま
女宰よ、我生命の道に迷ひて、屢罪の無道に入る者を、痛悔の道に向はしめ給へ。

第二調 金曜日の晩堂課 四六七

第二調 金曜日の晩堂課 四六八

今も

いさぎよ じょさい われら なんじ たのみ お なんじ しょぼく きとう す なか なんじ たましい ため
潔き女宰よ、我等爾に特頼を負はせし爾の諸僕の祈禱を棄つる勿れ、爾は靈の爲
に避所及び潔淨なればなり。

次ぎて主憐めよ、三次。光榮、今も、

坐誦讚詞、第二調。

しょうしんじょ なんじ たね ことば はら あらた おさなご ゆいいち こ なんじ ぞうせいしゅ
生神女よ、爾は種なく言を孕みて、新なる嬰兒、唯一の子ハリストス、爾の造成主
を生み給へり。故に我等爾を崇め讚む。

第七歌頌

イルモス、こがね ぐうぞう の ほうじ とき なんじ みにたり しょうしや かみ さか めい
イルモス、黄金の偶像がデイルの野に奉事せられし時、爾の三人の少者は神に逆ふ命
を顧みずして、火の中に投げられ、涼しくせられて歌へり、我が先祖の神よ、爾は崇
め讚めらる。

神の恩寵を蒙れる女宰よ、爾は至聖神の力に因りて、神父と一性なる子、身を取りし者を生み給へり。彼に絶えず祈りて、身にて神を生みし者は崇め讃めらると歌ふ我等に慈憐を垂れ給はんことを求め給へ。

墮落する者の更新、罪を犯す者の拯救たる婚姻に與らざる至淨至聖なる童貞女よ、我放蕩の者を救へ、爾の子に、身にて神を生みし者は崇め讃めらると呼ぶ者を救ひ給へ。

光榮

禍に遭ひ、憂に苦しむ者の爲に堅固なる避所、威嚴なる轉達者、壞られぬ墻たる生神女よ、爾の子に奉る祈祷を以て爾の諸僕を多種の誘惑より救ひ給へ。

今も

信者の唯一の恃頼及び祐助なる神の母よ、哀に沈められ、諸方より攻められ、諸病を患ふる爾の諸僕、靈の愛を以て爾に趨り附く者を急ぎて助け給へ。

第八歌頌

イルモス、火の爐の中にエウレイの少者に降りて、焰を露に變ぜし神を、造物は主として歌ひて、萬世に崇め讃めよ。

生命の水を生みし者として實の生活の泉たる生神童貞女よ、罪の焰に焚かれたる吾が靈に露を注ぎ給へ、我が爾を萬世に崇め讃めん爲なり。

生命の首ハリストス我が神を生みし唯一の女宰、崇め讃めらるる潔き童貞女よ、殺されて死及び朽壞の塵に下されたる者を爾起し給へり。

光榮

潔き女宰よ、我を永遠の火及び定罪より脱れしめ、我を悪を爲す人人、我を躓かしめんと謀る者より援け給へ、我が常に爾萬物に讚美せらるる者を敬虔に讚美せん

第二調 金曜日の晩堂課 四六九

第二調 金曜日の晩堂課 四七〇

爲なり。 **今も**

潔き童貞女よ、至上の神は爾より身の形を受けたる者として見られたり。彼に我等悪の中に棲みて永遠の苦に慄く者を憐まんことを絶えず祈り給へ。

第九歌頌

イルモス、食に縁りて甚しく朽壞に陥りしアダムの言ひ難き智慧を以て改めん爲に神より來りし神言、我等の爲に測り難く聖なる童貞女より身を取りし主を、我等信者は同心に歌を以て崇め讃む。

爾より身を取りし仁慈なる神を言ひ難く生みたる唯一の少女よ、我を神聖なる仁慈を蒙るに勝ふる者と爲して、愛を以て爾を讚榮する者を將來の焰及び凡の苦より脱れしめ給へ。

讚美たる者よ、我等皆獨爾を堅固なる轉達者と恃頼、垣墻と基址、確なる庇覆と破られぬ城、穩なる港と堅き避所として得て救はる。

光榮

光を生みし童貞女、讚美たる女宰よ、吾が靈の雲を拂ひて、我に救を爲す仁愛、言ひ難く爾の至聖なる腹より輝き出でて萬民を照しし者を明に見るを得しめ給へ。

今も

神聖なる光を生みし少女よ、諸愆の多くの侵害と悪敵の謀とに味まされたる吾が心を照し給へ。童貞女よ、我を罪の汚より潔むる涙の点滴を常に我に與へ給へ。

次ぎて「常に福にして」、及び躬拜。聖三祝文。「天に在す」の後に讃詞、及び其他常例の如し、並に發放詞。



「スポタ」の早課

第一の誦文の後に致命者の坐誦讃詞、第二調。

聖人等は世に在りて爾雲を以て天を覆ふ主を己の衣と爲して、不法者より受くる苦を忍び、偶像の迷を空しくせり。救世主よ、彼等の祈祷に由りて、我等をも見えざる敵より脱れしめて救ひ給へ。

句、神よ、爾は爾の聖所に於て嚴なり。

使徒、致命者及び預言者、成聖者、克肖者及び義人等、善き戦を戦ひ、信を守りし者よ、祈る、爾等は救世主の前に勇を有ちて、其仁慈なるに因りて、彼に我等の

第二調 「スポタ」の早課 四七一
第二調 「スポタ」の早課 四七二

靈の救はれんことを祈り給へ。

句、彼等の靈は福に居らん。

神として死せし者及び生ける者を其權内に有ち給ふ生命を施す仁愛の主よ、爾の諸僕の祈を納れ、爾の慈憐を顯して、爾が遷しし靈、爾を頼める者に赦免を與へ給へ、爾は仁慈にして至善なる主なればなり。

光榮、今も、生神女讃詞。

生神女よ、爾の奧義は皆智慧に超ゆ、皆至榮なり。貞潔の封ぜられ、童貞の守らるるに、爾は實の母と知られて、眞の神を生み給へり。彼に我等の靈の救はれんことを祈り給へ。

第二の誦文の後に坐誦讃詞、第二調。

ハリストス神よ、爾は至善なる主として、爾の聖者を黄金よりも耀く者と爲し、爾の克肖者の榮を顯せり。仁慈なる主として、彼等の祈祷を納れて、我等の生命を平安ならしめ給へ。獨聖者の中に休ふ主よ、我等の祈を香爐の香の如く升らしめ給へ。

句、神よ、爾は爾の聖所に於て嚴なり。

主の受難者よ、爾等の血を呑みし地は福なり、爾等の體を受けし殿は聖なり、蓋爾等は審判に於て敵を辱め、ハリストスを勇ましく傳へたり。祈る、其至善の主なるに因りて彼に我等の靈の救はれんことを求め給へ。

句、主よ、爾が選び近づけし者は福なり。

主よ、爾至仁なるに因りて爾の諸僕の靈を記念して、其生涯犯しし罪を悉く赦し給へ。蓋罪なき者あらず、唯爾は罪なし、且爾は遷されし者に安息を與ふることを能するなり。

光榮、今も、生神女讃詞。

贖罪主及び救世主ハリストスを生みし生神童貞女マリヤよ、彼の仁慈に、諸使徒、致命者、預言者、克肖者、及び神品致命者と偕に祈りて、我等に諸罪の潔淨及び大なる憐を賜はんことを求め給へ。

聖致命者、成聖者、克肖者、及び死者の規程、其冠詞は、神の諸僕近者に讚美を歸す。
イオシフ師の作、第二調。

第一歌頌

イルモス、靈よ、モイセイの歌を採りて籲べ、佑け護る者顯れて、我が救と爲れり、彼は吾が神なり、我彼を讚め揚げん。致命者の
受難者よ、爾等は恒忍を以て甚しき窘逐及び烈しき創痕を受けて、神聖なる力を

第二調 「スポタ」の早課 四七三

第二調 「スポタ」の早課 四七四

以て地の四極より凡の迷を逐ひ拂へり。成聖者の
神の聖務者及び成聖者、神靈の光にて明に輝き、敬虔に満てられたる者は衆人を敬虔の光に導き給ふ。克肖者の

克肖者は傲慢なる智慧を卑くして、善なる地に至り、神の恩寵に擧げられて、常に悉くの謙卑の者を助け給ふ。死者の。光榮、
至仁なる我が神よ、爾が暫時の生命より遷しし爾の信なる諸僕を、至りて輝ける光及び永遠の樂に與る者と爲し給へ。

生神女讃詞

神の母よ、禁食勤勞して、恒忍を以て悪敵に勝ちし尊貴なる女等は喜びて爾の前に立ち給ふ。

又死者の規程、月課經の規程なき時に序を逐ひて之を歌ふ、其冠詞は、死せし者に第二の歌を綴る。第二調。

第一歌頌

イルモス、己の神聖なる命を以て涉られぬ、濤たつ海を涸らし、イブライリ民を導きて憑せしめし主に歌はん、彼嚴に光榮を顯したればなり。

附唱、神よ、爾は爾の聖所に於て嚴なり。

仁慈なる主よ、爾は己の死を以て死を踏み破りて、神聖なる生命の常住を流し給へり。之を寝りし者の靈に予へて、爾の致命者の祈祷に由りて彼等の諸罪を赦し給へ。

附唱、主よ、寝りし爾の諸僕の靈を安ぜしめ給へ。

常に敬虔を懷きて爾を承くる者に絶えず豊なる慈憐を流す主宰ハリストスよ、爾の

家、爾の奇異なる幕に於て爾の諸僕に安息の處を與へ給へ、爾は慈憐の主なればなり。
光榮

ハリストスよ、爾は有能を以て死に勝ちて、之を縛り、人類を之より救ひ給へり。今も慈憐なるに因りて、寝りし者を其囹圄より脱れしめて、彼等を爾の光に與る者と爲し給へ。
今も

神の母女宰よ、我が動ける靈を堅めて、之に爾の聖にせられし腹より生れて、地獄の昏き國を滅しし主の神聖なる誠を行はしめ給へ。

第三歌頌

イルモス、諸善を耕作し、諸徳を培養する神よ、爾の慈憐に因りて、實を結ばざる我が智慧を實を結ぶ者と顯し給へ。

嗚呼受難者よ、爾等はハリストスを愛する愛の火に燃されて、全能なる聖神の灌ぐ

第二調 「スポタ」の早課 四七五

第二調 「スポタ」の早課 四七六

を以て苦の火焰を滅し給へり。

ハリストスの至聖なる成聖者及び克肖者の尊貴なる會よ、我等衆の爲に人を愛する神に祈り給へ。

神聖なる預言者の聖にせられし會は崇められ、忍耐して苦を受けし女の大數は光榮を獲たり。
光榮

ハリストスよ、爾は十字架に殺されて、死者に不死を賜へり、之を信を以て世を去りて爾に逝きし者に獲しめ給へ。
今も

童貞女よ、爾より生れし神に、諸預言者及び聖なる女等と偕に、今熱切に我等に慈憐を垂れんことを祈り給へ。

又

イルモス、爾我を信の石に堅く立て、我が口を啓きて我が敵に對はしめ給へり。蓋我が神は樂しみて歌へり、吾が神と侔しく聖なるはなく、主よ爾の外に義なるはなし。

慈憐に富める主よ、信に於て寝りし者を爾の致命者と偕に爾の華美の光明にて照さるるを得しめ給へ。蓋主よ、爾は我等の神にして爾の外に義なるはなし。

慈憐なる主よ、爾の諸僕をして安息の處に、爾の選びたるアウラムの懷に居るを得しめ給へ。蓋彼等は爾に呼ぶ、主よ、爾は我等の神にして、爾の外に義なるはなし。

光榮

獨一仁愛なる主宰よ、爾の旨を以て暫時の生命より遷しし爾の諸僕、燈を執れる者を天上の宮に、彼處に入りし智き處女と偕に居るを得しめ給へ

今も

至淨なる者よ、爾は生を施す主を生みて、我殺されて土に歸されたる者を興して、至りて下なる地獄より上せ給へり。故に我信を以て爾生神女を讚榮し、爾讚美たる者

あが ほ
を崇め讃む。

第四歌頌

イルモス、預言者は爾が童貞女より生るるを預見して、傳へて呼べり、ハリストスよ、我爾の風聲を聞きて懼れたり、蓋爾は南より、樹蔭繁き聖山より來給へり。至榮なる受難者よ、爾等は善くハリストスの苦に效ひて、多種の苦に身を委ね、喜びて永遠の報に目を注げり、爾等は此を受けて常に讚美せらる。司祭諸長は神の法を守りて、睿智を以て人人を牧し、至りて巧なる舵師として彼等

第二調 「スポタ」の早課 四七七

第二調 「スポタ」の早課 四七八

を神聖なる港に導き、自も世俗の累より移りて、平安の生命に至れり。神父等よ、爾等は地に在りて己を寄寓者と爲し、常に天を望みて生を度り、禁食の勞を以てハリストスの力に依りて肉慾を制し給へり。主宰言よ、爾が暫時の生命より移し大數の人人、正教を守りて爾に奉事せし者を救はるる衆の數に加へて、永遠の生命を獲しめ給へ。

光榮

至淨なる女宰神の母よ、尊き女等は神聖なる死の状を佩び、實に終なき生命を慕ひて、爾に依りて之を得て、我等の爲に爾の子及び神に祈る。

生神女讚詞

生神女よ、預言者アウラクムは爾諸徳にて飾られたる者を樹蔭繁き山として見たり、神は言ひ難く是より現れて、其徳を以て天を覆ひ、人の族を朽壞より救ひ給へり。

又

イルモス、主よ、我爾を歌ふ、蓋風聲を聞きて懼れたり、爾は我迷へる者を尋ねて、我にまで至ればなり。故に慈憐深き主よ、我に於ける爾の大なる寛容を讚榮す。

ハリストスよ、信と愛と正教の智慧とを以て世を度りし爾の諸僕に、爾の深き仁愛と選ばれたる致命者の祈祷とに因りて、智慧に超ゆる爾の光榮を蒙らしめ給へ。

主ハリストスよ、爾は甘味の絶えず流るる泉を有ちて、選ばれたる者に常に之を飲ましむ、彼等と偕に今も爾に移されたる者に爾の言ひ難き慈憐に因りて之を飲むを得しめ給へ。

光榮

主宰よ、爾は生ける者を主る、死せし者も爾の權内に在り、地に還りて塵と爲りし者を爾は己の力を以て復活せしむ。故に救世主よ、爾に遷りし者を爾の庭に居らしめ給へ。

今も

神を生みし者、唯一の母童貞女よ、爾はエワの傷を醫し、古の困苦を除けり、蓋罪過に由りて墮落せし我等を改むることを能する造成主を生み給へり。

第五歌頌

イルモス、我が救世主よ、我が靈の黒暗を掃ひて、爾の誠の光にて我を照し給へ、爾獨平安の王なればなり。

慈憐の主よ、勇敢なる受難者は爾を愛して、一切世俗の事を惡み、己を棄てて、身を苦しみに委ねたり。

第二調 「スポタ」の早課 四七九

成聖者預言者、克肖なる捧神者よ、爾等は神靈の光線を以て世界を照して、諸慾の暗を除き給ふ。

第二調 「スポタ」の早課 四八〇

克肖なる神父、預言者、司祭諸長、及び常に光榮なる女等は爾萬有の主宰に我等の爲に熱切に祈る。

光榮

言よ、爾に祈る、我等より受けし者を爾の選びたる者の會に加へて、天上の生命に與る者と爲し給へ。

今も

致命者と克肖者と義人等との譽なる至りて潔き童貞女母よ、我等を凶悪者の凡の毒害より脱れしめ給へ。

又

イルモス、光を賜ひ、世世を造りし主よ、爾の誠の光の中に我等を導き給へ、我等爾の外に他の神を識らざればなり。

仁慈なる主よ、爾は我等殺されて、朽壞の中に入れられし者を地獄の暗き囹圄より出し、上せて聖なる天使の軍に合せ給へり。

我等を救はん爲に來りしハリストスよ、今敬虔を抱きて爾に遷されし者を受けて、獨仁慈の主なるに因りて、之をアウラアムの懷にラザリと偕に居らしめ給へ。

光榮

主宰よ爾は曩に和睦の媒及び轉達者と爲りて、我が多年の永き不和を釋き給へり、今も爾の諸僕を宥めて安息せしめ給へ。

今も

神の母よ、爾を頼む者は爾の幃の下に救はる、蓋爾は我等の爲に生命を施す主、其旨に由りて萬衆を生かす者を生み給へり。

第六歌頌

イルモス、救世主よ、我罪の深處に圍まれ、世俗の淵に沈めらる。求むイオナを猛獸より救ひし如く、我をも諸慾より引き上げて救ひ給へ。

受難者は堅固なる心を以て敵と戦ひて、之を殪し、神より勝利の榮冠を受けて、今地に生る衆人の爲に熱切に祈る。

我等は忠信に神の成聖者を尊み、彼の克肖者を讚美せん、蓋彼等の祈祷に因りて、凡の忿怒、憂愁、及び敵の悪謀より救はる。

女の神聖なる會は苦を受け、禁食を以て神の悦を得て、天國を繼ぎたり。神よ、彼等の祈祷に因りて爾の世界を宥め給へ。

光榮

人を土より造りしハリストス、生命を施す主よ、我等より移しし者を安ぜしめて、

第二調 「スポタ」の早課 四八一

第二調 「スポタ」の早課 四八二

かれら ざいあく ゆるし あた たま なんじ じれん ひと あい しゅ
彼等に罪惡の赦を與へ給へ、爾は慈憐にして人を愛する主なればなり。

今も

さんび せい しやうしんじよ われら おもい せい ちえ かた なんじ さんえい さんしやう われら
讚美たる聖生神女よ、我等の志念を聖にし、智慧を堅め、爾を讚榮讚頌する我等を
きやうあくしや や きず もの まち たま
凶悪者の矢に傷つけられぬ者として護り給へ。

又

イルモス、われ つみ ふち おぼ なんじ あわれみ はか がた ふち よ かみ われ ほろび ひ
イルモス、我罪の淵に溺れて、爾が憐の量り難き淵に呼ぶ、神よ、我を淪滅より引
きあげ給へ。

ひと あい しゅ ち うつ もの なんじ ぜんのう むね もつ い がた しんせい こうしやう
人を愛する主よ、地より移しし者を爾の全能の旨を以て言ひ難き神聖なる光照、
ちめいしや かい あ ところ い たま
致命者の會の在る處に入らしめ給へ。二次。

光榮

しゅさい か よ はな もの なんじ い がた ひかり うつ もの な これ あんそく
主宰よ、斯の世を離れたる者を爾の言ひ難き光に移りし者と爲し、之を安息せしめ
て、爾の光榮の華美に照さるるを得しめ給へ。今も

しやう し つかさど かみ う しじやう じよさい ねっしん なんじ よ しやう たす もの な たま
生と死とを司る神を生みし至淨なる女宰よ、熱心に爾に呼ぶ衆を助くる者と爲り給
へ。

第七歌頌

イルモス、しやうしや いろり うち なら いわ よ かみ なんじ あが ほ
イルモス、少者は爐の中にヘルウィムに效ひて、祝ひて呼べり、神よ、爾は崇め讃め
らる、蓋眞實と義判とに縁りて、悉く之を我等の諸罪の爲に降せり、爾は萬世に歌
はれ、讃め揚げらる。

せい もの われら つみ ため くるしみ う かみ じつ あい よ およそ かげ くるしみ
聖なる者は我等の罪の爲に苦を受けし神を實に愛するに因りて、凡の烈しき苦の
いざない しの にんたい もつ てき たお ことば かれら きとう よ われら しやう なんじ さんえい
誘惑を忍びて、忍耐を以て敵を斃せり。言よ、彼等の祈祷に由りて、我等衆、爾を讚榮
する者を 諸の誘惑及び苗害より救ひ給へ。

かがや せいせいしや こくしやうしや およ よげんしや しんびん ちめいしや こうえい たいすう くらん きんしよく もつ
輝ける成聖者、克肖者、及び預言者、神品致命者の光榮なる大數、苦難と禁食とを以
て雄雄しく輝きし聖なる女の聖にせられし會よ、常に我等の爲に神に祈を奉りて、
われら あわれ もと たま
我等を憐まんことを求め給へ。

おんしゅ おんしゅ せい たいすう きとう よ われ ほろ もの もろもろ うれい わざわい かげ
ハリストス恩主よ、致命者の大數の祈祷に因りて、我滅びし者を 諸の憂愁、苗害、烈
しき誘惑、悉くの罪、及び苦惱より救ひ給へ。光榮

ひと あい やまい なげき かなしみ かい ところ なんじ かんばせ ひかり かがや
人を愛するハリストスよ、疾病と歎息と悲哀との遠ざかれる處、爾の顔の光の輝
く處、聖人の會の今楽しむ處に、爾に移りし衆人の靈を入れて、爾獨慈憐なる主
として彼等の 悉くの罪過を問ふこと勿れ。今も

第二調 「スボタ」の早課 四八三

第二調 「スボタ」の早課 四八四

しじやう もの ちめいしや しょう かみ ちち もろもろ よげんしや およ せい おんなたち とも ひとり せいしや
至淨なる者よ、致命者と、克肖なる神父と、諸預言者及び聖なる女等と偕に獨聖者
のうち いこ たま しゅ いの われら しやうせい こえ もつ ばんせい なんじ さんえい もの せい
の中に息ひ給ふ主に祈りて、我等衆聖なる聲を以て萬世に爾を讚榮する者を聖にせん
ことを求め給へ。

又

イルモス、ふほう しいげびと かみ もと めいれい たか ほのお おこ ほ うた
イルモス、不法なる虐者の神に戻る命令は高き焰を起したれども、讃め歌はるる

リストスは敬虔の少者に屬神の露を降し給へり。

在らざる所なき主よ、爾は昔誘はれたる人類を救はん爲に降り給へり。故に致命者は爾に祈る、救世主よ、地より移しし者を溫柔なる者の地に安息せしめ給へ。

獨死者の中に自由たりしハリストスよ、爾は死の權を滅し給へり。主宰よ、今も罪に由る死より爾の諸僕を救ひて、彼等を爾の國を嗣ぐ者と爲し給へ。

光榮

ハリストスよ、爾の多くの言ひ難き慈憐及び爾の仁愛の無量の淵に由りて、移されし者に諸罪の赦を與へて、爾の恩寵にて彼等を潔められし者と顯し給へ。

今も

神の恩寵を蒙れる童貞女よ、爾は神聖なる光榮の燈と爲れり、神と肉とを以て我等に現れて、其神性の光にて地獄の暗を除きし主の輝煌を顯したればなり。

第八歌頌

イルモス、昔シナイ山に於て棘の中にモイセイに童貞女の奇跡を預め示しし者を尊み歌ひ、崇め讃めて、萬世に讃め揚げよ。

主の受難者よ、爾等の血の灌注は萬物を聖にし、迷惑の流を涸らし、信者の靈を豊に潤せり。

禁食者の群、成聖者、聖なる女、及び光榮なる預言者の會は、地上に神を以て天使の如く生を度りて、諸天使と同尊なる者と現れたり。

主の受難者、司祭諸長、諸預言者、大數の克肖者及び聖なる女よ、我等衆爾等を崇め讃むる者を敵の矢より脱れしめ給へ。

光榮

救世主よ、爾が我等より受けし者をアウラアムの懷に居らしめ、悉くの選びたる者と偕に安息せしめて、彼等衆に諸罪の赦を與へ給へ、爾は至りて慈憐なる主なればなり。

今も

潔き神の母よ、聖なる諸預言者、致命者、克肖者、聖なる女及び神品致命者と偕

第二調 「スポタ」の早課 四八五

第二調 「スポタ」の早課 四八六

に救世主に我等を宥めんことを祈り給へ。

又

イルモス、昔ワワイロンワワイロンの火の爐は神の命によりて其勢を分ち、ハルデイを焦して、信者を涼しくせり、主の悉くの造物は主を崇め讃めよと歌へばなり。

爾は不死の者として、地獄に下るを以て我等に諸敵の死を顯し、神聖なる力を以て、不死の主よ、爾は永生の門を啓き給へり。爾の致命者は宜しきに合ひて今此に入るを得たり。

主宰よ、爾は人を愛する者として移されし者の耻づべき罪惡を潔めて、彼等に爾の神靈の華美を樂しむを得しめ給へ、爾獨罪に與からざる者と顯れたればなり。

光榮

ハリストスよ、爾は死の塵に陥りし我等を改めて、爾の死を以て生命と、永生の糧と、永遠の悦とを賜へり。之を今移されし者に得しめ給へ、爾は慈憐なる主なればなり。

今も

神の母よ、爾の産の奥密は大にして畏るべし、蓋爾は神を生み給へり、死は彼に勝へざりき、墓は留めざりき。故に至浄なる者よ、我等萬族は爾を讚榮す。

第九歌頌

イルモス、我等信者は、父より永遠に光れる言を身にて測り難く孕みし者を、息めざる歌を以て崇め讚む。

受難者よ爾等は苦に對して堅固、敵に對して有能なる者と顯れて、法に遵ひて苦を受け、勝利を獲て、神より榮冠を冠らせられたり。

至榮なる司祭諸長よ、爾等は神の聖務者として、善き牧者に效ひて、克く其羊群を牧し給へり。

我等は克肖者、禁食者、及び聖にせられし預言者、並に苦を受け、禁食を以て敵を斃しし女の大數を尊まん。

光榮

ハリストスよ、爾の聖者の至榮なる大數は絶えず爾に祈る、主よ、信に於て移しし者を永遠の生命に與る者と爲し給へ。

今も

洪恩なる神を身にて生みし潔き母童貞女よ、衆聖人と偕に彼に我等を諸難より救はんことを常に祈り給へ。

又

イルモス、日より前に光り輝きし神、肉體にて我等に臨みし者を、貞潔の腹より言ひ難く生みし讚美たる至浄き生神女よ、我等爾を崇め讚む。

第二調 「スポタ」の早課 四八七

第二調 「スポタ」の早課 四八八

生死者を己の權内に有ち給ふ生命の首たる主宰よ、地より爾に移りし者に天の嗣業、及び爾の聖者と至榮なる受難者との光照を與へ給へ。

昔我に存在を與へ、後又更に善き存在を賜ひし生命の首たる言よ、慈憐なる主として、移りし爾の諸僕を太祖アウラアムの慕ふべき懷に居らしめ給へ。

光榮

我が救世主よ、爾は全く甘味及び光明、全く飽かされぬ望なり。絶えず爾を讚榮して寝りし者に爾の永生の糧を與へ、赦罪の水を飲ましめ給へ。

今も

生神女よ、我等信者は神より感ぜられたる爾の言に従ひて、今宜しきに合ひて爾を讚美す、蓋童貞女母よ、爾は獨地上の者の爲に死の力を破りし神を生み給へり。

次ぎて「常に福にして」、小聯禱、本日的光耀歌、及び常例の聖詠。

「凡そ呼吸ある者」に致命者の讚頌、第二調。

嗚呼受難者致命者よ、爾等はハリストスの爲に死に至るまで苦を受けしに因りて、

なんじら たましい てん かみ て あ なんじら ふきゅう たい ぜんせかい どうと しょ さいし しょう うれし
爾等の靈は天に神の手に在り、爾等の不朽の體は全世界に尊まれ、諸司祭諸王は之
に伏拜し、我等人人皆悦びて同心に呼ぶ、聖人の寢は主の目の前に貴し。
ああ じゆなんしや ちめいしや およそ まち ちほう なんじら ふきゅう たい どうと けだし なんじら ほう したが
嗚呼受難者致命者よ、凡の城邑と地方とは爾等の不朽の體を尊む、蓋爾等は法に遵
ひて苦を忍びて、天の榮冠を受けたり。故に爾等は成聖者の譽、諸王の勝利、諸教會
の裝飾なり。

せい ちめいしや じゅうじか か ぶき と あくま ちから ことごと ほろぼ
聖なる致命者はハリストスの十字架を勝たれぬ武器と執りて、悪魔の力を悉く滅
し、天の榮冠を承けて、我等の爲に垣牆と爲りて、常に我等の爲に祈り給ふ。

死者の讚頌

ああ たましい たい わか とき くるう いかばかり ああ こ とき なみだ なが いくばく ただこれ あわれ
嗚呼靈が體に別るる時、苦勞如何許ぞ、噫嘻斯の時、涙を流すこと幾何ぞ、唯之を憐
む者なし、天使等に目を擧ぐるも祈るに驗なく、人人に手を伸ぶるも扶くる者なし。故
に我が愛すべき兄弟よ、我等の生の短きを念ひて、世を逝りし者に安息を、我等の靈
におおい あわれみ とも
に大なる憐を賜はんことをハリストスに求むべし。

光榮、今も、生神女讚詞。

きた みなもだ うた もつ ひかり ほは さんえい かれ われら すくい う
來りて、皆默さざる歌を以て光の母を讚榮せん、彼は我等の救を生みたればなり、
かれひとり ばんゆう うえ しゅ よ さき いま かみ う もの よろこ ささ おちい
彼獨、萬有より上なる主、世の先より在す神を生みし者に慶べよを獻げん。陥りし
エワを興しし者よ、慶べ、婚姻に與らざる至淨なる童貞女よ、慶べ。

第二調 「スボタ」の早課 四八九

第二調 「スボタ」の早課 四九〇

挿句に死者の讚頌、第二調。

しゅさい なんじ いのち ほどこ なんじ し もつ し ちから きゅうかい ほろぼ しゅう えいえん いのち なが
主宰よ、爾は生命を施す爾の死を以て死の力と朽壞とを滅し、衆に永遠の生命を流
し、地上の死者に復活を賜へり。故に我等爾に祈る、人を愛する救世主よ、信を以
て爾に移りし者を安ぜしめて、之に爾の不朽の光榮を獲しめ給へ。

句、主よ、爾が選び近づけし者は福なり。

ハリストスよ、爾は人人を爾の神聖なる國に與る者と爲さん爲に十字架に釘せらる
るを忍び、甘じて死を受け給へり。故に我等爾に祈る、人を愛する主よ、爾の慈憐
に由りて、信を以て爾に移りし者を爾の國に與る者と爲して、甘味なる華美を樂し
ましめ給へ。

句、彼等の靈は福に居らん。

至仁なる主よ、爾は己の造物を救はんと欲して、喜びて爾の定制の實に畏るべき奥密
を行ひ、爾の尊貴なる血の價を以て全世界を贖ひ給へり。故に我等祈る、信を以て爾
に移りし者に衆聖人と偕に救を得しめ給へ。

句、彼等の記憶は世に在らん。

ハリストスよ、古世よりの死者は慄きて爾の畏るべき審判座の前に立ち、爾の義な
る審判を待ちて、神聖なる擬定を受く。救世主よ、其時信を以て爾に移りし爾の諸僕
を聖者の會及び言ひ難き歡喜の在る處に安ぜしめ給へ。

光榮、今も、生神女讚詞。

